

川柳塔

昭和四十一年一月九日第三郵便物認可
平成五年七月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷七九四号



日川協加盟

No. 794

同人特集・出 会 い

七月号

『川柳塔』 800号記念誌上川柳大会

課題と選者 各題2句

「大 空」 橋 高 薫 風

「スタート」 斎 藤 大 雄

「妻」 工 藤 甲 吉

「嘘」 大 木 俊 秀

「時計」 森 中 恵 美 子

「雑 詠」 黒 川 紫 香

○投句料 10000円（発表誌郵送）

○賞 各題の秀句各3句に呈賞

○締 切 9月30日（木）

○発 表 『川柳塔』八〇〇号

（平成6年1月1日発行）

○投句方法

各題ごとに別紙に2句ずつと住所・

氏名（雅号）を明記し、投句料を同

封して左記へ

〒545 大阪市阿倍野区三明町2-10-16

ウエムラ第2ビル202号室

川柳塔社 誌上川柳大会係

西尾 栞・橋高薫風句碑

建立除幕式と記念句会

橋高薫風理事長句碑

刻 句 島一つ買うて暮らせば涼しかる

建立地 香川県大川郡白鳥町白鳥中央公園

除幕式 8月21日（土）午後2時半から

西尾 栞主幹句碑

刻 句 温泉や座り羅漢に寝る羅漢

建立地 香川県大川郡白鳥町白鳥温泉

除幕式 8月21日（土）午後3時半から

記念句会

と き 8月22日（日）午前9時開場

と ころ 白鳥町立公民館

兼題と選者（各2句）

「川」 田 中 子 開選

「松」 松 村 迷観子選

「浜」 黒 川 紫 香選

会 費 15000円（昼食・発表誌呈）

主 催 川 柳 塔 社

川柳塔おっぱい吟社

新茶

西尾 栞

テレビは今日のニュースで、お茶壺道中を放映している。宇治から江戸まで昔ながらの装束で轆を立てて、十五日かけて徒歩で東海道を上ってゆく。

その日、静岡県中川根町のBさんから、かの有名な川根茶の走り茶が届いた。

駿河路や花橘も茶の匂い 芭蕉

芭蕉が東海道の島田辺りで詠んだ句で諸所に咲く花橘の芳香より新茶の香りの方が一層、魅力があったという一句である。

新茶の香真昼の眠気転じたり 一茶
さわやかな新茶の香りは、眠気をさますものである。

新茶入れて雨しみじみときく夜かな

鶯塘

参らせん親はいまさぬ新茶かな 寅彦
新茶の香りは心にしみてくる。

卯の花と新茶鯉の釣りで買い 柳75

夏の到来を告げる卯の花と新茶とを、高価な初鯉を買った釣り銭で買うという句だが、何はさて初夏ともなれば新茶売が歓迎された。

四里四方見てきたような新茶売り

柳1

茶の名産地の宇治や静岡から来た行商人であることを看板にしていたから、上方や東海道の話をさかんにした。

昔、巷に料理茶屋、出合茶屋などに対して、水茶屋というのがあった。現在の喫茶店のように、お茶をのませるところだった。

さわらは落ちん風情にて茶屋はやり

柳5

はじめは洪茶を飲ませる程度だったが、次第に高級な茶を使うようになり、美しい茶汲み女を置いて客を呼ぶようになった。

水茶屋の娘の顔で下す腹 拾2

茶を五六十杯のんで手を握り 拾2

「さわらは落ちん風情」につられて、

ねばる客の方も楽でなかった。

裏表ある水茶屋ははやるなり 柳21

なかには、表はヨシズ張り店構えでありながら奥の方には座敷を作り、酒肴も用意して、茶汲女が接待し、濃厚なサービスをする店もあった。

明治二十一年四月十五日に現台東区西黒門町に喫茶店第一号が出来た。初め可否茶館と言つて、すべて西洋の珈琲店にならない、来客は茶をすすり、珈琲をのみながら談笑した。室内には諸新聞、諸器具を備え、更衣室、御婦人には化粧品等の設備があつて、今の高級喫茶店と違わないものが出来ていた。

最後に吉井勇の歌を載せて、喫茶店の椅子をはなれることにする。

みやびおがつくり笑いもおもしろし

卓に紅茶の高くかおれば

座右の句

俺に似よ俺に似るなと子を思ひ

(路郎)

私の句

母の鞭はがきの表まで続き

酒井 輝

川柳塔 七月号 目次

題字・中島生々庵／表紙・直原玉青

■巻頭言 新 茶

鬼の咄

西尾 栗 … (1)

川柳塔 (同人吟)

高杉 鬼遊 … (2)

自選集

西尾 栗選 … (4)

川柳の群像 後藤梅志

東野 大八 … (44)

■古川柳 柳籠裏二篇研究 (十七丁)

東野 大八 … (46)

「出会い」 同人ずいそう

東野 大八 … (72)

小倉アサ・水粉千翁・川島諷云児・小西雄々

齊藤 島・吉村一風・岩津ようじ・新 正子

水煙抄

黒川紫香選 … (50)

秀句鑑賞

「同人吟」

河内 天笑 … (48)

水煙抄

「大空のころろ」

田中 輝子 … (71)

大空のころろ (31)

橘高 薫風 … (39)

鬼の咄

高杉 鬼遊



河竹黙阿弥作『茨木童子』は、京の羅生門において渡辺綱に片腕を切り落とされた。この茨木童子とは何者か詳らかでないが、大阪府茨木市新庄町に貌見橋(すがたみのはし)があり、今は暗渠になって碑だけがある。

伝説によれば、茨木童子の生まれは水尾村で、幼児期に茨木村のはずれに捨てられ、近くの床屋に拾われて育てられ、床屋の手伝いをするようになった。ある日、客の顔をあやまって切り、傷の血をなめ、その味を知ってから、わざと傷をつけて血をなめる習癖となった。異常に思った彼は、前の小川にかかる橋の上から水に映る自分の顔を見て、それが鬼の形相であることを知り、人間社会での生活をあきらめ、大江山の酒吞童子の配下になった、と『茨木市史』にある。

ここでおもしろいのは、茨木童子も酒吞童子も、母の胎内に十六ヶ月もいたということである。茨木童子は、生まれながらにして歯

銀河系……

茴香の花……

■ひみこさろん

腹の立ったこと
天国と地獄……

「根」……

一路集「部屋」……

「濡れる」……

初歩教室「和やか」……

■川柳こぼれ話 れくいえむ

各地柳壇（佳句地十選／村田善保）……

尼緑之助句碑建立20周年記念川柳大会…… 木本朱夏・板垣草丘……

六月本社句会……

柳界展望……

七月各地句会案内……

■編集後記……

河内天笑選…… (76)

小出智子選…… (80)

茂見よ志子…… (82)

佐治千加子…… (82)

小白金房子選…… (84)

坂口公子選…… (84)

植村客遊子選…… (85)

吉岡美房…… (86)

田中正坊…… (83)

…… (88)

…… (100)

…… (102)

…… (106)

…… (129)

…… (130)

座右の句

寝転べば畳一帖ふさぐのみ

私の句

ガンジスに浴す輪廻の浮き沈み

(路郎)

小森正晴

がはえ揃い、すぐにヨチヨチと歩き出した。眼光鋭く、後ろを向いて母の顔を見てニタツと笑ったと言う。

貌見橋の碑がある近くに昭和のなか頃まで床屋があつて、古老の語り草によれば、代が何度かわり、繁盛することがなかった。それも童子の祟りか、この店を人呼んで「鬼床」と言う。この付近に住むその時代の子は、「鬼床」の咄を祖母からよく聞いたという。前記「貌見橋」から東方約百メートルに「櫛塚」があつて、茨木童子と床屋とのつながりが見えてくるようだ。

王権にまつろわぬ者が鬼として誅された中世から、封建幕藩体制によつてその出現を許されなかった「鬼の哲学」は、機械文明の発達した現代なればこそ、なお生きつづけているものと信じる。

茨木童子に限らず、人はこころに鬼を抱いている。育つた環境によつて、カミにもオニにも豹変するものである。鬼はその姿をみせない。抑圧された精神は闇に凝縮されて消えることはないだろう。

あまり本音をさらけ出すと、ビートたけしの『だから私は嫌われる』になるかも知れない。月明の夜しずかに詩を吟じ、敬愛する詩人の門前に深く頭を垂れて去つてゆく、わたしはそんな鬼になりたい。



西尾 葉選

鳥取県 新家 完司

わたくしと同じ名前の猿がいる
犬に失礼イヌジニということば
屋根の上の猫に監督されている
パチンコ屋あまり笑顔が見当らず
おとなから学んだ通り嘘をつく
恋人のこと考えて元氣出す

島根県 松本文子

恋人未満の友人であり花の下
練習の過程を聞かすホーホケキョ
罪悪感もなく温泉の湯は溢れ
中年の五月に軽い靴がある
黄昏の長い廊下が胸にある
次の世は蠅かもしれぬ潰さない

西宮市 門谷 たず子

腹芸もいらぬ夫婦になつて老い
宴果てて錠剤かぞえている夫婦
祭り提灯 故里が呼ぶ亡母が呼ぶ

業かも知れぬ弓形に減る黄楊の櫛
蛇口からポトポト後悔が洩れる
遊びざかりを母の路線の塾靴

鳥取県 土橋 はるお

ウロチヨロするとロボットが面倒がる
五体満足で焼酎を飲んでいる
人生はシューゲームかも知れぬ
骨を盗んで骨まで愛す人もある
足を踏んだ女をコーヒー屋に誘う
澄ました顔ができず不倫も又できず

西宮市 奥田 みつ子

偽らぬ自分をさらす場所がない
白牡丹 白に徹して迷いなし
横座り女すこうし拗ねている
双葉もう大きな支柱立てられる
軒下の石白 父母はもう居ない
迷い抜く目にいさぎよし燕飛ぶ

松原市

小池 しげお

娘にも妻にも男から電話

柳井市

弘津 柳慶

愛情を催促されて困るなり
金で済む話を長いことかかり
自転車降りねばならぬ人に会い
フィルムが残ったそうで撮ってくれ
吞んできて話のわかることを言う
母方の筋で見事な通信簿

西宮市

秋元 てる

堺市

高橋 千万子

賑やかに外人同士茶漬食う
春うらら犬が寝そべる寺の町
貴方なら叱ってくれるね仁王さん
空茶漬 式服脱いだ味で食べ
山辛夷始めて家を離れる子
取り立ての免許ばあさんから乗せる

東大阪市

崎山 美子

倉吉市

奥谷 弘朗

半衿の白さが涙誘う喪主
御近所のニュースにくわしい美容室
愛犬のおともで花見すませとく
親友のやさしいうそに救われる
留守電に夫のうそが入ってる
うそらしい語尾に力のない夫

竹原市

小島 蘭幸

岡山県

嘉数 兆代賀

コーヒーが飲みたくなると友が来る
進め進め旗も私も古くなる
負け続けるととても明るい顔になる
自転車にひらりと風になる男

友情のあの時の借り忘れない
男って女の言葉に弱い
横文字に弱い大正生れです
店仕舞い隣の人もさそって見
そんな事忘れまじとインタビュー
満足な疲れ母の日もう暮れる
ひっかかる事あり連休半端な日
近況を知る句ごろのいたいたし
紫を着ていて菖蒲に近よれず
ため息の捨て場に困る昨日今日
シベリアの秘話を聞いたら眠れない
太鼓には国境のない秘話がある
少年の夢の彼方で光る海
町内に調子男と言うが居り
妻という日本一の杖がある

八十には八十の夢 虹を追う
欠け茶碗二つ洗っている余生
たとえばの話が風を呼ぶ怖さ
わたしも春も光って消えて春が逝く
無明より無明へ渡る夏銀河

倉敷市 小野 克 枝

小さくとも庭に夢追う種子を蒔き

引き潮に遊ぶ蟹です平和です

勤勉が叱られる世となりにつけり

酒の出る席なら万障くり合せ

こんなとき妻の無口に救われる

大阪市 西 出 楓 楽

フリーダイヤルちよつと回してみても夏

句読点ない日が続く孫がいて

ブラジャーのサイズを聞かぬのはなさけ

脇役の群で光っておればよい

聞く耳をもつて小さく生きている

今治市 矢 野 佳 雲

平行線結ぶ一本線を入れ

死ぬ日まで一緒に影がついてくる

巧い世辞言えるのも実力のうち

隠したと思う上ゆく妻の勤

パートしていますと溜めた洗ひ物

鳥取県 土 橋 螢

花よりもきれいな女とお茶を喫む

魂もいま万緑の中にいる

特攻の思い出語ることもなし

父の日の予定を聞いている息子

きりきりしやんと紫の花桔梗

松原市 玉 置 重 人

線越えてないので長いおつきあい

芸のない男早起きして困る

この街の魅力をさぐるカメラアイ

新緑の風モンローがあちこちに

全力で守る言葉にある重み

和歌山市 西 山 幸

真実を噛みしめてみる豆御飯

今日も乗り遅れて時計ばかり見て

ゆきずりに出逢う景色も病んでいる

誰からも遠く水上勉強む

なるようになると日記に言い聞かす

堺市 楊 井 二 南

地団駄を踏んで誤解に立ち向う

総立ちで見送る惜しいフアウル球

赤線を引いて頭に入れて置く

取り直し以後の勝負が呆気ない

比較する気にはなれない桁違い

美禰市 安平次 弘 道

話半分徐々に喜劇を盛り上げる

膳本の斜線 絆のむなしさよ

結果論そう言われればそうだった

残ったのはロボットだった消去法

子に期待しても遺伝子妥協せず

名古屋市 越村 枯梢

どう見てもひょっとこ面だ三面鏡
呆けてないつもり呆けたと囃される
物いえば風邪をひきます地蔵さま
考えてみればみるほど生き過ぎた
梅雨しとど空にもあつた涙壺

島根県 堀江 正朗

人情を昔に戻す川の音
妻がいてくれるついつい愚痴こぼす
陽のぬくみ妻のぬくみだなと感じ
螢もう飛ばぬ川にも記憶生き
戦盲をまたかき混ぜにくる文化

島根県 堀江 芳子

大家族のよき連休はもう去んだ
若葉風あふれる部屋にいる茶筌
外出のうきうき鏡に見つめられ
謎かけの電話で孫にせびられる
念入りの料理は亡姑の味になり

米子市 林 荒介

輪の中の仲よしごっここの疲れ
屋根裏で遊ばせる僕の魂
虹の門だれも奥には通さない
舞い終えた足袋だねぎらってやろう
凭れた壁に搦み取られてしまふ

廿日市市 林 野甦光

梅雨明けてはしりに出合う茄子の艶
膝小僧が無防備になる話好き
小鳥に餌を忘れなハワイから電話
はすかいに切つて西瓜の数にする
見合ひした娘の言い分は聞かぬまま

八尾市 宮 西弥生

明日があるあしたがあると歯をみがく
手も足も動く限りの定期券
したたかに生きる明日へ眉を描く
裏口で他人の動静見て生きる
時計台小さくなつてビルの下(北海道旅行)

京都市 松川 芳子

肩の荷を下ろしてからの物忘れ
無駄遣いばかりしている好奇心
お留守番ストレス溜めているペット
二人三脚 妻に傾く影法師
人間の株が下がって来た不安

宇部市 平田 実男

檜山となる病院がまたも建ち
フルムーン妻にひかれて善光寺
方便の嘘でも嫁に負ける妻
エリート土を知らない土ふまず
畳の上で死なす退院とは知らず

豊中市 安藤 寿美子

香川県 松村 迷観子

マニユアルへ老眼鏡やルーペやと
古希や古希ともに座れぬ友ばかり
古希や古希長男老眼鏡をかけ
望郷の思い涅槃は北枕
紙屑というても⑨の書類です

高知県 赤川 菊野

灯を消すと旅の終りが見えてくる
泣き言は言うまい自分で決めた道
見掛とは別にクールでナイーブで
桜散るあの娘海峡越えたまま
仮の世は愛と憎との夢芝居

大阪府 津守 柳伸

命がけだった恋でも三ヶ月
猜疑心もぞもどく産寧坂
自画自賛独り暮しの男運
ありがたいテレビ茶の間の分水嶺
出稼ぎをホームシックにする夕日

寝屋川市 稲葉 冬葉

詠えた喪服かなしい日に届く
夏の雲まつり提灯気にかかる
断ち切った想いへ雨が降り止まぬ
いいのでしょうかこんなに燃えている余生
相続税取られることのない極

人間同士争っている縮図

寄りそうてくれる子がいる孫がいる
スト出来る勤めがほしい小商い
子育ては明治の知恵も少し入れ
よく休めほどほどでよい労基法

尼崎市 春城 武庫坊

戦争を知らぬやからが理屈こね
喜劇でも悲劇でもない今日送る
保証期限越えたか五体捻子ゆるむ
三食がうまい余生がありがたい
目を病んだ妻の歩幅が気にかかる

尼崎市 春城 年代

病める眼を知って貰えばやすらぐや
目にしみる鳶の若葉に負けている
消しゴムはなくてはならぬ仲である
視力ばうとりラが匂うて来る辺り
神さまに心見抜かれそうになる

豊中市 田中正坊

十年を過ぎて川柳わからない
わからないことが分かっただけでよし
同じ字を何回もひく春の辞書
慶弔の報せこもごもくる卯月
勲二等に祝電を打つ無位無冠

羽曳野市 榎 本 吐 来

受話器置いてからくすぐりが効いてくる

胃袋と財布が妥協したキツネ

天敵をたんと背負った得意顔

ドラマなら今吐くセリフ知っている

六十の手習い浮世の風を抱く

熊本市 永 田 俊 子

カタログにだまされ具合を試される

炎えた日を古ネクタイは喋らない

複雑な気持で脳死を待つ命

青空へ蟻の悲しい労働歌

喝采に酔うて逃がした青い鳥

寝屋川市 江 口 度

こけしと対話んだんだだけわかる

ごきぶりを掴みぶつける妻と居る

鯉のぼりの尻尾見飽きる風見鶏

母の日も母の振り子は止まらない

不況も楽しミニスカートが流行るらし

今治市 越 智 一 水

子はあてにせぬと子のこと口にする

羅針盤持っていますぞ老いの坂

考えのふるさを妻とあきらめる

女三代漬け菜変らぬ味をほめ

雲追って百姓と言う息を抜き

笠岡市 松 本 忠 三

軍服の写真床の間から外し

無駄骨を折ってはあさんから小言

一杯の酒に場所柄弁えて

口癖が差出がましいことです

鼻持ちがならぬどぎついアイシヤドー

下関市 石 川 侃 流 洞

窓と窓バントマイムの恋すすむ

欲言えはなどと批評手きびしい

火消壺一氣に燃える夢を抱く

自画像にピンクを足せばまだ翔べる

縛れたり解いたり夫婦五十年

奈良市 宮 口 笛 生

まさかまさかまさかが悲し野辺送り(柳友急死)

止り木に楽し悪者吞んでいる

親爺さんそっくり親爺知った人

国籍が違うくらいに焼けている

コーヒーもお茶もおいしい午後の暇

東大阪市 森 下 愛 論

翔ぶ老いにブレーキ掛ける脈の音

若者に負けるものと自己過信

真直ぐに帰って尻が落ち着かず

私にも戦いがある禁酒の日

琥珀色琥珀の味を堪能させ

藤井寺市 吉岡美房

柿若葉いのち一つをいとおしむ
れんげ田に寝ころび宇宙見てやろ
う
突き当るたんびに若いなと思
う
ごみ袋つけて夫を送り出す
単身の五月コロッケばかり買
う

高槻市 川島諷云児

酸欠の街でカラスも住みにく
い
ふる里はいいな長閑な蟬時雨
沈黙は父の最後の武器だろ
う
句読点打って人生振り返る
一汁一菜夕餉に父がいて和む

奈良市 天正千梢

萌若葉父ちゃんにつける甘い
点
花会式 薬師三尊 光はなちて
「時代の流れだ」ひと口にかたづけて
欲捨てて暮らしてゆかんのり茶漬
七十年 白居易の詩そのままに

島根県 小砂白汀

賞められて身じろぎできぬ鉢の松
春愁の森へ鴉が討死す
母恋しどうだんつつじの乳房かな
わが影も直立不動の日を忘れ
ゴミ捨てへ男の歩く貧しさよ

松江市 柳楽鶴丸

笑顔がとっても可愛い貧乏神
チエリーより桜の方が奇麗です
気がついて見たら妻を庇っていた
風風上がれ良い子悪い子普通の子
愚痴言わぬ妻が何だか物足りず

松江市 舟木与根一

自販機と気安くなって一人旅
食欲は阪神さんに任せます
方便の嘘ありがたく聞いておく
冷酒が美味いと故障個所がある
大正が農家の終り見届ける

奈良県 田中紀美代

駅前のポストが好きないい手紙
よく喋る男が薬飲んでいる
喋るのが下手ですなどとよく喋り
セクハラは妻がしかけるのが多い
日中に申し訳ない露天風呂

富山県 舟渡杏花

おとぎ話に狸寝入りの心地よさ
思い違いにまだときめいてるおバカさん
あじさいに恋のかけ引き授けられ
本物の天狗 説得力がある
おばあさん猫一ぴきを守り抜く

京都市 都 倉 求 芽

弘前市 肥 後 和 香 子

軸足をロシアに置けぬエリツイン
明日までなに考えることもない眠り

糸屑を幾何学模様につけた背

逃げ切りと言われて一等賞不満

もどり寒 夫婦に寡黙の日が続く

弘前市 村 田 善 保

北を指す男の磁石迷わない

母となる期待と不安 母子手帳

美しい嘘で病床温める

胎動の海で聴いてたモーツアルト

虚と実の狭間で生きる羊たち

弘前市 真喜内 實

暖かい態度に弱い母董

お目出度く緑大学古希入学

親故に子の心配を逃げられぬ

酷使した老いを預かる野辺陽炎

瞳がなれた闇の小石の苦笑い

弘前市 小 寺 花 峯

底辺を泳いでいつも走る癖

四十坂輝く汗はまだ流す

また一つ古里増えた歓迎会

時々譲り合う主役で夫婦仲

ただ下げる妻に頭をただ下げる

昼ざくら処女のからだを熱く観る
重大がそうでなくなるさくらの夜
散りどきを今宵さくらに教えられ
シリーズの男さくらに譲りましょう
紫がお似合いすぎよチューリップ

弘前市 佐 治 千 加 子

花鎮め心鎮めてご神水

讒言の男の首の落ち椿

おのれのみ所詮大事と涼しい目

インコの死 罪何ほどの重みなる

それ尾行 女人高野の赤い橋

十和田市 齊 藤 効

ひさびさの乗馬緑の風を切り

母の日は津軽りんごの花祭り

ああ多様化 画紙にも黒のチューリップ

存分に咲いたでしょうか飛花落花

電光のニュース虚しや一字ずつ

十和田市 阿 部 進

太陽の風呂にどっぷり浸る倅

豪邸のお手伝いまで頭が高い

雑談を聞いてわかったお人柄

世話好きの定年役が待つて居る

間違えた出迎え駅の表裏

青森県 田中 叶

弓なりの背骨が二つある蒲団

家族して立ち読みしてる日曜日

子の部屋のベッドで少しねてしまふ

順番にいのちが並ぶ紙コップ

バトカーの後ろで青をじっと待つ

五所川原市 對馬 一閃

Uターンの青年の眼が素適です

抜け道を隣の猫に教えられ

熱燗の地酒へ母の味が煮え

何もかも知る足跡は拭いておく

みどりの日森の木霊がみごもりぬ

黒石市 相馬 一花

留守電にして安堵する便秘症

万歩計まだ歩けない人も買つ

よい結果出るまで測る血圧計

毛根がなくても掛ける養毛剤

前よりも後ろ姿に惚れ直し

寝屋川市 柴田 英壬子

実益へなかなか移行しない趣味

敏感な鼻で出世をする喜劇

嗤えない雀百まで芝居好き

S席で観覧ボール着けてゆく

柏餅 一言話し供えとく

出雲市 金村 青湖

ふるさとの夕陽に過去を裁かれる

ふるさとの道だ背筋をのばさねば

故郷捨てて故郷にすまない句を作り

そして今蛙は蛙の道歩む

つれづれに覚えた三味でない音色

出雲市 吉岡 きみえ

しがらみを越えて来ました笑い皺

ハナハトの昔の女に芯がある

三界に家なし女が渡る河

政治不信いよいよジャガ芋芽をのばす

先生と別れを惜しむ午後の駅

出雲市 園山 多賀子

続編はなかった傘は畳まれる

終章はかくありたしと夕陽が炎える

乱気流空の青さを脅かす

友情に溺れてならぬ水中花

遍路笠再度の縁春惜しむ

出雲市 尼 れいじ

過去にして暦一枚剥がされる

逆風に時々男が試される

呆けてなどおれぬ年金俺のもの

葉桜となって昨日の夢を追う

おしゃべりの母につれない子の電話

出雲市 久谷 まこと
油断して見せてしまった泣きどころ

手鏡に今日の笑顔を試して

言い訳をするからよけい疑われ

にこやかな顔だが後が手ごわそう

共稼ぎ別々な夢描いてる

出雲市 竹 治 ちかし

泣きに行く里も晴れの日ばかりない

世を渡る歩幅が崩す若い夢

飛びたつた後で気付いた青い鳥

少年の頃はよく見た青い鳥

障害の子も障害の子をいじめ

出雲市 石 倉 芙佐子

世渡りが下手でぎくしゃくしています

はいつくばって渡るしかない丸木橋

渡り切って見れば釣り橋揺れもせず

女ひとり渡れぬ橋のある怖さ

渡る世間は鬼も仏も共に住む

出雲市 板 垣 草 丘

句会待つプロダクションの気も少し

衣裳箱部屋中半袖やつと出た

一角はマイクロバスのままの句座

田植機のぬかりを手植え懐かしい

里の義姉田植が済んだ日の機嫌

出雲市 島 祥 庵

原点に戻った近所の奴唄

思い出をかくすエブロン白すぎる

冗談が通じる近所のおつき合い

裸婦像に敵意が見える陰の声

試着室鏡に声もうかれてる

出雲市 伊 藤 寿 美

辛夷咲く過疎豊作の噂する

墓新基 西陽が包む俱会一処

逆玉の男が好きな酒の唄

遇休二日男が見てるワイドショー

旅帰り出雲市長と隣り合う

出雲市 小 玉 満 江

連休のぼたん泣かせる雨の島

幸うすく札所参りの細い肩

椅子浅く掛けて無粋なたのみ事

法要の庭に一きわ藤の花

留守番は都忘れと新茶の香

出雲市 岸 桂 子

哀しみを背負うと強くなる乳房

石一つ蹴って淋しい風に逢う

こだわりを捨ててせつせと米を研ぐ

他人には見えない傷のある至福

三食で足りずドリンク追加する

大阪市 本間 満津子

行間の心伝える故郷言葉
あの頃を憶えばまるでお大尽
カード持つと銭の尊さ忘れはる
他人は他人生き方ちよつと違うだけ
天の慈悲痛みだんだん鈍くなる

大阪市 板東 倫子

子供の日に父を奪ったアンタツク
ああいくさマインドコントロールのこわさ
価値観の違いとうまくそらされる
生甲斐になつてしまった趣味の会
霊園のチラシで折つただまし舟

羽曳野市 田中 透太

回り道してよかつたと妻が言う
ここからは力を抜いて歩きたい
風みどり恋の蕾を胸に抱く
窓際で年功序列軋む音
七人の敵から学ぶ処世術

米子市 小西 雄々

翔ぶ訳を聞けばストレス消すという
好きですとはつきり言える子を宿す
髪染める度に春来る絵を吊るす
札束に今も男の背が揺れる
回遊魚のように行楽して帰り

米子市 石垣 花子

身近な杖が優しい言葉かけてくれ
春よ春やつと子猫の目があいた
紙吹雪浴びせてくれている好意
落日とは予想馬にまで裏切られ
写経して仏と仲良くすごします

米子市 林 瑞枝

紡ぎ切れない心を藍染に浸す
握手した熱い手のひらから学ぶ
賞を得てキリンの首はなお伸びる
犬の眼は群れのひとりをまだ探す
一冊の辞書に敷かれたやもりの死

米子市 田中 亜弥

プロペラが響く我が家の滑走路
主婦の面落ちて遊び心つく
女系家族 男を立てておりますの
ときめきを忘れて静かな胸の内
大勢の声を頼りによみがえる

米子市 野坂 なみ

いつかいつかと熱い心でみがく珠
不揃いの左右の足で頑張った
老残へせめて心もうす化粧
北風よ残り時間は手をつなごう
全開の耳の回りに蝶や蛇

米子市 青戸田鶴

米子市 金山夕子

かっぱらいにはご用心バチカン広場（イタリヤ紀行）
ユダの木はユダの血の色今さかり

ルネッサンスの香りを歩くフイレンツェの街

ピサの斜塔でピザの立食いして恥じず

ゴンドラに揺れカンツォーネにもゆれ

米子市 寺沢みど里

早発ちの船だゆっくり眠らせる

星の位置しつかり舵に見せておく

はぐれないように帽子を視野に置く

甘い水きらいと螢うそぶいた

清流にせかされ小石おちつかぬ

米子市 政岡日枝子

他人様を傷つけまいとする天狗

やがて紫陽花白を盗んでいく天狗

天狗それぞれ甘い言葉をかけにくる

母の前では天狗の技は使えない

またたくまに広がっていく天狗の死

米子市 澤田千春

人生の裏を見てきた土ふまず

花散って未来図しかと引きなおす

影つれてとつぷり浜の温泉につかる

長電話窓は若葉となりました

生きる力を炎える緑がくれました

お隣は弁護士司書士お医者さま
何もかも忘れテレビの天皇賞

小言が居ると煩い居ないと淋しい

黙って聞けばもつともらしく嘘を言う

おばさんのマナー弾ける高笑い

米子市 新正子

仏壇はまだ戦争を忘れない

初孫を抱いて長生きしたくなる

イギリスで聞くシンデレラ・パートII

夏草に遇休二日言い渡す

たよりない男可愛い男です

米子市 光井玲子

一番の仲よし身内よりあたたかい

精いっぱい残り時間をさわやかに

こんな時父の無口がありがたい

最後まで無口のままの水申花

終着駅が見えて祈りが深くなる

米子市 中井ゆき

キラキラと五月私の生れ月

逢わぬ間にすぎなく伸びた松の芯

ユダの木がバチカンに咲くうす紅に

糸杉が稜線くぎるフイレンツェ

無口にはなれぬローマの石だたみ

米子市 茂理高代

誰かに似てる雲だがい思い出せない
どうでもよい事が気になる日暮れ
何が起きても洗濯炊事しています
慎んで咲いております犬ふぐり
いじわるな話もしよう相棒よ

和歌山市 堀端三男

比べられて困ると嬉しそうに言う
弱点を話題に乗せる悪い癖
自動支払い年金知らぬ間に消える
あの日から仮面を脱いで楽になり
老人会五月の風と動き出す

和歌山市 福本英子

跡とりのことを誰もが聞きたがる
バラ百本ぐらいで娘騙されぬ
取り替えのきかぬ部品へ医者通い
来なければよかった洪滞の真ん中で
退く時期を逃がしてからの大火傷

和歌山市 内芝登志代

赤ちゃんの裸やっぱり神のもの
どさくさにも父のまなこが光ってた
つかみ取り自分の欲にあきれてる
修羅いくつとてもかなわぬ母の道
久し振りに何から話そうてれている

和歌山市 垂井千寿子

その先は神に任せる非常口
天狗の面被せた方にも罪がある
物好きの仲裁結局金を出し
割り切つてピエロになった身の軽さ
嫁優し私も植木も出す答え

和歌山市 木本朱夏

ハイヒール脱いで駆けてく胸がある
うっかりと花に本音を盗まれる
毒薬がゆっくり効いたあまい闇
宿世かな悪女にもらうにぎりめし
鳥籠へ男は帰る金曜日

和歌山市 桜井千秀

野生にも掟テリトリー荒さない
前進へ節目節目の挫折感
はいはいと調子を上げる褒め殺し
時差ボケのままでタラップ降りてくる
噂話は聞き流してる辻地蔵

和歌山市 細川稚代

あの人もこの人も好き月おぼろ
きこえないふりして磨くめし茶碗
真実を掴んだ日から鬱に入る
再会を約す若葉の無人駅
いつかいつか着たい彩あり鉄線花

海 南 市 三 宅 保 州

敵にしては惜しい男が多すぎる

陽の当る場所もいつかは陰るもの

薬つかむ思いで念珠握りしめ

陸橋を渡る人なら信じたい

昼寝ならすぐに眠れる不眠症

和歌山市 青 枝 鉄 治

歓迎の波に混じった謀反の目

マネキンと思えどハツとさせられる

隣とは少し多目の祭り寄付

潮どきと袖を引っぱる影法師

時差呆けの花が威張っている花屋

和歌山市 福 井 桂 香

陰徳を積んでひらいた君子蘭

何事も真ん中という位置が好き

二番手で走りつづけるのも知性

牡丹やふれなば落ちん君の腕

呼び止めてみてもふんわり春の雲

和歌山市 田 中 輝 子

剪定鋏すこし軽快すぎないか

真実は一つ重たい口ひらく

出口へと矢印がある親切に

以下同文の中にまじっていたわたし

躓いたところに溜めてあるコント

有 田 市 松 井 かなめ

消ゴムで消えそう朝の三日月

五十路会恥じらいもなくさわぎたて

桜ばたん咲いて誘いの多き日よ

底辺で励まし合ってこの叙勲

兎小屋なれど帰心矢の如し

岡 山 県 小 林 妻 子

長男に生れた訳が分かりだす

一番に休む事から考える

二つ返事が出来ぬ電話もありました

困ったら帰って来いと言えるかな

物を言う太い兄貴の指が言う

岡 山 市 井 上 柳 五 郎

あの噂七十五日まだ消えぬ

外せても視線が戻る露天風呂

便利さの裏にカードのおとし穴

遙かなる生年月日よくぞ生き

桜散るまた咲くまでは忘れられ

岡 山 県 矢 内 寿 恵 子

肩書がとれて分かった人間味

振り向かぬ心に決まる始発駅

衣食住足り幸せなカタツムリ

身の程を知った歩幅でおつき合い

やさしさに負けた鬼の目の涙

岡山県 二宗 吟 平

自信句の没当り前時代の差
病人の前で美味しく食べた馬鹿
賀状では知っておるのに顔忘れ
思い出を語り解ったボケ頭
思い出はつきず一日すぐにたち

岡山県 池田 半 仙

連休も昔思えば極楽さ
方向の音痴にさせる曲り道
成長の孫大学と就職と
キャベツ畑上とぶ蝶は嫌われる
アスファルト毛虫一匹急ぎ足

岡山県 荻野 鮫虎狼

夫婦善哉歩幅まだまだ縮まらぬ
資料にはマル秘と書いてコピーされ
冠婚葬祭興味示して他人様
缶ビールあり夜桜が綺麗です
新茶の湯たぎり連休独り者

岡山県 山本 玉 恵

面倒な話に妻を呼んで居る
彩一つに心乱れし春の筆
鐘を打つ指に迷いはなかりしか
ラストダンスの腕はあなたにあずけます
貝になる日ばかりつづき春は逝く

倉敷市 田 辺 灸 六

口ずさむ唄はナツメロ緑風
噛みしめる情けは生きている余韻
打ち明けてくれない人が味方です
さしあたり主役済むまで死なれない
心配をするから余計つけあがる

岡山県 千 原 理 瑛

負けて勝つ本音見せないままの日
思い出は夢の小箱にしまつとく
御堂筋私の想い出こぼれてる
女の見栄捨てて乗り切る不況風
愛憎や風が炎となる水となる

岡山県 岩 道 博 友

後悔を忘れた靴を履いて来る
射程距離変えて珍し愛の色
老人会残った勇気の発言す
プロ野球始まりアンテナの向きを変え
友人の黄痘我が身の過去顧る

岸和田市 福 浦 勝 晴

掛けられた謎が見抜けぬ鈍い人
鼻唄の出るパチンコはついている
グイや買う話なかなか纏まらず
どっちみち損を承知で買うジャンボ
とろいのと飲んで勘定こちら持ち

岸和田市 島崎 富志子

七連休昨日も今日もテレビ漬け
トラキチが二人茶の間が燃えてくる
二重丸うれしい六十路の筆運び
肩書がついて自分を見失う
優勝で若様ファンふえました

岸和田市 原 さよ子

葉桜になって静かな花の寺
不景気の連休天気もぱつとせず
サランラップ端見当らぬ短気な目
正直に言えばこの場は治まらず
豌豆が実り豆豆の日が続く

岸和田市 古野 ひで

花冷えが続いて桜散りそびれ
泣き言も溶かしてくれた春の海
来春を夢みて葉桜おこたらず
古希過ぎて耳だんだんに素直なり
雑居家族お祭りだけは気が揃い

岸和田市 芳地 狸村

質種の深編笠がある茶店(柳生畔茶屋)
花の名を調べ楽しい山の道(柳生滝坂の道)
薬師如来守る神将仮住い(新薬師寺)
女房の自信なにかがあるらしい
組んでいる脚が素適な前の人

岸和田市 高須 賀金 太

夏の陽はとても苦手なモグラ族
窓際に移って骨がきしみだす
埋めといて渚つくっている愚か
有名塾こまっちゃくれたガキばかり
チンドン屋わたしも仮装したくなり

大和高田市 岸 本 豊平次

聞こえないふりも覚えた老いの日日
ハイキングまた一と休み蓮華畑
セールスが来たか町内犬がなき
筍が好きで山椒を庭に植え
涙腺を閉めてPKOの父

姫路市 人見 翠 記

戸惑って夏服冬服衣替え
霧のうつろいやさしい陽ざしのお茶の味
眼鏡なし縫物の出来るを娘はあきれ
冬中を囲ってやった蘭が咲き
香りなき都忘れを愛おしむ

箕面市 坪田 紅葉

遠い日の話に花が法事の膳
杖ついてニールックもかわいそう
句作りで余生たのしく夢を追う
春うらとりどりの花部屋毎に
連休に振り回されて痛い腰

高石市 浅野 房子

姫路市 大原 葉香

黙っている傷の深さを思い知る
妬心かな他人と比較してしまふ
背伸びして身幅の合わぬ服を着る
親ばなれ出来ぬ男の主義主張
偽りの愛とは知らず角かくし

寝屋川市 岸 野 あやめ

満ち足りたくらし長寿の欲が出る

足るを知ることが分からぬ不幸せ 大阪市 河井 庸 佑

糸電話もろい絆へ張りつめる
無駄花はないが不肖の日焼け茄子
桜咲けば藤が咲けばと病んでおり
着るあてもない服を選ぶ気の薬

気の弛み何より怖いものと知る
生返事したばかりにはめられる
天邪鬼知って逆手に取ってみる
感情に走り自分が宙に浮く

宝塚市 丸 山 よし津

堺市 黒 田 真 砂

犠牲者に平和を守るむずかしさ
境界線ばかりちぎり絵美しい
言いたい事胸に収めて座をはすす
教会で答の欲しい隅の椅子
ビル三つ持つて貧乏くさい伯父

待ち合せ隣も未だ来ぬ安堵
孫に背丈越されてうれし花の下
よどみなくしゃべる男の喉仏
女の涙時に刃となることも
青春の夢は夢とし今日生きる

静岡県 蘭 田 獏 杏

吹田市 山 本 希 久 子

春の道予算消化で掘り返す
晩成と言えど今更おそ過ぎる
受験後の絵馬がカラカラ囁いた
スプレーを掛けて女が初夏へ出る
肩の荷がおりた途端に五十肩

タオル固く絞り言い訳せぬつもり
単身赴任三年過ぎた妻離れ
山門を出れば春風なまぐさい
アイディアのひらめきお経聞きながら
曲り角へ来ると聞こえる父の声

吹田市 栗谷春子

結界の立て札われもまだ女人(大峯山にて二句)

錫杖の一団陣風の如く過ぎ

失せ物がみな出揃うて春となる

齒ごたえがあるから私のままでゆく

太郎冠者いかがいたした馬をひけ

大阪市 上田柳影

悪友と知ってる犬も起きて来ず

區別してしてない素振りバラの刺

もう少し生きていたいと言うカルテ

保育室日ましに重くなつて夏

春愁や男に欲がもつとほし

大阪市 榎本落児

古希の恋ロングパットが決まらない

定年が舞台の袖で蹴躓く

趣味までも同じで夫氣づまりな

九十四 手術も出来ず母は癌

私も負けずに孫の自慢する

羽曳野市 吉川寿美

凡庸を嫌い愚かな靴すべり

アメリカン軽い男と道連れに

あやまって済むも済まぬも浮世沙汰

姑が来てくまなく指紋つけて去ぬ

時おりは次男の温い傘のうち

大阪市 藤田頂留子

雨傘をもてば天気がちなおし

ああ人生化粧の下から老いはじめ

二三行紙面のすみに元女優

鉦太鼓今日もどこかで祭月

益軒の今に通じる筆の跡

大阪市 神夏磯典子

五月風みどりの絵の具しゃべり出す

口止めを忘れてしまう花の宴

自分だけいい子で居たい相談で

スケジュールからだに機嫌とっている

据膳の旅から帰りまず茶漬

大阪市 井上白峰

甘い夢見た脱サラの蟻地獄

助太刀に抜いた刀が錆びている

ここだけの話が好きな更衣室

例えばの話でのぞく肚の中

コンピュータ―義理人情を弁えず

生駒市 北山悟郎

金の卵欲しくなくなった人減らし

亡き戦友よ万朶の桜通り抜け

酔うほどに現在忘れ過去を追

役立たず捨ててに情けからみつ

動く歩道駆け足でゆく大都会

呉市 横田英詩

全部抜いた方がいよいよと歯医者さん
自分史を書く年代になりました
欲張りな母さん強なれ偉うなれ
白髪染めもいいがどうする顔の皺
正座して叱られ上手が待っている

竹原市 森井菁居

倅の証 無沙汰の日が続く
酒吞まぬ彼でかえって気をつかい
近頃は花嫁にある主導権
主婦の貌してエンドウをいいで去に
酒好きな血筋引いてる子のコンパ

竹原市 時広一路

回り道すれば喜ぶ万歩計
素直さを忘れた今日を持て余す
圧力がかかって揺らぐ平行線
欲のない拍手大きく打っている
マスコミの何としつこいなとテレビ

竹原市 岩本笑子

花菖蒲 謀反企む花でなし
倦怠期海の風にも少し似て
慈雨という言葉もありぬ草の芽よ
コーヒーも紅茶も冷めている別れ
もの忘れ政治家ほどでないけれど

竹原市 岡本清水

若緑再生誓う踏み外し
無職でも病気をしたり怪我もする
家族八人無事息災が気にかかる
探し物年毎増えて齢を識る
計が続く務めの出来る身に感謝

広島県 藤解静風

不景気も知らずみかんの花ざかり
豊かさの中でサウナの汗を買い
ジョギングの靴もウエアも立派だが
思慕の句の相手は私かも知れぬ
許されぬこと多すぎる対口支援

広島県 田村新造

鉄条網破り虜囚の枷を抜け(興安鎮逃亡記)
生きるには逃げるほかない命がけ
南満へ落ちよう雪を見るまでに
手榴弾炸裂あとは無我夢中
戦友の遺髪を抱いて落ちのびる

八尾市 宮崎シマ子

肩もんで乾いた姑をとときほぐす
たいていのことは辛抱する仲間
樹々一層青く照らして薪能
卯の花くだしそれも覚悟の旅に出る
マンネリへ作り話を友とする

八尾市 鶴声庵 覚然坊

スキー学校転ぶ要領から教え
転んだを恩赦で起こすのも政治
芸術としては価値ない御本尊
熱中してちっばけな怒り持ち
紙箱と木箱で飾る孤老部屋

八尾市 高杉 千歩

夏は来ぬひたすら走る花茨
迂闊にも歳を忘れたスケジュール
飽食に旬の味さえうとくなる
絵三昧 十二時間をとうに過ぎ
坂を登る今が勝負ぞ草いきれ

八尾市 山下 美津留

温い目の如来五体に会う和み
恐山一つ一つの石に秘話
鶴戸さんの神住み給う岩に立つ
旅五日庄助さんもばてはじめ
ときどきは岩戸へ消える妻と居る

八尾市 吉村 一風

澄んだ空からむ親子の竹とんぼ
風ふわり猫と並んで昼寝する
鉢植えの出世今度は玄関へ
水をやる花へそれぞれ話しかけ
夕食は旨いみんなの話聞け

大阪府 綴山 隆

花の中光の中で眠りたや
宴席の一塊は味方らし
磨く芸楽しむ芸に血が通う
燈台は孤高ながらも情けの灯
期待度の倍の不安がつきまとう

八尾市 片上 英一

おしあわせ祈っています恋終る
末筆は無神論者も祈ります
ヴァレンチノに燃えたあなたもわたくしも
そのあとは僕が話そう通夜の酒
たまき彦野お葉順子よああ夢二

香川県 木村 明人

百薬の長で早目に西へ行く
地球上四十坪は俺のもの
時計屋で今の時間は何時です
家出するほど詰込んだ旅カバン
ウツカリと乗ると梯子を外される

香川県 成重 放任

太陽の香る布団に身をゆだね
空っぽの通帳肉親争わず
大臣の椅子守る人汚す人
待望の雨が狂わす野良仕事
もう一寸馬鹿でよかった女房どの

香川県 川崎 ひかり

初舞台人と言う字を書いて飲む
派閥からはみ出す椅子の空回り
実家の椅子私に他人の顔をする
とは言えどやっぱり右へならえする
女とて啖阿も切れば見栄も張る

香川県 池内 かおり

退院が近い女が髪洗う
父が逝き今年も来ない春ツバメ
肩の荷を下ろしてからの医者通い
成田からお国訛りを引つ込める
医者へ行け行けと電話の向うから

鳥取県 松下 たつみ

怒っては見たが心は負けている
ジーパンの女が蝶に蜂になる
出来栄えはどうあれ真心頂戴し
野心などないが豊かな丘目指す
石の道信じ素足でついて行く

鳥取市 両川 洋々

雑兵の靴にあせりの音が響く
バラの赤僕の慕情がゆれ止まぬ
傷口を包んでくれる笑顔です
マネキンの乳房よ何を考える
言い負けた背に男の絵は画けぬ

鳥取県 林 露杖

マイクロの旅老いたちの声弾み
牡丹一鉢大根島の暖を購う
傷心の胸吹き抜ける若葉風
離別したされたで揉めてどうするだ
お隣の矢車やけに甲高い

鳥取県 津村 八重子

記念日にしよう一病抜けた日を
若さっていいな日灼けもまた可愛い
百歳を目指す歩幅は生きいきと
交流のかん声がとぶ球がとぶ
人柄のよさがえくぼに浮いている

鳥取県 山根 八重

照れながら一札をした美少年
丸刈りの少年だから頼もしい
大空に少年が描くころろざし
休日は花好きの妻そそのかす
一人去り二人も去った未解決

鳥取県 羽津川 公乃

夫唱婦随古いおんなと言われても
健やかな目覚めを幸と受け止める
それなりに癖も好みも慣れて住む
気紛れと思いたくない旅の果て
しづく切る傘と思案の曲り角

鳥取県 西浦小鹿

正直にまっすぐな愛進行形
太鼓打つ背中に女意識して
長ぐつをはくと心が温くなる
雨上がり昔と同じ虹に逢う
夕焼けに手を合せてる石になる

鳥取県 森山盛桜

何時笑い何時泣いたのかしゃれこうべ
四次元の中でもがいて蠢いて
蟹気楼も真昼の夢も男なら
白線の中でうっかり轍を踏む
善人が踏むひたすらに長い道

鳥取県 江原とみお

厄介ごとは神棚にあげておく
ワンカップ一つで弾みついてきた
恋人のできた太鼓がよくひびく
首が飛びそうで顎紐しめなおす
あれからの日本は尻っぱり腰である

鳥取市 春木圭一郎

雨もよし樹木と私よみがえる
朝礼をOA機器も聞いている
趣味多く定退なんかこわくない
しゃべるより君はしゃべらぬ方がいい
カンボジアに死す人生も大義なり

鳥取市 岩原喬水

人生は鬼や仏になって老い
火消壺また燃えあがる女に会い
点滴のしずくに生きる望みかけ
城跡の桜カラオケ聞き慣れる
ファイトだけあって老骨動かない

鳥取市 西原艶子

貧しき日せめて大きな卵買う
漁火は遠い希望のように見え
カロリーの計算しても食すすむ
今言うておこうか迷う女傘
これも幸いつでも逢える母がいる

鳥取市 武田帆雀

類は類持つて集まる酒の色
野心家の盃に泳いでいる私
勝ち意識して逆転の劫に陥ち
老僧の遊び相手に菊を挿す
こぶし咲く茶店羽釜の湯が滾る

鳥取県 石谷美恵子

父にない行動力を母がもつ
炎えるもの欲しくて赤い色を選ぶ
半数を割る支持率へしがみつ
欲の耳神仏の声きこえない
思い出を捨てに拾いに旅へでる

島根県 西村 早苗

そのことは私が決める但し書
ピアノ連弾汗は私が拭きましよか
腕組んでくれたで少し遠回り
村境わたしが迷った道でした
石仏きつといつかは笑わせる

島根県 榊 原 秀 子

筍御飯母の好みを命日に
夕焼け空からすも私も大好きだ
喋ったら重たいものが少しとれ
流行の靴が私になじまない
見る限りみどりの中で住む恵み

島根県 佐々木 鳳 笙

年頃につまんで欲しい京干菓子
伸びる子へ愛の支柱はぐらつかぬ
損得の秤とくに捨てました
受け皿の外へもこぼす妻の愚痴
一念発起女の城を開け渡す

島根県 高 野 律 子

夜道ゆく後ろにつづく足の音
言いたい胸に納めて今日は無事
勿体ないそんな言葉が遠くなる
決心を促す夕陽の波しぶき
時代追う寡婦の足音きしみ出す

唐津市 田 口 虹 汀

母の日優先 岩戸神楽の昔より
父の日はその日で済まぬ二日酔
貴男なら出来ると妻に励まされ
戦場へ臨む男の見る鏡
変人がやる気になった鑿の音

唐津市 久 保 正 敏

裏金が美人秘書にもあるノート
信管はまだ錆びてない肌の艶
たらちねの母悲します置き手紙
人間の誇りは街の娼婦にも
門限の要らぬ女と深い闇

唐津市 仁 部 四 郎

赤ちゃんのイビキ秘話には遠い顔
民草は歴史の秘話の底で枯れ
秘話一つ交換してる昼出湯
湯治場の広間で秘話の花が咲く
少年の秘話を磨けば玉になる

唐津市 山 口 高 明

質素でも誓いは確か披露宴
確かめて見たいが怖い答です
算術の下手な名医が居るスラム
高台の邸へ診療せぬ名医
鉄橋が跳台代り村河童

唐津市 浜本義美

ラーメンのチャルメラ佗し戻り寒

長生きも退屈らしい石にかけ

四季のない青果へ農夫世を稼ぎ

上向いて歩こう藤の唐津城

頑なに右向け右をして困る

唐津市 浜本ちよ

しゃくなげの気品に押され小さく居る

二日酔い電池の切れたおもちゃめき

顔のしわ見ないで髪形だけ直し

顔の艶賞めて造作には触れず

雲が行く思いのままに雲が行く

姫路市 丁坪サワ子

初節句孫は若武者紙兜

ゴマ搦りが上手で明日の絵が描けぬ

孝行の文字は死語の長寿国

亡夫の爪煎じて飲ませたいやる気

生き過ぎか未だこれからと七十五

高知県 小澤幸泉

置メガネやつぱり父の歳を越す

制服をそろそろ汚す五月病

阪神 親子げんかの味方する

本当の涙と血など流しやせぬ

乳離れ母は苦勞の新学期

姫路市 中塚遊峰

人間味豊かな友はいぶし銀

真実を吐いて涙をそつと飲む

くたびれた余生に医師の句が光る

色のない映画の中の自分かも

残る荷を降ろしてほしい古希の坂

高知県 北川竹萌

菊芽挿す前に防除を怠らず

父の歳故郷で一日する茶摘み

長寿国八十坂今日も忙しく

呼び鈴に愛の聖書をすすめられ

新茶煎る妻の揉む手と一致して

今治市 野村京子

日曜日の画廊のぞいた昼の月

姿見はみない神経性胃炎

妻だとして反旗ぐらいは持っている

死の美学さくらさくらが散りました

鍵穴の深さ待ち人きてくれぬ

富士宮市 渥美弧秀

一隅を照して椿ヒソと落つ

終章にさしかかっている無聊な日

目に耳に余生を弾む喜寿の夏

喜寿を越え日課ともなる詩とピアノ

百態の富士は絵になり詩になり

町田市 竹内紫鏑

西条市 片上明水

呆けられましたと率直な弟子
テレビゲームの孫のメガネよ
氷の音で来るウエイター
消しゴムも選び完全主義進む
一匹狼めいた名刺の刷りおさめ

京都市 山海友熙

阪南市 坂口公子

左手も右手も負けず草を引く
春めくや玉青画伯の絵に替えて
桜餅匂うがごとくに画かれたる
通り雨虹七彩に紅をひく
筍の一尺伸びて生き残る

西宮市 西口いわゑ

尼崎市 田中薫

隣席はマンガに夢中なる紳士
青畳一分のすきも無きが如
風みどり遠い記憶のひとつ
立ち読みの続き気になり雨の中
向う鉢巻時に威勢のいい夫

神戸市 山口美穂

奈良県 長谷川春蘭

母の日は老母へささやか新茶の香
きたないと言う銭頼りに生きてます
まあまあに暮せたらいいね葱坊主
十八に戻っても苦難のドラマかも
脇役も今日は主役の送別会

控え目な人で車も後を押す
人違いが往々にある天の罰
ブラカードやさしい言葉の字を知らず
泣き出してからの話は嘘だった
釘一本さされ話が行き詰まる
一寸止まるともう寄ってくる不自由さ
くすぐると天狗の鼻が踊り出す
ころころと母の前では笑う鬼
如意棒をもて余してる天狗ども
鉄瓶が昔々を言いたがる
真実を掴むに薄きたなごころ
真実が指の間を抜けてゆく
自分史の線があちこち切れている
シクラメン翳あるひとにときめいて
連休のダンブ家族みんなが乗っている
芽柳に心もほぐす朝の駅
春風の尾行を許す日暮れ坂
老いの連れ無口になりて花疲れ
一病の砂糖ひかえめよもぎ餅
春愁は千の御手ある仏にも

静岡市 安本 晃 授

富田林市 片岡 智恵子

仮名書きの手紙で愛をたしかめる
きな臭い話の中の火消壺

火加減を知らない孫の目玉焼き

仕合せの耳に聞こえるほととぎす

三面鏡目と目の出会う二日酔い

大阪市 北 勝 美

雪五尺解けて流れて春の水

中禅寺立木観音下目向き

ふる里は地名の中にもあるロマン

カタカナで誤魔化すイメーজ変えただけ

偽アカシア花で真白く御勝山

北九州市 梅田 宣 司

その中で恩師の靴が粗末過ぎ

これぐらいでどうやと七味唐がらし

啓蟄にわれもあやかり捜し物

これはいい傘寿が来ても春子さん

真夜中に命縮める煙草買う

寝屋川市 平松 かすみ

肩パット外すとまるいまるい文字

ご都合で夫は無口を決めている

何ごともなくて六法お邪魔虫

才女にも悪女にもなれず主婦

ありがとう言う間もなくして霊柩車

世代交替ひそかに出口あけておく
かしわ餅の葉に亡父がいる大きな手
さくら湯のだんだん近くなるふたり
胎動の日から無欲になれる愛
言いわけが諄くて喜劇めいてくる

大阪市 渡部 さと美

心配をさせてと嬉し息子の自慢

鎧はずし妻にも飲んでほしい酒

飴一つずつなめて仲間にしてもらう

保険外交慣れてきれいになりはった

明日の雨予報先取りしてる膝

藤井寺市 福元 みのる

慕ってる人の返信二行だけ

銭の要る話となると黙り込む

ひらがなに変えて銀行堅さとれ

使途不明金は賄賂に化けて出る

その気持分かる分かると飲んでいる

茨木市 井上 森 生

かしわ餅少年の日が口の中

長島の野球はじっくりひとり酒

ほどほどに働き過ぎはたたかれる

Jリーグ裏に待たれるトトカルチョ

お笑いはいみじとな健忘かんちがい

吹田市 茂見 よ志子

色気ある句を詠みたいが嘘になる

風呂トイレ石段までも手すり付け

齢ですか忘れましたわピンク着る

出張へきまり文句で念を押す

公園のベンチ寝そべる人を避け

川西市 松本 ただし

ケセラセラ口三味線で軽く住む

面目を施す自信は持っている

ワッペンにおつちよこちよいと書いておく

巧言と令色に足す二枚舌

ロボットに仏が住まぬ泣き所

豊中市 吉田 あずき

ことわりの手紙例文より捜す

紙コップ女の企みかも知れず

あじさいの虚と実の間に生きる彩

幸せの鍵 普段着のポケットに

お茶の味わかり淋しくなつて来る

伊丹市 山崎 君子

仏門に入った友の花便り

母の日に母のカードでプレゼント

ハンサムな歯科医のマスク気にかかる

流行語一つつかって若返る

つまみ喰い蓋を上手にあけている

箕面市 岩津 ようじ

鉦の音澄む日濁る日御仏前

妻の愚痴さえも聞かない無聊の日

辞めた社も業績不振安堵する

北の島煽つてみたり忘れたり

破れ鍋も病み綴じ蓋も傷だらけ

吹田市 井上 照子

皓皓の月も涙のわけ知らぬ

フィクションと思わせて欲し別離の夜

ボタン押す指一本の調理器具

好みではないが手頃な値に惚れる

虫喰いの菜っぱを少し信じてる

富山市 酒井 輝

拔擢に漏れて自分に戻る朝

日本の子に教えない日本語

老い二人おとぎドラマを創る日々

男手で育て乳房は語れない

オワダ駅あやかり族を待つ屋台

守口市 羽原 静歩

夢の掛橋の中でばったり亡妻に会う(亡妻を想う二句)

声かけた女があまりに亡妻に似る

靴箱に子供の顔が書いてある

念のため辞典を引いて確かめる

寿司三つ食べ残してる老いの坂

池田市 岡 本 吉太郎

いつの日かアメリカそっぽ向いている
金だけが味方割り切り老いを生く
ずるい人昔参謀今官吏
いいわけを上手にやっててれている

貝塚市 行 天 千 代

若殿に召されて千代田へお興入れ
書道六段まだ習う気か娘盛り
この齡でまだ辞書買って笑われる
何時終る八十路の坂を今半ば

諫早市 原田メイシユン

強国は時々原潜出入りさせ
大物は金で生き抜く知恵を持ち
ホステスとの内緒話は金がいり
すぐ好きになれると仲人無理を言う

和泉市 西 岡 洛 醉

洗濯機の朝を達者な妻の声
罪の無い一日だった陽が赤い
ネクタイの派手さに歩幅ロック調
文机に欲を忘れた顔対峙

松山市 谷 真 風

付添さんは帰り独りの夜となりぬ
光っても光らなくても磨くのだ
てんとう虫掌をひろげたら飛んで行き
わが恥は胸にたたんで包んどく

岸和田市 岩 佐 ダン吉

カンボジアの空澄みきっている恐さ
母さんがひとり味方にいる余裕
なめらかにお世辞でてきて寂しいね
せつかくの美人がきつい河内弁

唐津市 筒 井 朴 竜

二度童子三度の食事忘れない
碌でなし不貞寝の妻は夜の蝶
蜂が来て蝶と乱舞す花の蜜
苦労性孫の就職先案じ

宝塚市 吉 田 笑 女

ものさしで計れぬ人のプライバシー
遺されたしあわせ貸借りない暮し
言い訳をする子へ耳を貸してやり
かすみ草主役の花を引き立てる

福岡県 横 地 正 好

自分史の筆短絡の悔いばかり
自然食ラーメン工場もよもぎ乾す
突当るほどに人居て都市孤独
義歯で噛むかちかちを聞きながら

河内長野市 井 上 喜 醉

もう歳や嘘の種切れ笑われる
日焼けして弁当うまい二度の職
自己主張された鯨の板ばさみ
男なら一度はしたい綱渡り

河内長野市 植村喜代

よその庭覗く桜を切った罪
首だけは繋ぎとめたい不況風
花冷えの廊下で写す三千院
騙されて本気になっている男

和泉市 岡井やすお

花一枝手向けかうカンボジア
国費掛けメダル狙わす自衛隊
童顔のピッチャーこわい鬚を立て
シャガールにゴッホに会いにゆく画廊

仙台市 川村映輝

富士の山日本晴のご成婚
妻の留守狙ったように客が来る
傷口を舐めてくれればそれでよし
新聞休刊猫一匹走り去る

西宮市 瀬尾六郎太

水無月の花嫁姿はよ見たし(雅子皇太子妃)
屋敷内老木桜楽しませ
人生の最窮極まで日記書こつ
夏殷周華夏文化の連綿と

鳥取県 幸家單車

ロボットの進化人間臭くなる
生活の秘話は語らぬ父の意地
即答は除けて娘の値を上げる
逢いに行く道信号が赤ばかり

鳥取県 さえきやえ

点滴をいたわるように小糠雨
草ぼうぼうこれ文芸の小径です
畑に出てやつと人間らしくなる
女の美学 時に耳栓しています

鳥取県 上田俊路

花冷えにふつふつ湧いてくるファイト
少年倶楽部に貰った夢がまだ残る
少年の掌にある二十一世紀
人生の知恵ばちと小出しする

鳥取県 西川和子

姑をどう演じるか五里霧中
食べなれぬ料理に入れ歯なっている
発展に一役担う老人会
その秘話を聞いて人柄しのばれる

大阪市 中西兼治郎

奥の院まで頑張った母の足
家族会議などは要らない老い二人
幼稚園小さな愛がもう芽ばえ
エスさまに感謝の祈り箸をとり

大阪市 寺井東雲

時により電話残酷物語
二人から始まり二人残る家
先生にお嫁に行くとおちゃめな娘
笑っていれば何時か倅せやってくる

群雀 不協和音の渦をたて

大阪市 大野 武太

叱らない人がよけいに怖く見え
妥協していつも貧乏くじをひく
齒ならびに生活歴を見る齒科医

大阪市 神保 拓生

治安よい国だけ行こうPKO

親ばなれさせるたんぽぽ風に乗せ

今晚は叱った人も眠れない

富める国猫もねずみも知らん顔

大阪市 町田 達子

亡姉も来る卯の花苑の久し振り

煩惱もそれで宜しいとは羅漢

鯉のごと自適の風に舞えばよい

能面の魅力とりこにされそうで

大阪市 松尾 柳右子

正義の旗多すぎても絵にならず

路地裏のあやめ聞いている良い話

花言葉知って届ける憎い人

あこがれの君も老いたり同窓会

島根県 藤原 鈴江

あまりにも順調すぎても気味悪い

老いらくの恋まんざらでない春よ

すつきりとし過ぎて色気のない芒

しがらみは時の移りを忘れさせ

研磨機に出合つてからのダイヤ粒

米子市 白根 ふみ

でで虫のゆうべあそんだ跡がある

本音吐く野良着姿になるときに

組に勝手な嗜好ひとり皿

鳥取県 野中 御前

老骨に鞭打つことはやめにする

引き金を引く糸口はいつも妻

濡れ手に粟そんな思案もしてみたが

賢明か無能かわからない無言

堺市 一瀬 福一

風呂上りもう休肝日忘れてる

一本のストロー恋のライセンス

育児法裸をみんな見てもらい

西芳寺雨はあしたの苔の色

堺市 柿花 紀美女

鶯の擬音を流す春花屋

救急車我追い越して散歩道

つつましく老いの部屋にも春の花

生きる事の厳しさまだまだ続きそう

堺市 古市 三千代

トラクに乗るをいやがる但馬牛

野草料理口いっぱい春かおる

ロボットがロボット作り物つくる

風邪引いてまた風邪引いて毛糸着る

和歌山市 山田 高夫

出雲市 小白金 房子

空振りをしても絵になる伊達男
負け犬になりたくはない竹を踏む
生臭い大人同士でする話

馬鹿をみるたびに賢くなりました

和歌山県 小倉 アサ

好きな絵をまだ描けずいるほめ言葉
子を思う母の縫い目にならない終わり
梅ぼしもらつきよも甘くなる世間
瞳の高さ合うたうどんの輪が永い

和歌山県 岩崎 瑞穂

借景も単価に入れた分譲地
当人が気付いていない七光
雑踏の中で味わう孤独感

迂闊にも秘書の裏切り気付かない

和歌山県 西口 忠雄

嘘ホント夫はマンガ見てるだけ

血統書もった直美の当り役

わきの下こちょこちょされる孫が好き

薬一本搦んで生きる難波船

出雲市 板垣 夢酔

暗雲にあわてて合唱するカエル
泣き笑い鏡上手に真似てみせ
年日ごと醜くなつていくも老い
海開き聞いて人喰いサメが来る

濃く薄く大山緑の綾を織る
田植機の音忙しく朝を出る
横道がすきな男のはしる酒
年金で泳ぐ孫の鯉のぼり

出雲市 富田 蘭水

バスポートまた若くする夢を持つ
乱世かもエイズが教材になるといふ
肩書を捨てた名刺と翔んでみる
寝静まる耳鳴りばかり攻めてくる

岡山県 花田 たけ志

辻褄が裏側見せぬから合わぬ
仲間からプラスアルファが来る余命
輪の中に入れば頑固が袖を引く
珍しい話は飾りが多過ぎる

鳥取県 乾 喜与志

敬老会で会う町長は三代目
帰る家あり人生の愉しさよ
たやすくは仏と共に歩けない
上手下手越えて愉しく筆握る

鳥取県 乾 隆風

煩惱の火はまだ燃える達者なり
後継ぎはないが田んぼを青くする
冷やめし食べてもぬくもりのあるお人
雑草ですが陰と日向はよく解る

鳥取県 黒田 くに子

揚底のお世辞で候補腰を折り
修飾語とてもきらいな半ズボン
窓いっぱい開けてゆとりを見せておく
保護色が強くて自立せぬ蛙

鳥取県 石尾 かつ乃

母の日の冷たい風は許さない
うれしいね花束贈る役が付き
家族から骨に沁むほど愛もらう
落ち葉掃く誰か訪ねてくる予感

鳥根県 槻谷 一葉

逢って見ておんなじ事を思ってた
花いっぱい庭にも部屋にも心にも
つぎつぎと花は命をリレーする
夜半の雨ばたんの花にそつと降れ

鳥取市 前田 一枝

お互いに天狗話がふくれ出す
末っ子に添い末席に慣れて生き
メーデーの列についてく市場かご
うそまぜて話の幅も広くする

鳥取県 田村 きみ子

露を踏み色即空の風に酔う
六十のおんな盛りかよく遊ぶ
週五日主婦業嫁に任される
死んだ真似しようかなーと床につく

鳥取県 鈴木 公弘

風向きに合わせて衣替えをする
収支トントン肩こりが治らない
ストレスが財布に溜まるから休む
良い事が起きそう朝の下がり蜘蛛

茨木市 堀 良江

親ばなれしたばかりです猫の恋
堂々と光らせているイミテーション
おばさんにお愛想よしのボーイさん
迷い抜いた揚句の果ての忍一字

茨木市 藤井 正雄

孫の顔見に来いと呼び留守頼む
風薫る遊び上手なイヤリング
絵の具皿乾いて巨匠逝つたまま
犬嫌い勤まりそうもないバイト

鳥根県 石飛 水煙

過去のこと言うまいこれから第一歩
手ぬきなど知らぬ明治の亡母だった
国富んで醜聞だけの味気なさ
黙秘して妻が主導を握る時

箕面市 椎江 清芳

四国路の遍路札所は春の雨
目前のチャンス掴めぬ運のなさ
霊柩車角を曲がると陽が落ちる
都会恋う若い右足持て余す

箕面市 中 嶋 田実子

嫌われてカラス利口になっていく

九官鳥忘れてくれぬひとり言

言葉よりやさしい事を書く手紙

同じ手で人を愛して人を斬る

守口市 結 城 君 子

洞川のバイトの青い目と会話

掘ごたつほとと安らぐ山の宿

点々と著我の花々またカーブ

みたらい溪谷やすやす降りるのはヤング

豊中市 三 宅 つえ子

桜咲くうきうきと啼く鳥と人

車椅子がゆっくり動く花の下

誘われてワルツを聴きに春だもの

柔らかいうどんを食べてる春炬燵

豊中市 辻 川 慶 子

青葉風足どり軽く早や立夏

鯉のぼり息子親父の貌になる

ゴールデン トップ始めて空仰ぐ

太陽に感謝真白く干し上がる

香川県 新 川 マサエ

音楽をかけるとにぶい手が動く

寝た切りのひげも元氣によく伸びる

人目など気にせぬ若い猫の恋

学ぶことばかりで老いが近よれぬ

香川県 永 峰 伽名子

初恋の面影よぎる駅に佇つ

亡き母の背なで做つた身嗜み

青葉若葉したたる剣山系は日本一

お土産のあめごを配る絆

藤井寺市 中 島 志 洋

頭数足らん時だけ声かかり

戦友会未だ階級が生きていた

なれそめを笑って話す齡になり

お隣も孫で賑わう夏休み

吹田市 瀬 戸 まさよ

中年の青さでもよし正義感

軽小に憧れ果てはプチトマト

大正の独身にある拒み癖

OLの若さはつきりイエス・ノー

倉吉市 最 上 和 枝

熱帯魚留守を守っていてくれる

菜園の隅っこ飾るチューリップ

たらの芽に詫びて新芽を戴いた

風みどり嬉しい話もって来る

芦屋市 黒 田 能 子

好きだ嫌いだと一つ屋根の下

すらすらと言うてる嘘を疑わず

裏切って仏ごころがうずきます

目配せがあつて味方かなと思ふ

枚方市 海老池 洋

シャッターチャンスへ邪魔がまた通り

定退の鞆希望もつめかえる

肩書のとれた名刺をだししぶり

竜門の夢も空しく太る鯉

寝屋川市 堀江光子

子守唄母の形見のひとつとし

落款に紙は命を持ちはじめ

懸命にボタン掛けてる自立心

待ちわびた返事直ぐには封切れず

和歌山市 玉井豊太

形なしになったと思う老け徳利

藍色の便箋あした逢いましょう

恋の電話都合のわるい時かかり

妻は今日着て出る服を並べ立て

奈良市 米田恭昌

奈良町の風情を誘う女傘

紐つきと知らずに乗った口車

自販機の乾く音きく終電車

鉛筆の芯折れたままサクラチリ

岸和田市 三輪通彦

お世辞でも悪い気のせぬ褒めことば

不況風女性の歩幅狭くなる

人脈の広さがわかる通夜の客

検討をしますとやる気ない役所

大阪市 岡田ふみ

御祖父の御成婚には踊りに出

今上の御成婚にはテレビ買い

曾孫抱く重さがじんと胸にくる

守口市 森川まさお

駅前の広場へ御用のない隠居

名水の残りは溝へ流れ去り

宿の下駄脱ぎつ放しのあとを履き

和歌山市 北山好笑

白旗を掲げるに手間はかからない

すつきりと浴衣ざらいの貝の口

天狗夫婦鳴らない鈴を抱き離婚

島根県 加本義良

追憶を言えば昔の愚痴になる

弾丸の下潜った男の仕切り線

子の寝顔可愛いライバル持っている

倉吉市 野口節子

考える余裕がほしい蟻の列

化粧して五割女をあげて出る

真剣に米を研ぐのは男達

大和郡山市 坊農柳弘

恋文も督促状も吞むポスト

単身赴任月に一度の天の川

ダイエット妻が推めるビール腹

倉吉市 米田幸子

口さの無い連中が汚染源

絵に描いた餅に何度もひっかかる

零戦の友は笑顔で征ったきり

宝塚市 中田純次

照明に負けじと競う厚化粧

通信簿うまい褒め方子にやる気

形見にと子供保険を孫につけ

岸和田市 田中文時

前例に不本意ながら逆らえず

飲む身にはムードに欠ける紙コップ

コマーシャル ドラマのラストしつこく

豊中市 滝北博史

みおつくし鳴っているのに北新地

恩返し期待しないが夢を見る

恩知らず二年に一度墓参り

大阪市 清水利武

意地のある男は多く語らない

出稼ぎの親父屋台で友が増え

赤のれん政治の愚痴を聞いてやり

豊中市 井上直次

ポケベルの紐が繰るマスメディア

久びさに妻の手を取る通り抜け

もめ事がおさまりまして仏様

鳥取市 西村黙光

酔い痴れて針の筵へ大胡坐

味方より敵に弱点教えられ

盃の底へ渦巻く嫉妬心

堺市 中野櫟子

姑となり和という彩に比重おく

京めぐり心のトゲが取れてゆく

厄年を飛躍の年とはりきる息子

第24回 奈良新聞川柳大会

とき 7月18日(日) 午前10時開場

ところ 中宮寺鳩和殿

(JR法隆寺駅からバス法隆寺下車)

宿題と選者 (各題2句・午前11時半締切)

「砂」石田 常念 「積む」鶴本むねお

「道」福田 秋雄 「半分」宮口 笛生

「断わる」杉森節子 「港」石岡 正司

「斑鳩雑感」片岡つとむ

席題 1 題 芳野 村雨選

会費 3000円(昼食・拝観料・発表誌呈)

申込 7月12日までに下記へ

奈良市三条町606 奈良新聞社事業部川柳係

◎欠席投句は7月12日までに下記へ

奈良市北市中町71

杉野 睦朗宛

奈良県教育委員会

斑鳩町教育委員会

奈良県川柳連盟

主催 奈良新聞社 後援

大家の、い、ろ

(31)

橘 高 薫 風

昭和5年の『川柳雑誌新春特別号』は京阪神支部の連合句会が日本橋俱樂部で開かれ、百七名の出席者で賑わったことを報じている。

新春句会は東京の前田雀郎氏を迎え、雀郎は「素」と題し、水府と路郎はそれぞれ「広告と川柳」「銀バスの如く」の題で講演し好評だった。同人や一般投句者も増え、著名人の原稿も山積して、路郎の書く編集後記は、「発展から発展へのプロセスをひた押しに進んでいる。我等川柳人の熱と力が如何に旺盛であるかを見ることが出来て愉快この上なし」と意気軒昂だ。第七巻の春を迎えたことに因んで、杜関係の四十三名から「六七歳の頃の思い出」を特集、路郎自ら「島の子」と題する小文を書く。

「私は広島県の尾道で生まれ、生まれて間もなく瀬戸内海の周囲六七里の島にあずけられ、そこで大きくなったのです。七つの時に生家に帰されましたが、どうしても帰るのがいやだと言って、泣いて泣き止みませんでした。今、萩の茶屋にいる兄が私を背負って

海岸の夕べを歩き回っていましたが、どうしても泣き止みません。とうとう閉口して再び里へやられました。その後も小学校へやる関係上、帰すことに骨折ったらしいが、八歳の時に、島の小学校へ通いはじめました。そんなことでのために私は小学校で「アイウエオ」を習わず、「いろは」も「をわかよたれ」ところから習いはじめました。こうした行き方がその後の私の生活について回りました。

少年にかがやくは鯛か海の国」

路郎は句集『旅人』のはしがきて、

「私の句はどちらかと言えは淋しい句が多い。私の性格がそうであり、私の歩んだ道が峻しかったからでもあろう。要するに私は川柳によって人間愛を求めてやまなかった。」

と言っているのも、生後間もなく母と死別した境遇によるものと思える。この句に接し、私は水府の有名な句、「熊野灘鯨が見える母の背」と相通じるものがあるように思える。

前田雀郎の新春句会での講演の要旨は、「川柳とは何ぞや」という疑問を白紙から考

えようと言うものだ。川柳の持つ風流は、川柳翁出現以前の「武玉川」をも疑いなく川柳として語っているのだから、前句付の向うにある俳諧から捉って来たものであると考える。俳諧といえは直ちに芭蕉を思い、さびとか風雅でなければ俳諧でないように考えるようだが、芭蕉の風流以外にも、「まこと」を思想とする鬼貫や、「自由」を思想とする西鶴の風流が厳然と存在した。多くの俳人が芭蕉の模倣に明け暮れているところへ、個性的な一茶がひょっこりと素の風流を抱いて飛び出して来たまでのことと言え、素の風流とはどのようなものか判断がつくのではない。

川柳人も川柳は江戸のものだからとか、皮肉なもの、通ぶつたものなどというので粹がつたりしない、もっと素にかえて句をつくらうではないか。これは川柳だとか、いや俳句だとかいうようなケジメを言わず、真面目の俳諧にかえり「素」の風流に遊びたい。そうすれば川柳は行き詰りを招かず、いつも新しく、その世界はいよいよ開けて来ようと思える。(昭和5年1月5日)

この月、橋本二柳子は突然に緑雨と改号する。あまりに急なので、口癖になっている編集部の中は呼ぶのに困り、二柳子の緑雨君と当分は弱らされた。

自選集

大矢十郎

八木千代

二子山部屋から土俵の鬼が出た
PKO 称えて送る唄がない
優しさもどうせ男の下ごころ
アンタツク火の粉も嫌うベレー帽
貢献とやらで巡査を戦場へ

工藤甲吉

辻白溪子

納采の儀にも出てくるコマーシャル
ぜいたくな時短などない蟻の列
小児科の病棟もある鯉のぼり
カミソリと言われる人でにこにこし
考えるロダンばかりで決まらない

岩本雀踊子

本田恵二郎

妻逝った男に一升下げて来る
ゼニのない日曜日で落ちつけぬ
花好きな遺影に花屋で花を買う
汗になる缶ビールを呑んでいる
妻の居るぬくもり友にきかせてる

やじろべえ双つの肩と大屋根と
屋根のどこかに父の手型が彫つてある
大屋根の重さでかかる首の縄
屋根を守り抜くのは女かもしれない
旅はめぐって祖先の屋根に繋がる
法善寺素足の綺麗な女下駄
学歴に差がある辞令愚痴にする
目立たないように見送る人が居る
本心をためす涙が出て来ない
聞き合せ少しも参考にはならず
無二の友 花持たせ合い持たせ合い
近代化 故郷の面影どこへやら
祝杯へ主役も相当いける口
流石なり度量の広さ洩れこぼれ
顔パスがいささか古くなり過ぎた

松川杜的

恩返ししたくて来世をまた契る
みちのくの香りが残るこけし棚
窓少し開けて花の風に触れ
都わすれその紫が淋し過ぎ
母の日へ電報よりも生の声

藤村 女

文楽の余韻を抱いて法善寺
ドラマめく我が人生を振り返る
近道は教えぬ父の地図がある
子や孫に囲まれ耐えた日遠くする
仰がれる空にも雲の好き嫌い

水粉 千翁

散るまいと思うもあろう花になる
一滴の雨に蛙は何か言い
はるかなる春の小川の音流れ
よその花きれいに見えてもめはじめ
墨に乗す一渦千里の筆の道

児島与呂志

そやさかい言うたやんかと念押され
ちよっとずつ勝手にうなづくことに馴れ
また叱言聞き流してから立ち上がり
気楽うに生きる歩幅の寺の坂
言い負けて汗ふくこともない話

波多野五楽庵

でつぽうと鳴くのはおよし喪の朝に
気まぐれな夢に泣かされ雨に泣かされ
もしかして無縁ぼとけになりそうで
独楽回すたった一人の青い部屋
時計見て深く会釈をして命

野田素身郎

明治 大正 昭和 平成 母達者
乳母車野菊を摘んであやしてる
落花しきり店の中まで散ってくる
働いてる人にすまない日向ぼこ
手出しするから蜂反撃の針を出す

野村太茂津

閑を満たして惹き込まれてく広辞苑
マスコミのやらせか笑顔ぎこちない
弱者の恫喝憫れ外交テクニク
補聴器をつけ四次元に立つてみる
補聴器で悪魔の声を聞くとときも

久家代仕男

無住寺に音のあるのは風ばかり
啄木鳥が蛹の情眠呼びさます
拗ねたきりこころを開かない蕾
出かけるといのに妻の寝めごろし
戦争の火種 地球の笑窪にも

月 原 宵 明

信号が青で逢う気になりました
指の骨鳴らぬが脛はよく笑う
針千本呑む気は更にはない小指
定年へ妻は謀反の時を待つ
ほろ酔いへ月がお供をしてくれる

金 井 文 秋

どう生きる三百六十五連休
企業戦士おだてに乗っている過勞
根性が上司の機嫌ようとなぬ
手抜きする釜めしのもとすしのもと
一度の失敗で許されぬ酒もある

藤 井 明 朗

句碑に会いたく燈台の里にくる
自我捨てる裸になつてからの運
回り道した人生に徳を積む
いつわりのところをさとす母の慈悲
ひる寝するあとのさわやか缶ビール

正 本 水 客

フロントは四階 海の香が窓の下（赤穂御崎）
宿の自慢は島が招呼の間
つつじ咲き藤咲き八重の桜咲く
街はみどりにあふれて花の色
塩作る歴史の重さうけとめる

有 働 芳 仙

野次馬の中に自分も居た苦笑
もう疾うに相手も俺を読んでいる
園児等の遊戲へ桜の花咲雪
親と子の絆が切れる髪を染め
五十年貴方の歩幅に疲れ切り

遠 山 可 住

次に来る嵐 緞帳へ音が消え
さし当りお金のほかに用はない
善人が騙されそうに覗いてる
中の上あたり別れるはなしなど
外泊をもらて筍食べに去ぬ

谷 垣 史 好

輓馬にも馬の誇りがあるものを
蟬三日螢二十日の尊厳死
キャスターは何に怯えて早口に
兵一人死んで美談は真つ平だ
あの世から密書が届く出かけねば

恒 松 町 紅

人情味のない自動化へ老いの意地
拒産症いつかはつけのくる国土
つつじ満開下は無粋な駐車場
電話口向こうも閑な小糠雨
酒の手も落ちたと老眼鏡を拭く

小出智子

おふくろは二階に居ると決めている
生きているから人の誹りは免れぬ
シュークリームを作ってくれる女の子
少し離れて眺めていると素晴らしい
遠い日に蹟く雨の河川敷

小林由多香

不況風 父の笑顔まで奪う
うれしい誤算農業継ぐと言いだした
好きな本開けばこころ風いでくる
城下町の名残り鍛冶町 大工町
ポーナスを待つ家計簿の深い息

黒川紫香

癖のある字を寄せ書で懐かしむ
屋上で騒音を聞く真つ昼間
ちゃんづけで呼んでくれてた姉も逝き
大の字で寝れない部屋が僕のもの
怒らせて帰した後味悪くなる

植村客遊子

七人の敵を若者よくこなし
伝統へ母従順に老いて行き
雑草も一望千里の美しき
成功をすれば意外な敵が出来
からくりを見せぬ女房にたよりきり

高杉鬼遊

豊かなるこの世に要らぬもの多し
一日に一度笑えば楽しかり
生かされて何の覚悟もないままに
長らえて平成の世のめしを食う
なるようにならぬ浮き世を流される

西田柳宏子

五月病 母の味噌汁欲しくなる
アカンベーしながら並べる美辞麗句
薬に木の執念が燃えている
責任をとった血氣を抱きつづけ
もともとは裸 失敗苦にせず

阿萬萬的

資金援助にも自主性のない政府
欠陥だらけの政治改革どうする気
のらりくらりと責任転嫁する政治
日本史 節目節目の残酷史
飛鳥路に悲恋をかばう風のうた

第十八回全日本川柳群馬大会 平成六年六月十二

日(日)、群馬県高崎市文化会館(高崎市末広町)
で開かれることに決定した。観光と前夜祭は前日の
六月十一日(土)、宿泊は高崎ターミナルホテル。

後藤梅志

東野大八

恋人になったら死ぬるまで一緒 梅志

私の句からこんな句を見つけた人があれば何を言ってるのか一寸分からないだろう。

これは私と妻との間の気持ちを最も端的に言い表わしたもので、つまり「死ぬる時も一緒に死のうや」というわけで、それが幸にも四十七、八年続いている。こんなことは阿呆らしくて説明の限りでもないが、愚妻との間は極めて仲が良い。

私は生れつきの野人で、怒りっぽくて短気だが、妻即ち女房の方は思慮分別があり、私がおとなしい時は金も使っし、我儘もいうが、私の気が荒っぽくなると、如何なる場合でも私が角を折るように仕向ける。

私は有為転変のはげしい方で、随分色々な境遇を経ってきたが、妻と一緒に居る限り一種の吉瑞を覚えるのである。ところがその女房は、世話の焼ける点ではこの上なしなのである。

結婚したのは私が二十六、妻は二十二歳だが、恋愛時代が三年続いた。上流の家庭で育つて世の波風にも当らず、東京の女学校時代の友達も深窓に育つた人ばかりと見え、「梅毒りん病」とはどんなものか新聞を見ても分からず、質問されたのには驚いた。第一、ある易者から子供の時分、お嫁さんは実に恵まれた月日の下に生れ（妻は一月一日生れ）、生涯悪疫や危難にも会わず、この上なしだが、子宝に恵まれません、と言われたとかで、結婚する資格がないと独りで決め込み、結婚に

同意しなかったものである。

信じると少しも疑わないというのも困ったもので、今では一男四女の女親であるのもおかしい話。銭勘定は分からないし、今でも切符を一人で買ったことがなく、途中ではぐれると迷い子になることはうけ合ひである。

母の下駄ゆがまぬなりに古び居り 梅志

これは仮りに母という文字を使ったが、妻の下駄なので、妻では具合が悪いので母としたまでである。

右の一文は、『川柳雑誌』昭和39年11月号の「妻を語る」の特集に出たもので、つい調子がよいまま長々と引用した次第だ。

昭和44年10月18日に大阪市で催された「梅志句集刊行披露の会」への招待をこの人から受けた時、「愚妻との金婚祝いにつき」という但し書があった。その気になっての上阪は、実は右の一文がかくし味になっていたからである。もっともそれ以前の二年前、奈良で開かれた大陸同窓会に「薫風さんに誘われて参上しましたが、お目にかかれて至極満足しました。小生は貴台の大ファンでしたから……」

という典雅な文字の殺し文句も、まあモノを
いつてたわけである。

梅志、通称房三、本名は後藤喜四郎、明治
27年10月13日水戸市生れ。

ところで筆者が川柳人後藤梅志に注目し、
関心を寄せた一文がある。それは『川柳雑誌』
No. 371 (昭和33年4月号)の「初心忘るべ
からず・花鏡」のエッセーである。彼は世阿
弥が風姿花伝書の後に著したその「花鏡」に
「初心忘るべからずの項」で「人間は滅する
ものであるが、能には終局がない」と言っ
ている。その注釈を通じて川柳の体質へ求真し
ようというのである。これが書き出し。この
稿の後日、梅志は、同誌No. 389で次の如き
ユニークな発言をしている。

「川柳を作ること、選をするということ
は、全く違った仕事であるにも拘らず、同一
の人で行われている。句会の場合は致し方な
いが、このため川柳は、質の低下を余儀なく
されていると見ることが出来ます。」

つまり、作家が作家自ら選をしてしたり顔
をしている。ここに問題がありそうです。

現在、路郎・水府・紋太の如きは、ザラに
ある作家ではない。然るに川柳界では、そう
特別な待遇を与えていない。この人達こそ、

大選者の待遇を与えるべきではないか。

一、この人々には権威ある選に没頭して貰う
こと。

一、句を作ったり、随筆を書いたり、新聞の
選をしたりする仕事は止めて貰いたい。

一、選者は選をするだけで収入が安定するよ
うに、作家は選句料を支払う。一句二十円
ぐらいが至当でしょう。

作家同士がこんなことをたまたま話題にす
ると、「そんなこと」と一笑に付されると思っ
が、私はこうしたことを虚心に話し合っ
たい」(個性と私見 後藤梅志)。

この時点での発言は、今から約三十余年も
昔の昭和34年の頃である。今では選句料や選
者への謝礼は、ほぼ定着化しつつあるものの、
彼の発言をめぐる環境にはまだまだほど遠い。
まずはこうした問題の実現は、さほど遠く
ない川柳界の課題になりそうな事だ。

梅志は観世流謡曲師範の肩書を持っていた。
六百余年を闊した猿楽能を、今日の能の貴族
に押し上げた巨人は観阿弥と世阿弥の親子で
ある。南北朝が合体して出現した足利室町幕
府の誕生とともに生れた観阿弥が旧約なら、
世阿弥は新約ともいわれ、その時代とともに
推移した猿楽能の能の世界は、観世流謡曲師

範なら知悉することが素養資格でもあろうが、
梅志はそれらの芸能のエキスを川柳界にもと
り入れることを忘れなかった。

梅志の忌日は昭和四十五年一月十五日だっ
たが、その臨終の昏睡の中でやっと手にした
のは彼が生涯唯一の出版物「秀句鑑賞と梅志
句集」の校正刷りであった。

「梅志さんは、責任観念の強い人。自信の
持主で編集の仕事にも見落しなく、路郎から
も信頼されていた人。何事にも筋が通らねば
納らぬ性質で、切目正しからざれば食わず
の厳しさが働くので、一言居士とか、うるさ
型のそしりを免れぬ損な人。然し、一から十
まで損をせずに世渡りをしようとするみみっ
ちい魂胆の人よりも、遙かに愛嬌があつてよ
い」(同書序文・麻生霞乃)

川雑の編集を一手に引き受けて苦勞した不
二田一三夫は、「大久保彦左逝く」との悼文の
中で人間的にも心優しい苦勞人の梅志を「口
先だけの人でなく、心と心をぶつつけあう人
だった」と心のこもる悼文を残している。

鼻筋の通った一見凜然たる古武士の風貌を
備えたこの人物は、その気性まで筆者の父と
ウリ二つであった。懐かしい人であった。

▼次号は「勝谷山川児」

柳籠裏三篇研究 (十七丁)

佐藤要人・八木敬一・七久保博
岩田秀行・紀内恒久・西原 亮
大野温干・青木迷朗

鈴木倉之助 故岡田 甫

300 やさ人にしてハ氣の有ル競馬也

八木『「やさ人」はみやびた人。「氣のある」は、はっきりしないが、氣上がるの意味だとすると、のぼせる、逆上するの意。「競馬」は競馬香ならん。加茂神社の競馬に擬して聞香者が赤黒両方同数に分れ、聞きあてた方の人形を進ませ、早く決勝点に入った方を勝ちとする遊戯。

主題句は、上品なみやびた人のする遊びだけれども、競馬香は余り熱が入ると香を嗅ぎ過ぎて、のぼせ逆上して来る、といった意味か。

七久保『「氣のある」はこの場合、「氣骨ある、骨っぽい」か、または礎稿にもある解釈

で「氣が上がる、逆上する、物につかれる」というほどの意であろうか。

それはさておき、この句、毎年五月五日行われる加茂神社の神事、競べ馬を詠んだものである。

加茂よりハやさしい奥の競馬也 二八三
文道に武道を加茂の御祭礼 三三九

岩田『七久保説贊。大宮人は荒々しいものに、関心が無いものであらうに、それにしては、「加茂の競馬」などという荒々しいものに、興味を示すことだ、というほどの意と考えた。

『競べ馬』は『枕草子』『宇津保物語』にも見え、加茂神社で行われるものが有名であった。

佐藤『同。乗馬も武道の一つであり、特に競馬となると荒々しいふんいきになる。そういう氣分を好むらしいのが、不思議に思われる、というのではないか。「氣のある」は、荒々しい氣持がある、の意ではなからうか。

岡田『同。『徒然草』などでこの競馬は江戸の知識人は知っていた。「氣のある」は熱を入れる、夢中になり力む意。

301 上品なやふで不義物語なり

八木『「源氏物語」のことであらう。一般に『源氏物語』は上品なことを書いていると思われているが、その中身たるや不義物語なのである。

岩田『贊。藤壺や空蟬・夕顔・女三宮の所謂「姦通事件」とでも称すべきものが主とした素材である。

岡田『同。

302 大きな持参あざ丸の掣引手

八木『むこさんに大きなあざがある。婿入りのお土産に、持参金をたくさん持つてくる、といった句かと思ふ。

七久保『持参金つき掣とせず、オーソドックスに持参金つきの嫁と解すべきであらう。

大変なあはた面をあざ丸と名刀に擬したところをみそ。

岩田〓七久保説贅。「婿引出」は、婚姻の時に舅から婿へ与えられる引出物。

主題句は、

金を貰ふにつき娘がついて来る 一四四

と同工異曲の句で、大枚の持参金と結婚して、婿引出として「あはた面」〓「あざ丸」が来るという逆の見方の面白さも加わっているように思う。

「あざ丸」の名刀はどういう刀でしょうか。

西原〓同。あざ丸については、「景清が指料たるあざ丸の太刀は」(卯花園漫録)とあり、悪七兵衛景清の刀である。

青木〓七久保説贅。「あざ丸」は銘刀を言うとともに、持参金の「あはた」ではなく、「痣」そのものを言っているのでしょう。

佐藤〓同前。とにかく芝居を踏まえた句には違いない。

岡田〓景清の所持した名刀「あざ丸」は、持っている人が次から次へと不慮なことがあるため、熱田神宮へ納めたもの。くわしくは、「尾張名所図会」にあり。

303 京町ハ沢山すぎる初鰹

八木〓初鰹は非常に高価なもので、高い時には三両もしたという。

ところで、京の人はケチ、という考えがあった。それで、同じ吉原のナカでも江戸町にくらべて京町はケチ、とした方が川柳作家には面白くなる。そこで高い初鰹なんか、京町へ売りに行つたつてそんなに売れるはずがない。一杯売れ残つてしまふ。それを沢山すぎると詠んだ句であらう。

岩田〓そうであらうと思う。

京町へ来る鬼灯ハゑりのこり

京町へ江戸をくらつたきやくが来る

一九二

二七

西原〓礎稿の「売れ残つてしまふ。それを沢山すぎると詠んだ」とあるが、それはどうであらうか。岩田氏例句のように、ここでは選り残りの鰹で、「いいよ、京町なんて、この鰹でも上等すぎる」というところではないだろうか。

瀬川〓前説贅。京町に初鰹なんて、もったいない。十分すぎるの意でしょう。

青木〓同前。「沢山すぎる」は前説の如く、上等過ぎる、十分過ぎる、が適解と思われま

す。

鈴木〓「沢山すぎる」は「十分にありあまる」の意ではなからうか。「大辞典」にも見えぬ語である。

江戸町で売切つて行初松魚

三三二四

という句もあり、売れ残つた初鰹を京町に担つて行く集まる沢山すぎる。これは駄労働です。

岡田〓京はシワイ。だから吉原でも京町は、羽の生えて飛ぶ時は買わず、安く出回るようになってから始めて初鰹を食す。との想像的な諷刺。

川柳塔社常任理事会(6月1日)

▽「川柳塔」800号記念誌上川柳大会の実施要項と課題・選者について決定

▽記念川柳大会は平成6年1月16日(月)、なにわ会館金剛の間で開催することに決定
実施要項と課題・選者について審議し、早急に実行計画を作成することを決定

▽本社句会の司会・協役に女性起用を決定
▽後安江山さんを川柳塔碑に合祀することとし、今後、希望があれば基金(五千円)と同額の合祀料を拠出いただくこととする。

秀句鑑賞

同人吟 河内天笑

16月号から

話のわかる人でストレス溜めている

西出楓楽

概して苦勞人タイプ。他人の悩みをわが事のように考えてくれる人なのでつい相談をかけられやすい。それに責任感も強いときたら要らぬ心配を抱えこんでストレスを溜める事にと相成ります。男と女のこと、お金のこと等々、あまり深く立ち入ると体がもちませんぞ。「ええ人は早よ死ぬ」と言われるではありませんか。また、「無理をして使った敬語からボロが」も面白く、共に身近な事柄から味わいのある句を作られました。

酒かビールか風呂へ入って考える

新家完司

『平成元年』『平成五年』と『打席連続ホーマーの完司さん』乗っているの句も軽快です。一日の仕事を終えてお風呂に入ろうとする完司さんに美人の奥さんが「あなた今日はお酒にするウそれともビールウ」「今日のおかずはなんやのン」。そんなやりとりが浮かんで来そうです。ややアテられた感もあり

ますが、歯ざわりのシャキツとした一句です。人間に疲れてベット家出する

宮西弥生

うちの近所にお住まいの藤井二三さんとこにはゴンちゃんとボンちゃんの二頭の犬が飼われています。いくら忙い日も体調のすぐれない日も雨の日も一日に二回必ず散歩に連れて行つて貰える幸せなベットです。一方、うちの西隣の豪邸にはマーちゃんという可愛いビートル犬が居ますが、飼われて四年で一度も散歩に連れて行つて貰った事がありません。たまに鎖を外されて近所をうろろして哀れな姿を見かけます。マーちゃんの前にはホワイティーが居ましたが、家出したまま帰りませんでした。人間の都合だけで飼われている犬はともかわいそうです。身勝手な人間を斬つた風刺の句でリズムよくまとめられました。

危ないわヨ文部大臣の始球式

柳楽鶴丸

海部内閣の官房長官をされていた森山まゆ

みさんが大相撲の表彰式に出たいという申し入れをされたが、伝統ある国技という事情で土俵に女性が上ることは承諾されなかった。こちら舞台は甲子園。同じく森山さんが登場する今年春のセンバツの始球式風景。「危ないわヨ」とブレイト上で言つたか言わないかここは作者に敬意を表して「危ないわヨ」と言われたことにした方が面白いし、この句の味わいともなり、たのしい雰囲気になり、タマになりました。バッターの頭の上を越える高いタマになりましたが、キャッチャーミットに届いて目度し目度しでした。

素うどんと読めぬ若者ふえてくる

福井桂香

戦前・戦中派の人が聞いたら「えっなんでや」と思わず素朴な質問の出そうな句です。学生時代に十五円の素うどんの世話になった私には忘れられない味であります。句主は和歌山の目抜き通り「ぶらくり町」で福井食堂を切り回して居られる。若いお客さんが、「おばちゃんソウドンクグサイ」とか、「モトウドンクグサイ」とか注文されて、びっくりされるそうです。現場で体験されたナマナマしさがそのまま伝わってくる感慨深い句ではあります。和歌山へ来られたら福井食堂へ寄つてネ。

内科外科眼科に行つて午後三時

松 井 かなめ

まるで仕事のように病院から病院へ。ウソのようなホントの話だから見逃せない。あつちこつちにガタの来る年になると病院通いも仕事のうち。カレンダーにはいっぱい病院の名前が書き込まれていそひだ。これも生活体験としての生々しい句です。

一生を通行人として無冠

山 田 高 夫

悠久の川の流れに比べれば人の一生はほんの一コマに過ぎません。ニュートン、アインシュタイン、ゲーテ、シェクスピア、バッハ、モーツアルト、ヒットラー、フセイン等々、短い人生の中でもその名を残す人はたくさん居られます。でもわたくしは地球の単なる一通行人として生かされている時間を有難く思いながら生活しているのです。「無冠で結構」と達観されています。とてもいい時代にいい国に住んで幸せだと共感致しました。

健康法いくつも聞いてやつてない

榊 原 秀 子

お医者さんがびつくりするほど専門用語を知っている患者さんが増えているそうです。「健康ブーム」がもたらした一つの文化かも知れませんが、どのチャンネルでも一日に一つ

や二つ健康に関する番組が流れています。私もお腹のへつこむ方法を何回か教えて貰いましたが、どれも一回したら忘れまます。お酒をやめたら少しは体重も減るでしょうがムリなことです。この句も「やつてない」というところが面白く、これが川柳だと思いました。あるところまでは皆いい人ばかり

瀬 戸 まさよ

この欄のいちばんはじめに挙げた句の主人公のように、自分にストレスを溜めてまで悩みにつき合ってくれる人は、このごろ稀だと言つていいでしょう。あるところまでは相談に乗ってくれてアドバイスもしてくれましようが、それ以上となるとそれも手元不如意なるが故をもつて応じてくれないのが普通です。穿ちの見本のような句です。

さかすきを両手で受ける日は酔えず

片 上 明 水

からっぽになつた頭で考える

土 橋 はるお

猫だけが今姑の味方なり

中 西 兼治郎

銀行へアサヒグラフを読みに行く

榊 本 蔭 児

百万夜の夜景の底に喘ぐ街

大 原 葉 香

第11回 夜市川柳大会

とき 8月1日(日) 午前11時開会

正午出句締切

ところ 堺市総合福祉会館

兼題と選者

「手紙」 山本 希久子 選

「無駄」 小池 しげお 選

「腕」 安平次 弘道 選

「おんな」 西口 いわゑ 選

「ごめん」 小島 蘭幸 選

「ヒント」 神夏磯 典子 選

「一枚」 奥山 晴生 選

「吠える」 河内 天笑 選

「駅」 神平 狂虎 選

「赤」 新家 完司 選

席題なし・各題2句

呈 賞 秀句3句・佳作に呈賞

会 費 2000円(昼食・作品集共)

懇親宴 午後5時から河内天笑宅

会費5000円(20名まで)

主催 堺 川 柳 会

水煙抄

黒川紫香選

藤井寺市 高田 美代子

浜田市 中尾 まゆみ

鴨の矢を抜いたニュースを忘れかけ
桃太郎の孫に逢うかも桃を買う
花時計の前で二時間待っている
自己主張孔雀が羽根をたたまない
うっかりと仮面のままの顔洗う

兵庫県 森 協 和 子

和歌山市 辻 翠 子

団体の旅で大きく笑ろて来る
風船を飛ばした返事まだ来ない
そっけない身振りに見せる片思い
冗談の通じる仲間に甘えとく
合言葉ポッケに秘めて旅に出る

熊本県 大川 幸 子

静岡市 沢田 きん

バブル余波もう看板は雨ざらし
全自動まかせきっている不安
甘い水探しに蜚行ったまま
弾むばかりでいいのでしょかてんてまり
何も出来ぬ貴方一人にしておけぬ

裏返す言葉のなかに愛を視る
少しずつ言葉の芯を組み立てる
本心を伏せて微熱は解けぬまま
弾んでる毬の行方よ風は夏
赦された道で気付いたぬくみ抱く
フレッシュな風逢いたい人が多過ぎる
見つめられて果実は早く熟れてくる
母の日のカーネーションがよく喋る
休日はモカの香りとすき焼きと
三面鏡にやさしい妻を演じてる
花粉症ですとマスクが言っている
頑張りはまだ利く喜寿のダンス狂
せっかちね片減りの靴笑ってる
コトコトと雨戸を叩く憎い風
ひとり居へ噂を包む夏帽子

西宮市 亀岡哲子

宝塚市 永田曉風

スクランブルエッグに朝の風まぜる

土砂降りに流れ出て来た井の蛙

外人さんの連れた小犬と話す

ブランコのとひと漕ぎの藤の花

ダイエットしない裸婦像大らかに

富田林市 池森子

さよならの現場に舞い戻ったのは男

遊び上手な風に五月は散り急ぐ

一人ではくるくる回れない木馬

タンポポに学ぶやさしい妥協案

胸底に泳ぐ絵日傘のなみだ

広島市 流奈美子

すぎし日の頁をたぐる風まろし

ふところに母の鏡を持ち歩く

漫画文字明日へスキップするのだな

温かい心が届く受信箱

心機一転ゆっくり熱いお茶を飲む

名古屋市 藤井高子

夏の陽に負けぬカンナの朱は炎

一に一たして二でないのも答

嘘少したして話の角削る

一気呵成 夕立ほどにまくし立て

ペンに託してハートの出前しています

深追いをしてふところに疵を負う

生き過ぎたらしい男の無口かな

この人も淋しい老いか赤を着て

わたくしが死んで誰も知らないのもスリル

喪服着て血の繋がりのめめ易し

尼崎市 児玉歌子

たまに会う外嫁だから褒められる

父ちゃんのトランペットが澄む浜辺

陰口は営業用の顔で聞く

冷戦を救うてくれている音痴

裏町のギターに心癒やされる

熊本市 宇野照代

新しいママが来たよと言いつらし

コマーシャルみんな買いたいものばかり

不機嫌の訳には触れず茶を入れる

セールのお世辞に負けてなるものか

老人と猫連休の留守守る

砂川市 大橋政良

散歩道 夏の匂に触れてくる

鬼で生き仏になって目を閉じる

旧道に忘れられてた道祖神

靴下の穴泥臭い足のうら

玄関のブザーを押して来る噂

富山市 島 ひかる

赤い靴はいた女の子を撫でる

久留米市 鶴久 百万両

黒ゆりのみやげどなたにあげようか

手話イロハやつと覚えてすぐ忘れ
光から生れたような魔女愛す

婿どのに幸せもらう娘と私

椰子の樹の映える浜辺でプロポーズ
呉越同舟してライバルと握手する

山道でことばを貰う温ぬくし

熊本県 岩切 康子

夕やけの彼方に君とぼくの席

広島市 森田 文

春や春 出合いと別れ花の中

豆の蔓気ままに伸びて腕を組み
夫の留守朝寝夜ふかし日々気まま

やさしさに溺れてしまう里の膳

気になった一言を解く赤電話
引き受けた無理が今夜を眠らせぬ

可能性を未来へ託すスイトピー

尼崎市 的場 十四郎

曲りくねった坂道でした道祖神

微笑みも絶望感もあなたから

富山県 高島 五月

そよ風に散ってなるかと夕桜

反省の森で勝者は策を練る
反省はしない左遷の別天地
自信ある影はうしろ振り向かぬ
走らねばライバル先に旗あげる

逝った子と呼ばえ風いでる海が泣く

尼崎市 野瀬 昌子

菜種梅雨 追悼会の便りくる

薫風に浜辺の歌が乗って来る
誘われてふと人妻を忘れかけ

少しずつ童にかえる母達者

葉桜の陰を拾うて行く母子
友達の輪が広くなる縄電車

尼崎市 長浜 澄子

恋終りまた鮮やかになる花芯

尼崎市 山本 すみ

もう棘もない老母さんの鯨尺

野鳥鳴くベンチで憩う万歩計

ポリグラフ男の影を浮き彫りに

悔いのない人生あなたとなら走る

傾いた心がのめり込んでゆく
野良猫が用心深く距離を読み
情熱を離島へ賭ける若い医師
小言より父の一喝効いてくる

旭川市 朝倉大柏

四季みんな酒の肴にして楽し
尻尾振る癖で男の貌がない
四コマのジョークが時の人を切る
よく喋る奴にその役押しつける

松山市 宮尾みのり

てん手まり弾んでいます女です
姑という人と糸結び合う

パッパッパ火花が散ってから無口
きれいな事言い過ぎました負けました

堺市 宮本かりん

明日と書く墨がだんだん滲みます

本題から逸れた話で花が咲き

粗品ですと笑顔の方がすばらしい

勝者にも負けぬドラマを抱いている

兵庫県 酒井靖子

生きていて良かった赤いバラ貰う

それぞれにドラマを秘めた老いの春

前列の椅子であくびをかみ殺す

ストレスが溜ったらしい言葉尻

尾宮弘治

玄関を真赤に飾るシクラメン

聖堂の隅で声なき手話の歌

指切りを忘れて孫に叱られる

タクシーの親切くにの母が着く

摂津市 木下道子

磨き過ぎですと歯科医に叱られる
カーネーション今日はあなたが主役です
感嘆詞だけでヤングは通じ合う
本嫌いのために書かれた読書論

今治市 渡辺南奉

馬鹿になるすべを知ってるので困る
太陽が見たら汚いネオン街

実力の足りない分を埋める金
結論をいそぐと視野がせまくなる

大阪市 勢理客 トミ子

気まぐれな旅花に会い雨に会い

妻と子を愛して酒に愛されて

組をとんとん胡瓜お喋りで

カーネーション何時帰っても母は居る

米子市 鹿島松子

スリッパが一足追加されて春

遠いとおい仏に忍び声で告げ

陽のはいる窓から春の風を吸う

目をとじて育った川とよく遊ぶ

静岡市 浅子まつゑ

雑音が入り話が進まない

石投げてボンと音する春の川

待つことも治療の内とがまんする

自己主張 勝手きままな事を言う

和歌山市 岩 本 美智子

家中を花で埋める春の幸
まぐれでもホームランには違いない
少年期夢がほしくて木に登る
鈍感で話の裏が届かない

和歌山県 杉 山 精 子

鉄鍋で茶粥が煮える里の朝
火も水も潜る天狗の逞しさ
秘話を聞くとときめきがある花の下
三歳も通帳をもつお国柄

松山市 白 石 春 嶺

吸物の蓋が取れない不調法
しぶしぶと妻のお供をする売場
讚美歌がすべてを洗う札拝日
門限を破り帰らぬ娘に焦り

西宮市 岡 本 道 子

錠剤はシグナルの色赤を飲む
あの種を埋めたあたりの陽の暗さ
葉桜のしだいに深いもののおもい
トランプのひとり遊びも飽きて雨

大阪市 亀 井 円 女

世界は一つ何と悲しい絵空事
青空は私の心を空にする
人の痛さも解り過ぎると疲れます
娘も五十 一寸五月蠅くなりました

西宮市 山 本 義 子

農家借りふるさと作る山の会
借りた農家 五右衛門ふろとへっついさん
水道は山水引いてただという
野草つみ一品ふやす炊事班

尼崎市 田 辺 鹿 太

頬張れる日が待遠し柿若葉
歌のない雲雀は空へ戻れない
グラスに指紋唯それだけの仲でした
濁点を消した巷に雨しきり

羽曳野市 福 田 悦 子

気まぐれな空へ夕立待つ暑さ
アッパツバ母は今年の柄で着る
七夕へ願いはトラよ勝ってくれ
一発の花火が夏の彩にする

福岡市 井 崎 ミサ子

やめとけよ彼女が怒ると恐いんだ
頼んだがやはり自分でやっている
ラジオ体操はじめましたと便り書き
お天氣が私をじっとさせて居ぬ

鳥取県 奥 谷 彩 子

四十年慣れたあうんの夫と居る
欲張った握りこぶしが壺の中
ポケットに嘘詰めたまま日に晒す
美容室少うし女取り戻す

寝屋川市 宮崎 菜月

この近さが親しい琵琶湖彦根城
往きに惜しみ帰りに惜しむ藤の色
古き名もよろしき地名になごむ古都
励ましてあげよう男は弱いから

東京都 山口 新子

歳月や白髪が目立つ男となり
あの人は電話を取らぬから困る
足の爪切る絶好の風呂あがり
泣くもんか昼のふとんの真ん中で

熊本市 遠山 夏生

こんな時ぐらい止ってよい時計
纏りはなが話題の種を播く
病院の廊下 心配顔が往き来する
ネクタイに焦れたいほど春の風

和歌山市 森 茜

お金持 相続税の話好き
笑うしかないわがママを聞いておく
化物のようにストレス発散し
使い捨てられない前に暇をとり

岐阜市 渡辺 杏村

浅草のほおずき市の子のゆかた
お盆には帰るつもりと子の電話
ふるさとをはなれて歌う郡上節
満天の星を眺めて中ジョッキ

岡山県 国米 きくゑ

木漏れ陽に若葉で掬う岩清水
喝采はないが一途な歩の人生
今日は雨 無理せず雨の譜に合わせ
宅急便 母の素顔がつめてある

吹田市 西岡 豊

春一点あんたの笑顔いつち好き
夏一点ミニの素足が目に残まる
秋一点今宵の女浮かれてる
冬一点おさむこさむ首がない

今治市 越智 青園

鯉のぼり上手に風をつかまえる
着せ替えただけでマネキン ゼロがふえ
もう捻子を巻かない父でばけはじめ
即席の味しか知らぬ共稼ぎ

和歌山市 堀畑 靖子

せまいけど人を呼ぶのが好きな家
今日もまた元気な音を立てる妻
察しよい方で余計なこともする
土手に立ち風の匂をかいでいる

兵庫県 奥野 テル

母の樹の下に落ちてた子守唄
髪染めただけで噂を撒くすずめ
しあわせの鍵早起きの母が持つ
話の芯ころり忘れた喋りすぎ

鳴門市 八木芳水

お連れさんひとり欲しいよ春の道
梅の木を植えたいけれど場所がない
がつくんと来たら梅酒飲んで寝る
恥ずかしい夢も最近遠ざかる

尼崎市 吉永伊三郎

春の枝で尺取虫背のびする
拒否権の裏で火種は作られる
土器片を繋いで古代垣間見る
距離置いて歩く二人に傘一つ

長岡京市 山田葉子

隠し絵のひとつをやつとみつけたよ
五十坂捨てゝる荷物が決らない
武豊 馬と話が出来るそう
何かあるこの静かさとこの視線

京都市 小林英子

さすが錦おトトの味がするお店
真珠彩に染まる六月の花嫁
お隣をのぞきせんざい振舞われ
いつからか養子の型にはめ込まれ

尼崎市 湊修水

父の日の父はジョークが多すぎる
何もかも聞いていました花時計
手伝うてテテ噛む魚もろてくる
犠牲者が出ても冷たいアンタツク

酒田市 永澤裕子

鼻肩目に見ても美人の出ぬルート
つんつんと明日開くらし花菖蒲
古い二人今年も逢えた柿若葉
薪能ギヤルはカメラばかり向け

貝塚市 池田寿美子

チャージミグな睨まれ役がいてほしい
新茶待つ生けるしるしの花あかり
群をなす鳥の仲間に運不運
キヤスターの産地訪ねて船は出す

静岡市 大村正雄

ドライブの秘密星だけ知っている
口笛が緑の風に乗って行く
塗り変えの出来ない過去を聞きたがり
一喝で友は現世と縁が切れ

高槻市 芦田静江

五十回忌父の袴は子煩惱
娘迎えに地下道長い駅に佇つ
娘迎えに地下道長い駅の父
金の鶴翔んで造幣局静か(打入式)

鳥取市 植田一京

考えることは止めよう花の宴
五時からの予定うきうき顔に出る
伝説もうすれのどかな城下町
知らぬまに虎のしっぽを踏んでいた

静岡市 三浦つね

横に振る首もたまには持っている

犬を呼ぶ声で始まる母の朝

柏餅あんこはみ出る子供の日

高槻市 守先伸子

堂々とたばこを喫っているのは女

陰口を言わない人だ信じよう

つまりあわてて唱える般若経

熊本市 北川一進

一気呑み泡も元気なビヤホール

また皿がちぐはぐになる子沢山

嫌いとも好きとも言わず良く食べる

和歌山市 玉置当代

連休もすんで平静とりもどす

生い立ちがそのまんま出るお人好し

若葉萌ゆ孫と戯る昼下がり

尼崎市 岩倉キク子

心まで写る鏡の恐さ拭く

本物でおますと小さな声で言い

弱ったねえ正直に言う万歩計

松山市 丹下美津子

春がすみゆったり満ちる瀬戸の海

絵に描いた餅で終った預金帳

麦笛を吹くと少女にもどる道

静岡市 永倉柳華

言い勝ってみたが傷跡まだ癒えぬ

大根を盗られた数だけ穴残る

いい嫁と暮らしてボケが早くなる

河内長野市 柏木靖子

良い事があってペン先よく弾む

ほろ酔いの顔が揃った終電車

ライバルと思えぬ温い手に出逢う

和歌山県 岡本睦美

なにもかもピンクにしたい日の自信

公園が白く静かに新学期

聴き役で愚痴二人分胃に溜める

西宮市 牧淵富喜子

偽れば亡母は必ず背を向ける

偽って傘を深めにさしている

何時までもテレビついてる老母の部屋

十和田市 阿部喜久江

美しい夕日も知らず塾通い

雑談の中から拾う記事のネタ

陽やけた顔の漁師がたくましい

熊本県 高野宵草

ワープロをご破算にして停電し

旅の宿同じ訛りに声かける

人形でないよまばたきした舞妓

大阪市 中井正秀

河内長野市 大西文次

身内よりつくしてくれる他人の子
酔っぱらい避けるとよけい寄ってくる
み仏もチンした御飯召し上る

唐津市 丸はる子

クラス会 花も嵐も越えた顔
鉛筆を削って勉強ハイ終わり
根っからのお人好しです疲れます

松江市 浦辺静江

傘杖に道を問うてる老い二人
鬼瓦 夕陽と別れ惜しんでる
耳よりな話を抱いて急ぎ足

今治市 白石サダ子

喜ばすはずのジョークが胸をさす
この涙無駄にはせぬと拭くこぶし
父の無口子がカバーして家なごむ

今治市 村上久美子

すり減った靴は私の共犯者
泣き下手な女で何時も損ばかり
頼りなさ紙風船に似た情け

鹿児島県 大山舞鳥影

反論をひと寝入りして思いつき
遠い子より隣の他人救急車
幼い日満州の夢夕陽だけ

応募資格美女と言うので申込む
置き手紙長らく世話になりました
保母さんが逆さに読んでいる絵本

藤井寺市 楠昭子

消しゴムは試行錯誤へ添ってゆく
反抗がなければないとまた不安
にっこりと笑い三面鏡を閉じ

河内長野市 水谷正子

正月に何か誓った気もするが
朝シャンの匂まだある娘の鏡
孫と逢う少し派手めの服を着る

広島市 元林光子

春眠に亡夫のぬくもり味わいぬ
広告で旅した気分楽しんで
平凡に笑って泣いて日が暮れる

羽曳野市 芦田絢子

本気だと言うから眉に唾つける
根掘り葉掘り聞いて落胆させられる
私を賞めるわたしを叱るひとりごと

枚方市 森本節子

水芭蕉 弥生の冷えに衿たてて (六甲にて)
亡き父の行者姿が彷彿し (吉野洞川にて 二句)
名水をくぐった豆腐の味はよし

寢屋川市 井 上 すみれ

空の蒼 今日の負い目を吸ってくれ

出て行けと言われた子供今跡目(雄鷹)

愛される党なんて勝手なことを言う

鳥取県 土 橋 睦 子

骨抜きにされて中古がよく売れる

時効になった私の秘密です

スイミング浮く練習をしています

岡山県 大 石 あすなろ

ロマンスが今宵うまれるかも知れず

相棒はいないが陽気にやっている

孫と来てふり回される御堂筋

寢屋川市 北 岡 波留吉

改めて礼にきますとそれっきり

男を残しそつと旅立つ雨の午後

よい趣味を持って育った人間味

高槻市 執 行 稲 子

風呂 飯 寝る アーオーウーで事足りる

スイッチの好きなやんちゃに期待する

古い鍋磨いて私の城になる

東大阪市 指 宿 千枝子

エプロンをゆるめる母の午睡かな

味方だけの暗号ぼくは聞いてない

買ってみたものの一つに福袋

不況風日本列島乱気流

燕来て山ほど話すことがある

間違いの電話くやしいバスタオル

新潟県 高 野 不 二

折込のない日が一寸淋しくて

日記にもイニシャルで書く今日の恋

趣味の会仕事の名刺そつと出す

香川県 山 地 マツエ

初出勤靴光らせて光らせて

絆また切れそう茶わん買い替える

悪妻を自認してから若返る

香川県 田 中 ふ み

ゆっくりと柳誌と寛ぐ椅子がある

世界は一つ大きく泳げと鯉のぼり

ベンチより芝生で寝転ぶ心地よさ

西宮市 古 谷 ひろ子

亭主関白もて余してる五連休

食卓を和ます姑のほめ上手

信濃路の春 藤村に見る家の翳

十和田市 小笠原 敏 夫

庭に咲くチューリップ植えたのは母

洗顔も朝食もないまま出陣で

独断も程々だから慕われる

島根県 福岡博利

老母病んで でんでん太鼓も気の弱り

乾布マサツ続ける古希の意地ですよ

カラオケへうっぶんみんな捨てて来た

寝屋川市 籠島恵子

まだ揺れています今夜の旅づかれ

しあわせに酔っているよう花を分け

ゴミ出しの時間までには化粧する

相生市 中塚礎石

喋るだけ喋れば涙かてくる

つぎはぎの野良着を嫁は着てくれず

火炎びん抱いた女に火をつける

大阪市 尾崎黄紅

満洲の赤い夕陽に祈った日

澄んだ空見ると腹が空いてくる

百葉の長が朝まで効いている

熊本県 増田一乗

合吟の声さわやかによく揃い

ライラック庭木の中に楚楚と咲く

産卵か亀がせっせと遡り

箕面市 木村天弘

澄んでいる瞳の子には嘘つけぬ

美しい血が絵本の中にまだ流れ

エッセー書く鉛筆の芯燃えている

出雲市 林悦子

いい事があつたでしようねその顔は

ひな祭りいくつになっても夢の中

スイッチオンこの世はむなしくなるばかり

静岡市 片平静代

鼻歌でさざんかの宿唄う道

雨の音静かに聞いて昼寝する

ペランダで叩けば埃出る布団

島根県 菅田かつ子

亡母さんが居てくれたらなーと花を替え(母の日に)

野良犬がとことこ歩く尾をたれて

母の日の一日さつと昏れました

尼崎市 向井末貞一

笑み誘う孫の仕種に角はない

根気よく繕つてた母目に浮ぶ

喜寿ですよ孫から貰う記念品

綾部市 藤田芳郎

印肉のくぼみに溜まる明と暗

父さんが貨車引く音のいい響き

鉛筆の芯だけ減って黄昏る

岡山市 土居ひでの

落書が思わぬ所で陽の目見る

異端児の時にラッパに火をつける

大阪育ちやさしさ一等楽天家

大阪市 中 橋 恵美子

ちらかした言い訳をして客待たす

買わないが咲かせただけ聞いてきた
逃げる子をひつつかまえて鼻をかむ

唐津市 岩 崎 實

破裂音うまい蛙の春の闇

寄り添うて竹の子出てる熊野宮

鳴るものはみんなならして孫あやし

広島県 森 川 拔 智

さくら見て鮎すし食べて吉野山

盗った金多すぎたので届け出た

ややこしい気候でビールからまた酒に

羽曳野市 酒 井 一 壺

道草は夢を育てる待ち時間

金剛葛城わが一望にする

台所本の通りの味は出ず

島根県 武 島 ちよえ

葉わさびの辛さ嬉しく腹をたて

木の芽だち虫歯もじくじくしてきたぞ

盗まれる物もないけど鍵をかけ

兵庫県 西 井 つや子

狭い視野の中で血圧気にしてる

人間の丸みが出来て回復期

ひまですかと暇な女が来て喋る

兵庫県 安 達 厚

繰り返し確かめてみる歳になり

いいことをもくろんだ日は雨になる

余生だと思いがやっぱり生きてたい

高知市 桑 名 知華子

何も無い島で情けに触れました

祖母が待ち母が見送る春休み

ざわざわと風が挨拶してくれる

和歌山市 山 口 三千子

忠義立てしてもわたしは視野にない

思慮浅い自分を悔いる事ばかり

縄電車子供二人は途中下車

出雲市 荒 木 恵美子

亡き父の頑固な姿庭の松

お雛様世間のことは知らぬふり

一日を楽しく過し老いて行く

兵庫県 北 川 とみ子

立ち話影が変わって昼とする

無視されて世間の風が白くなる

出稼ぎの背へ花冷えの酒が待つ

岡山県 江 口 有一朗

天井と陽気な対話して眠る

気に入らぬ顔が天井向いている

必要な時の怒りを忘れてる

東京都 小寺 九

和歌山県 上岡 正直
植輪から原始の文化きこえます(倭国展 二句)

藤棚を見上げる母の背の低さ
久かたの母とデートはとげ抜き地蔵

洪滞の長さを競う高速道

鳥取市 谷口 百合子

気まぐれな少年に泣く母がいる

青森市 山上 嘉邦

水たまり越えて少年大きくなる

更年期来たなと思う妻のヒス
寄付金と聞けば水虫かゆくなり

嘘のない心と澄んだ目に引かれる

子にクスリ飲ませる母も口をあけ

大阪市 川原 章久

岡山県 富坂 志重

赤い爪白い素足の紅鼻緒

春風にお尻押されてのる車

若い日に吐く煩悩の捨て台詞

丸い背に取り付いて来る曾孫達

白々しい見舞やったらやめという

孫と摘む草も一役春の膳

唐津市 山門 幸夫

大阪府 三浦 千津子

五十年シューシャンボーイも老けました(新橋駅)

風呂敷を固く結んで独り者

喜寿までも通ったホテル新築に(新橋第一ホテル 二句)

いい相棒がいて迷わずに出る答え

キー部屋に自動ロックに老妻狼狽て

遠い日の憧れ燃えていた命

和歌山市 木村 親路

島根県 小林 延子

白足袋をはくと背筋がピンとなる

ご趣味はときかれて少し背伸びする

転がすと小石となった蝸牛

宝石のチラシを夫が見つめてる

ガイドさんマイクの声は風邪の声

見られてる自尊心が鏡拭く

和歌山県 藤井 春子

兵庫県 倉垣 恵美

衣替えうつり香に酔うすれ違い

輪の中でもどもどもぞといています

美しく老いて心に化粧する

セルフサービスそれでも主婦はほっとする

小さな義理前売券を買わされる

日本画と出合う静かなミルクティー

鳥取県 権代康女

洗車して明日はデートか唄が出る

嫁さんは賞味期限をよく見てる

お人好しなんでも人にうち明ける

和歌山市 森口恵子

感情が顔に出すぎて惜しがられ

かくせない秘話があちこちとび火する

出しぬけに言われて言葉なくして

河内長野市 印藤智子

広告をメモ用に切る戦中派

靴音で今日のご機嫌まで判り

社訓等うちの会社には有ったかな

広島県 中村要

良心が空回りする排気音

釘隠し打って汗かく妻の役

着るよりは眺めて楽しニューモード

福岡県 本田忠男

つくりごと下手な男でついてゆく

混浴の男は隅で後ろ向き

妥協しておきたい夫婦孫がくる

八尾市 秦正子

叱られる孫を庇って疎まれる

程ほどのお酒もうれし快復期

放水が光ってきれいな虹が立つ

倉吉市 加崎正雄

ピアノ弾く孫のえくぼと指踊る

船に酔い何もわからず着いちゃった

クレパスの緑の色が好きでした

香川県 田中スミエ

わが物を洗える伴せ抱いている

増産の声に切られた樹がこいし(鎮守の樹)

偽札でないと突然子がくれる

唐津市 入江喜久亭

妻の手を借りず杖つく古希の坂

デュエットで唄う別れの恋の歌

趣味一つ持たぬ母者の割烹着

和歌山市 田中みね

嫁がせて元のふたりもまた楽し

恋文とゆかぬが嬉し便り来る

ぶらぶらしてる割に隣家のいい暮らし

藤井寺市 川端たかし

鬼の面外せば彼の恐妻家

こだわりが難癖つけている釣り書

先に行くなよ薄情な影法師

佐賀市 古川かずのり

健康が粗食を美味しい膳にする

経緯を聞けば双方得手勝手

記念日に結び目しかとたしかめる

大阪市 乾 哲 静

人生に一息入れた雨宿り

嬬天下真の味方は孫独り

五十年互いに辛抱した夫婦

今治市 渡 邊 伊津志

納得が出来た値段の店で買う

嘘だつて大きい方がたのもし

澄んだ海眺めて余裕取り戻す

岸和田市 藪 野 けい子

勉強をしかけたとこへ友がくる

ふれあい欲しくて猫と棲んでいる

愛着があつて土鈴のみやげ買う

岡山県 牧 野 秀 香

鯉のぼり夢いっぱい天高く

昏睡の六十余日友語らず(後安江山さんの死 二句)

巡り来る春はあれども不帰の友

池田市 水 木 博 男

姑が嫁の味方で平和なり

いやいやと泣いて嫁いで子沢山

幸運は努力のあとからついてくる

和歌山県 村 中 悦 男

冗談がこわいと思う石頭

体調を肌着が知ると妻が言う

片言を覚えた孫にリクエスト

藤井寺市 田 中 孝 子

今年また逝きし友あり柳誌閉ず

老い二人過ぎこし思ふ外は雪

露を踏む足さわやかに万歩計

唐津市 江 川 青 琴

見るだけに入った店で買わされる

愛犬は私を信じているらしい

へそくりを隠した場所が悪かった

静岡市 増 田 扶 美

回り道もあるよと友に励まされ

回り道して悲しみを捨てている

薫風に旅のブランが夢を追う

鳥取県 山 本 正 光

妻と言うつかい棒が効いている

旧家と言う旦那でいつも威張ってる

笑顔して互いに腹を探ってる

大阪市 今 西 静 子

夕立にパチンコ屋あるタイミング

回廊のつや禪僧の眉太し

嵯峨どうふまわり道する二人

(前月分) 香川県 堤 くに子

受験生緊張とけて春を待つ

菜の花も背伸びしている春日和

古里の香り嬉しい駅弁当

弘前市 岡 本 花 匠

日に一つ喜び拾い生き甲斐に

恋終るためらいもなき落椿

愛と憎振り切るように髪を梳く

海南市 谷 口 義 男

情けかけて見ても何時かは捨てられる

ゴミ袋見れば世代が透けて見え

先頭に立って音頭を取って居る

静岡市 中 西 雅

回り道したと思わぬ今日の路

印かんの水晶が欠け夫も逝く

路線バス大回りする祭りの日

兵庫県 中 野 とよ子

フラッシュの雨に降られて顔ゆがむ

ローパイ笑って楽しいクラス会

サービスのよい店足が二度三度

糧原市 西 本 保 夫

連絡をしない言訳する電話

別々に夫婦薬を食後のむ

夫婦してここまでやって来た頑固

天理市 飯 田 昇

太い皺の陰に隠れている頑固

傷口を持っているからよく響く

コップ酒二杯で話ジャンプする

出雲市 園 山 かおる

ほどほどと言う一線が引きにくい

言う奴が言わなくなった呆け出した

鳥取県 小 西 五十鈴

赤信号 素直に並ぶランドセル

露天風呂 星見る夫もただ無口

鳥取県 山 内 芳 江

牛飼いの疲れ牛乳風呂で取り

普段着の顔が意外に良くもてる

和歌山市 榎 原 公 子

空があり海あり山がある熊野

図書館で先ずは汚れた本を取る

福 島 紀 一

見せたいように誰にも見せぬ日記書く

子供の日子供そこらに見当らず

吹田市 吉 川 涉

窮すれば無神論者も手を合わす

味方より刃向う敵に教えられ

姫路市 福 島 姫 女

一服の抹茶で和む旅の花(石山寺)

好きでまた夫の喜ぶ豆の飯

吹田市 岩 鼻 啓 三

ガラス窓へだて青葉の動と静

梅雨寒のおしめ暫く手でぬくめ

八尾市 向井しづ子

驚草の芽のかわいさにほっとする

老夫婦じやあ離婚と言う笑い

静岡市 小木久子

人だかり覗いてみたい好奇心

星に祈るロマンチックな女です

東大阪市 安永 暁子

偶然に二人歩いただけのこと

刹那的風にまかせた花見時

松江市 松浦 登志子

老父母に振りまわされる電話口

いい顔を夫以外の人にみせ

香川県 堤 くに子

倅せは八分位が丁度いい

思ひ出があるからボロも捨てられぬ

鳥取県 美浦 美代子

うまい話耳をかすには勇氣いる

送金に充分ごとと乗せてくれ

島根県 三代 朝子

誕生日孫が花束抱いてくる

連休がすめばそうじ機せんたく機

鳥取県 丸山 希久代

これからの出会いへ夢をかけて生き

村守る年寄りながら消防婦

療養の友への土産ニュースです

山が好き画布にのせたく遠出する

川西市 田中 喜俊

小指だけが知っている噂話

人生はひたすら走るマラソンだ

鳥取県 今本 早苗

せっせっせ過労死はない蟻社会

路地裏が好きで貧乏神お供

宇部市 中村 三良

内の庭で泳ぐ隣の鯉幟

押し出したはずのカラオケうま過ぎる

神戸市 岩田 信義

庭園の鯉が貴族の貌で浮く

お花見の電話家族を散りぢりに

寝屋川市 太田 とし子

仏壇へロンドンからの娘の手紙

このベンチ俺のデートを覚えてる

岡山県 土井 英明

立ち食いのおそばがうまい山陰路

叱ってる母さんの方泣いている

岡山県 伏見 すみれ

人の事言えば空しさ残るだけ

サングラス掛けて世間を軽く見る

姫路市 丸尾 はる子

バーゲンの服がわたしの供をする

ひよっとことおかめ陽気な佗び住まい

鳥取県 橋谷 静江

ファイトある夫に付いて行けるまで

母の日へ娘がくれる便り待つ

鳥根県 森山 修光

禁煙のホームで煙草売っている

この遺跡守りきれない過疎の里

和歌山市 山田 博章

エアロビクス人妻だとは気づかせず

花散って桜は我を振り返る

米子市 小塩 智加恵

電話よりペンがすらすら美辞麗句

精密の結果聞くまで半病人

八尾市 平川 幸枝

弱い者の味方になれぬ小判鯨

踏み出した一步に雨の戸のきしみ

鳥取県 清水 加代子

雑踏が好きで想い出の街歩く

自分の顔にも責任を持ちたい

八戸市 島田 昭治

悪いことせぬにお金が寄りつかず

人間味それに値段はありません

松江市 安食 友子

陰で出す舌ほど恐いものはない

しんどいと言うてる割に長話

大阪市 大河 未佐子

箱庭のような花壇に蝶の客

待つ便りまた一日の長いこと

鳥根県 安部 美恵女

さくらからつつじへ句帳と散歩する

さわやかな五月つかれる農作業

羽曳野市 徳山 みつこ

山道のはっと可憐な山つつじ

きゅうり苗はや収穫の夢を追う

鳥取県 中西 智恵子

花売の花の名舌を噛みそうな

ふつくと干した布団の陽の匂い

羽曳野市 山本 たけし

葉桜に軍歌流して初鰹

捻子ひとつ買いにわざわざ日本橋

豊中市 田中 道胤

強そうに息子が描いたパパの顔

方角が悪いと母が譲らない

静岡市 宇佐美 寿美

水晶のような顔してガラスいる

躓いた石に再起の回り道

唐津市 木内 ミチ子

七夕や孫と願いの筆のあと

汐風にテトラボットが手をつなぐ

寝屋川市 後藤 黎之助

朝顔の生命待ってる初夏の風

世界地図広げニュースをみる時世

寝屋川市 前 たもつ

肩書きを降ろして自分をとり戻す

無い頭しばっているお腹がすく

豊中市 みき わきみ

万雷の拍手毒舌心地よし

相槌を打って自慢を聞いてやる

島根県 児玉 幸子

花 花に囲まれ急ぐ朝の道(新聞配達)

母の日へ宅急便でカーネーション

姫路市 服部 一典

縄のれん酔った客から名刺くる

ペランダへ灰皿さげて避暑に行く

泉南市 坂根 流水

無駄話出来る相手が欲しくなり

飲めぬ奴飲めぬ仲間と輪をつくり

枚方市 濱田 良知

俺が先死ぬと決めてる夫婦愛

八方塞がりとのつまりは神頼み

寝屋川市 瀧本 八十八

目立つほどの器量でないが愛嬌よし

愛犬にしみじみ話す自閉の子

池田市 木村 一笛

蚤取りは猿でもやってる思いやり

干し物を取り入れてから晴れ間出る

島根県 松本 聖子

老いたのかだんだん角がとれてきた

五月かな小鳥も空も呼んでいる

鳥取市 中澤 正恵

言い過ぎた言葉の溝の橋探す

たまには童話読んでは力抜いており

河内長野市 妹背 尽呂久

六十五 趣味が増えたぞ医者通い

火遊びは花火程度でケリつける

島根県 今川 三津江

葉桜だうんとオゾンを吸うておこ

寝てる夫イビキがリズムにのってきた

泉佐野市 内田 倫子

心までつなげる紐を探してる

花吹雪よどんだ水面を埋めつくす

寝屋川市 坂上 高栄

改めて寝顔確かむ乳児室

痛いこと言う友達がやっと出来

唐津市 浜本 治幸

藤井寺市 菊地 繁男

古里の何と静かな旅帰り
神祭り賽銭箱も不況風

唐津市 山口 ふさ子

開演のベルでバタバタ トイレ空き
祭好き朝から会所へ行つたまま

岡山市 山磨 行子

犬猫は寝たきりにならず逝き
表札も少し古びてきた我が家

吹田市 馬 渕 光子

ひとときの幸せ花と酒によろ
順風に男口マンの帆をあげる

静岡市 青柳 金吾

生前葬義理人情に揺さぶられ
小言にも雲行きを見る次男坊

米子市 木村 春枝

ガス栓を止めたかどうか胸さわぎ
留守番がまた叱られる俄雨

大阪市 小糸 昭子

バスタオルとつさに巻いた電話口
此の町も夕暮れ行けば国際化

富田林市 山原 昭水

福逃がすようで洗米かき集め
一番の札所ともかく先ず朱印

茨木市 島元 ふみ

牧水と趣味が同じで旅と酒
少年にもどってメダカ飼っている

大阪市 平井 露芳

電話先あちらも御主人お留守番
しょうもない男ほど見栄はっている

島根県 岩田 三和

休日のゴロ寝畳に身を委ね
共白髪どちらも染めて若がえり

大阪市 清水 絹子

初夏の風に和傘はずんで空を舞う
花嫁を街へさがしに行つたきり

東大阪市 松山 隆

ご近所へあとさきに出るフルムーン
耳にペンはさみ繁盛してゐるらし

寝屋川市 豊福 路子

タラの芽が好きで五月の陽がまぶし
花好きに巡礼供養の射干カガの道（亡妻四年忌）

高槻市 小林 紀美子

わたくしの椅子をつくっている途中（夫逝きて二句）
おとうさん一日何度呼びかける

納豆も食べているよと便り来る
雑草の花にも名あり意地という

和歌山市 池 永 正 雄

気がねない温泉うちの一人風呂

平和です武者人形も大あくび

兵庫県 玉 田 三 重

欲すこし減らして元気出して見る

農を継ぐ嫁は明るい窓になる

鳥取市 谷 口 侑 里

休日は家族奉仕と決めている

平和に慣れ戦火のむごさ忘れてる

大阪市 出 山 美 津 枝

用件をなかなか言わぬ怖い客

母の日に少しヒントを出してみる

河内長野市 橋 本 弘 美

忙しい忙しいと遊んでる

指切りも一晩寝たら気が変る

鳥取県 橋 本 孝 由

柱時計外すと亡父の釘に会う

新妻が飼ってる犬に横れんば

八尾市 生 嶋 ま す み

つらいけど家持つまでと共稼ぎ

お見合いの明日へ緊張しています

唐津市 野 田 旭 恒

偕老同穴 金婚過ぎた共白髪

信じつつあなただけはと待っていた

出雲市 西 尾 和 子
入学の子ランドセルに夢を詰め
入学式これから先が不安です

米子市 服 部 朗 子
二重橋背にして撮った若い日も
留学と娘の夢が果てしない

松江市 佐 野 木 み え
いい事がなかなかなくて草を抜く
旅先で恋をつかんだ娘の場合

豊中市 月 原 方 郎
育兒より会社勤めを選ぶ嫁
隠居にも身だしなみあり五月晴

泉佐野市 大 工 静 子
新築中借家に猫はついて来ず
一夜漬け見えぬくらいにごまをふり

香川県(小6) 田 中 な み 子

宇宙人と秘密の通信やっている

人名辞典 昔の人が飛び出てきそう

◆ジュニアの部

鉛筆書きで投句される時は、できるだけ濃く書いてく

鉛筆書きで投句される時は、できるだけ濃く書いてく

鉛筆書きで投句される時は、できるだけ濃く書いてく

鉛筆書きで投句される時は、できるだけ濃く書いてく

鉛筆書きで投句される時は、できるだけ濃く書いてく

鉛筆書きで投句される時は、できるだけ濃く書いてく

鉛筆書きで投句される時は、できるだけ濃く書いてく

鉛筆書きで投句される時は、できるだけ濃く書いてく

投句者の方へ

鉛筆書きで投句される時は、できるだけ濃く書いてく

(黒川 紫香)

水煙抄

秀句鑑賞

— 6月号から

田中輝子

「人生は楽しむものだ」と、先人が言われた。具体的にどう生きることか判らぬまま、ある日、川柳と出会った。今はおぼろげながら、そのことが判るようになった。学ぶことに終りはしない。そう思った日から毎日が楽しくなった。

はじめての役は通行人でした

大橋政良

人生の一齣として、作者にとって忘れられぬ役どころ。それはまた、キラリと輝いていた瞬間であつたに違いない。

ふと友に便り書こうと回復期

流奈美子

友が病んでいる。そつとしておこうか、それとも励ましの言葉をかけようかと迷う時があります。でももう大丈夫、作者は友だちとお喋りしたくなったのです。元気になるのを待っているのも友情です。

演じきつて一気に水を飲んでいる

辻翠子

清濁を合わせ持つ水、命を繋ぐ水、一気に飲んで一つのことに区切りをつけた作者…。やがてまた、新しいドラマの始まりです。

色鉛筆 使いきれないまだ六十路

山本義子

「まだ六十路」に想いがこもります。色鉛筆二十四色を使い切るには、きんさん、ぎんさんと思うとまだまだ。そんな心意気が伝わってくる一句。

今だに蛙 柳へ挑戦したくなる

大川幸子

面白い比喻。思わず頑張つてと、叫びたい一句。挑戦することは生きていく証。

残り火がやっぱり愛を主張する

池森子

「やっぱり」がこの句のいのちでしようか。愛を全うしようとする一途さ、そこには哀しみさえ視えます。でもこの言い切った力強さに惹かれます。

遺言へ書く追伸が多過ぎる

八木芳水

あれもこれとも思ひ、書き溜めたものの、やはりまだ生きることへ執着心は捨てることできません。まだまだ旅は続きます。

思いの峠に残る案内図

酒井靖子

振り返ると、あの日の峠にあった案内図。でもその通りに行けるとは限らない。夢やロマンを追いかけて、いくつ峠を越えてきたことか…。作者の幸せが感じられる一句。

ドミノ倒しの中で生きている父の靴

長浜澄子

社会という途轍もない大きな枠で頑張るお父さん。でも、いつ不況風が吹くとも限らない。まして一寸先のことなど予想外である。

「ドミノ倒し」の表現が効いています。作者の暖かい眼差がこの一句を生んだ。

ちぐはぐな好みで回る夫婦独楽

的場十四郎

表裏つづり合せてああ夫婦

中嶋千恵子

夫婦の有り様をサラリと詠まれている。縁の不思議さ、そして有難さを感じる。二句目の「ああ夫婦」の表現に、すべての想いが凝縮されている。

あと二句にも、心惹かれました。

落書をする鉛筆をけずっとく

田中スミエ

雨だれが一途に石を掘る力

園山かおる

出

会

い

同人ずいそう

名との出会

小倉アサ

昭和十八年もあと五日で終る日の朝、超未
 熟児として生を受けて以来、クラシックな名
 前と共に来て正に半世紀。この間、人との出
 会いにこの名前が潤滑油となつて、笑いを投
 げかけてくれました。お逢いした瞬間、名前
 から想像する年齢とのギャップに驚かれ、ま
 た時には詫びて下さる方もおられたりして。

子供の頃は余り好きな名ではなく、今から
 思うと、年齢へのテレだと思ひますが、恥ず
 かしいと思つた事も多々ありました。でも不
 思議と笑いの種になり、顔は知らなくても名
 前を覚えていて下さる喜びもあり、嫌う反面、
 心の隅で誇りに思つたりしたものです。

両親は朝の景色を思いだすようにと、そし
 て誰にでも解る太陽を背負つた名前だと自慢

していましたが、おかげ様で元氣だけが取
 り柄で今日まで至つております。

縁あつて、心をよむ世界に足を踏み入れた
 今、呼名の重要さに触れ、改めて読みやすく、
 書きやすい名に感謝しながら、今は空にいる
 両親に掌を合わせております。

これからの道のり、今までも増して出会
 いを大切に、少しでも多く笑顔に触れるよ
 う心身ともに磨かねばとも。そして私の年齢
 と名前が肩を並べるその日まで、風の情けと、
 単純な名前を杖に歩かせて頂きたいと存じま
 す。

愛しくも可笑しくもあり名の出会い

尊い出会い

水粉千翁

「東野大八」という名は、私が川柳に入つた
 三十余年、何回も先輩から聞かされた名前

です。川柳界の論客で八面六臂の健筆振りは
 広く評価されております。『川柳雑誌』から
 『川柳塔』と大八先生の衰えぬ筆鋒は我々を
 叱咤され、誤りなき指針を示されています。
 しかし、出不精の私は先生との出会いがなく、
 雲来たり雲去るままにその夢を追つて来まし
 た。『川柳雑誌』第四四二号の一部を抜萃し
 て、先生の川柳観に触れて見ました。

「今の川柳には情熱がない。元来私は柳誌
 の同人がきらいである。同人を通じてエリ
 ト意識を強め、価値判断を置き去りにして名
 前に走り、地域的グループの宗匠化として排
 他的セクシヨナリズムのヨロイを着ている」
 と喝破されている。正に現代に通じている
 ようであります。

その大八先生に突如として出会いました。
 岡山の大会で謹厳な紳士が極めて丁寧にしか
 も刺を通じて「東野です」と私の前に現われ
 ました。狼狽して言葉に詰り、そして間を置
 いてお礼を申し上げました。岡山県経済教育
 界の顔という方との出会いが、東野先生と同
 じような出会いでした。

出会いとは尊いものです。大切にしなければ
 なりません。私の生涯には多くの出会いが
 あり、一人一人を尊敬しております。東野大
 八先生ともう一方との出会いがあることをこ

よなき誇りとよろこびとしています。

五十年振りの出会い

川 島 諷云児

出会い―何とロマンに満ちた美しい言葉であらう。しかし、私の出会いは果敢ない幻のような出会いであった。思い出すのは、今から二年前の平成三年四月のことである。

テレビの旅行番組で見た宮城県の「秋保温泉」に行ってみたくなり、妻にも言わず家を出た。東海道、東北新幹線で仙台に着いたのは十五時頃。コーヒーが飲みたくなって、駅コンコースの喫茶店で疲れを癒していた時、突然、私と同年輩くらいの人がおそろのおそろ声をかけてきた。「大変失礼であります、〇〇聯隊×中隊の川島隊長ではないでしようか」。私は一瞬、耳を疑った。今時こんな言葉を聞くと、直立不動の姿勢で声をかけてきたのは、何と約五十年前ビルマ進攻のためタイのバンコクに駐屯していた時の私の当番兵A上等兵であった。五十年振りの出会いでお互い手を固く握り合ったまま、言葉より先に涙が頬を伝った。往時の面影は残っていた

が、お互い年は争えないもので、声をかけられなければ行き違い、出会いはなかったかも知れない。

なつかしさの余り時も忘れて思い出話に花が咲き、再会を約して彼と別れ、目的地の秋保温泉に着いたのは、日も落ちた十八時頃であった。その後彼とは、文通を重ねてきたが、昨年十月、ふとした病気が元で帰らぬ人となっていました。私にとっては、五十年振りのしかも僅か二時間の短い出会いであった。今度彼との出会いは、極楽浄土であらう。

合 掌

戦争の悪夢

小 西 雄 々

昭和十八年十月、戦車第十三連隊の一員として蒙古の最前線にいて、毎月、ソ連の戦車との戦闘、いわゆる「対ソ戦車戦闘」の訓練に明け暮れていた。

戦友の中に、岡山県から来ていた円元藤一という仲のよい人がいた。彼は真面目だが、何事にも動作が鈍く、古年兵から一番いじめられたのではなかろうか。

そうした時に、突然、歩兵隊から約二十名

の転属者が配置されたが、彼らの質は悪く、程度は最低であった。特に上田某と称する下士官志願の軍曹には、初年兵の私達は度々泣かされたものだった。この上田軍曹が円元君に特にひどく当り、何かにつけて殴り、時には倒れるまで叩きのめされていた。私的制裁は禁止されていると言っても、それは奇麗事にすぎなかった。

ある寒い日またも彼は些細な事で、この軍曹の怒りにふれ、顔面が變形するほど叩かれ唇は切れて鮮血が吹き出していた。「頑張れ我慢。作戦に出れば仕返しもできる……」と慰めたが、彼の涙は止まらなかった。

その夜、不寝番に立った彼は、そのまま脱走してしまった。連隊全員で搜索した結果、彼は中国軍の保安隊の宿舎にいた。連れもどされた彼は、重賞倉に入れられた。罪を償って出獄した彼という人と話し合う機会があり、最後に、復員したらゆくり一度再会しようという約束して別れた。

私達は、同期兵会という催しを昭和四十年頃からしているが、彼は一度も出席せず、五年ほど前、胃癌で他界したと聞いた。また、上田軍曹は終戦直前の作戦で戦死した。

「出会い」を思い出す時、何時も不憫だった円元藤一君が臉に浮かんでくる。合掌。

野鳥との出会い

斉藤 功

いい季節になった。春は出会いの季節、ふと思つと近頃、囀る野鳥との出会いに興味を持ちはじめている。

それは、二年前の夏、三週間にわたる文部省主催の教職員等中央研修講座を受講する機会を得て、いろいろな立場からの講義や演習を受けた中の一つ、自然を教材にしている点で関心のあつた「野鳥と私たち」という講義との出会いからである。

講師の日本野鳥の会常務理事市田則孝氏は地球環境破壊の問題にはみんなが関わっているが、みんなが関わっていると誰も知らない、私は野鳥を守ることから始めたいという。「なぜ野鳥なのか、なぜ野鳥を守れと唱えるのか」については、○野鳥は周囲からよく見えて綺麗であり教材として優れている ○野鳥は食物連鎖の頂であり、自然の仕組みが分かり生態学を学ぶのによい ○日本の野鳥五〇種のうち四八％は渡り鳥、鳥を通じて国際交流ができる ○四十雀は年間八万五千匹もの虫を食べる ○鳥は虫を食べて緑を守る役割が

大きい ○木の実が鳥に食べられ鳥の腹を通ると発芽率がよく、鳥は緑を育ててくれるなどとは話尽きない。

野鳥も人間も地球の仲間、地球とその自然環境の中で私どもは生きていることを忘れてはなるまいと思つた。市田氏の話が野鳥と私をだんだん近付けてくれる此の頃である。

川柳塔五月号の銀河系、西口いわるさんの句「公園で地球の音を聞いてます」に野鳥の囀りも聞こえてきそうだ。

いくつかの出会い

吉村 一風

私には、他人とは少し変つた出会いがいくつかありました。昭和十七年、学校を出て松下電器産業へ入社、と同時に研修を得て中国の上海松下電業へ転勤、中国人との思いがけない出会いとなり、なおまた得難い出会いに惜しくも亡くなりましたサンヨー電機の元社長、井植薫社長が居られ、約三年間よく教えられ、よく叱られました。

余談ですが、日本国内はもはや食料は欠乏、野草さえ食する時代、それにひきかえ上海は

衣食なんでもござれの街、信じられない驚きでした。仕事は日本人が上役で、二十歳で五十名ほどの仕事の管理、思いもしなかった二百名ほどの寮監、本当に珍しい経験をさせてもらいました。しかし上海で、もし飲んで遊び過ぎると、裏のまだその裏があると言われ、使い込み、不良外人として内地送還が常識でした。

次に小さい出会い。誰の発案か社員川柳互選会がたまにあり、覚えている句に上海語の混じつた句で、「アン、クレシ、アラもクレシやワンポツツオ。字で書くと、『儂苦来西阿拉も苦来西や黄包車』。意味はあなたも苦しいだろうが、人力車の私の方が苦しいんだと訴える内容です。

こんな時代の続きに、広島産の私は軍隊教育を広島で受け、その後、昭和二十年単身、東京の東部二部隊（近衛歩兵第一聯隊）に転属、特別教育の上、宮城内に入る出会い。終戦後、禁衛府（宮内省直轄）という部門に十一月まで残され、この間、最も大きな出会いがありました。恐れ多い事ですが、皇太子殿下（只今の天皇陛下）の奥日光湯元温泉へのご静養時、そのご守衛勤務のメンバーとして赴き、ある日可愛い赤帽の殿下にご拝顔する榮に浴しました。

古川柳との出会い

岩 津 ようじ

私は昭和三十七年夏から一年間、結核療養所での療養を余儀なくされた。弟からお見舞いに、暉峻康隆著『日本人の笑い』という古川柳の解説書が送られてきた。「庶民の芸術にたまたま性感覚」という副題の示す通り、ほとんどセックス関係の句で、対象が対象だから療養所の患者でも興味を持つ。ただし、アハハと笑つたらそれ切りで、春情を催すことはない。上品なセックスの本であった。古川柳には解説がないと分からない句が多い。例えば、こんな句がある。

しがらしの果てはありけり嵯峨の奥
平清盛が寵愛していた妓王、妓女の姉妹は仏御前が現れたのでお払い箱になって追い出された。彼女らは嵯峨に移り住んだ。やがて仏御前も世の無常を悟り、自ら身を退いて妓王、妓女と居を共にした。清盛の「しがらし」が嵯峨に集まった、という句意である。その上、この句は池西言水いしきんすいの名句、

こがらしの果てはありけり海の音

をもじつてあるから面白いのだという。というような句がいくつも解説されていて、性的興味や知識欲を満足させてくれた。

患者の間でもこの本は好評で、同じ病棟を一巡して返ってきた。気に入った句をいくつか語らせた患者もいたほどである。

『日本人の笑い』は、退院後、会社の連中に貸したら、ここでも好評でまた貸しを繰り返されるうちに、なくなつてしまつた。今、私の手許にあるのは、その後、偶然、書店で見つけて再入手したものである。三十年前、病棟を一回りして患者たちを喜ばせ、元気づけてくれた現物でないのが残念である。

猫との出会い

新 正 子

「高校に合格したら猫飼つてくれる？」

長女がそう言つたのは昭和五十七年、受験生の秋でした。その三日後、ペット屋さんが「この子飼つてくれない？」と白い猫を持つて来られました。モスグリーンのきれいな目

をしていましたが、瘦せていて毛が薄く短く、可愛いとは言えない猫でした。「雄」で「も

う少し大きくなるとフワフワの毛並になる」と言う猫を、娘は「強」と名付け、落ち着くまでと正座をして三日間抱いて寝て、それ以後、娘は強の母になりました。朝、強は娘が見えなくなるまで見送り、夕方帰宅する時間には玄関でひたすら待ち、勉強中は足下で丸くなり、仲良く冬を過ごしました。

そして春、娘は無事、志望校へ合格しましたが、とんでもない事が起こりました。強が妊娠したのです。毛も伸びず寒がり、コタツで何度もそそぐをして、三枚もコタツ布団をタメにしてもじつとがまんの猫嫌いの夫が怒りました。「ペット屋に返してしまえッ」雄と雌が分からなかったのかと言われても、プロの言葉を疑つても見ませんでした。「お願い、返さんといて……」子供達は泣き出し、家族会議の結果、子供達の懇願と民主的多数決により強は我が家に残る事になりました。それから八年、子供達は次々と家を出て、夫婦二人の暮らしになり、強は一気に年を取り、核家族では分らない「老い」と言うものを私達夫婦に教えてくれて、昨年末永眠しました。

海の見えるお墓に週一度、猫嫌いの夫は通っています。

銀河系

河内天笑選

米子市 林 荒 介

祈られる形に樞は立っている
何冊も辞書を揃えてなお寒い
羊水はむらさき色の海だった

松原市 小 池 しげお

それほど貴重品ではない財布
祝い酒持って来たほど飲んで去に

大阪市 榎 本 露 児

チンドン屋帰り道では皆無言
ダイヤルの途中でちよつと思案する

茨木市 堀 良 江

この嘘はえんまさまにも言い通す
にこにこピントはずれの返事して

豊中市 田 中 正 坊

いつまでも酒飲めるよう休肝日
毎日が休日だから余暇がない

堺市 高 橋 千 万 子

きれいな事やっぱり心残りなり
許すこと出来ればなおる不眠症

青森市 工 藤 甲 吉

どなた様もお金に弱いから困る
なんだって貧乏神も神のうち

富田林市 藤 田 泰 子

新緑に染まると少し若返る
四季咲きをいつも心の片隅に

和歌山市 福 本 英 子

消えそうなローカル線だから乗りに
いたずら電話わたしの歳も知らないで

和歌山市 桜 井 千 秀

とんとん拍子周りのことに気付かない
理性まで曇る女のダイエツト

名古屋市 藤 井 高 子

そんな日は脳細胞を洗いたい
矛先を軽い土産に塞がれる

鳥取県 新 家 完 司

五億円の絵を欲しいとは思わない
聴きたくない人を無視して歌うたう

寝屋川市 江 口 度

仲間集まる似たような傷だいて
ボケ役がさつと客筋みきわめる

羽曳野市 吉 川 寿 美

踏んばっておらねばならぬ薬の馬
それなりに幸せでしたところろ汁

大阪市 神 夏 磯 典 子

いつまでも夫を攻める日記帳
ペアルック優先席を占めている

八戸市 島 田 昭 治

符号ある父の日記が読みにくい
愛称のままで名物婆さん近き

弘前市 肥 後 和 香 子

チューリップもくれん水仙急ぎ足
狂おしや桜吹雪をゆく素足

今治市 渡 辺 南 奉

眼鏡新調 大発見が出来るかな
自分が嫌いで人を好きにはなれません

米子市 澤 田 千 春

あと味のよい人に逢う 掌を合わす
耕して素足で土と語り合う

和歌山市 田 中 み ね

ジャンプの度に寿命が縮こまる
道徳にうるさい人のどこか抜け

倉吉市 野 中 御 前

名産のカニは整形して売られ
花の下いつもどこへたこ焼屋

鳥取県 ささき や え

悲しいがそれはまぎれもない戦死
群れに在ると何か安心してしまふ

静岡市 小 木 久 子

歯をみがくように心は儘ならぬ
訣ればなし小骨が多くなつてくる

鳥取県 江 原 と み お

あの椅子に座るとみんな欲を出す
笑面市 椎 江 清 芳

藤井寺市 菊地 繁男

きっぱりと訣れましと語氣強し

兵庫縣 倉垣 恵美

言い訳をしない美德がありました

大阪府 藤田 頂留子

期待してはしくないから黙っとこ

米子市 八木 千代

酸性雨向う岸には届くまい

米子市 林 瑞枝

枝打ちをされて男の樹は伸びる

大阪府 板東 倫子

平成五年五月五日の鯉のぼり

姫路市 大原 葉香

助走り返して'sを見失い

鳥取県 上田 俊路

お見舞いに優しい嘘を置いてくる

西宮市 奥田 みつ子

自信ある字になってきた子の手紙

和歌山市 木村 初子

ふりむかず阿呆で楽に生きる日々

宇部市 中村 三良

シナリオを何度書き直しても独り

池田市 岡本 吉太郎

故郷はあつという間の通過駅

香川県 永峰 伽名子

あどけなさに小言も首を引っ込める

有田市 松井 かなめ

たったひと言が足りずに誤解され

鳥取市 前田 一枝

負けるのに馴れて気楽な波に乗る

寝屋川市 平松 かすみ

流行っても僕のきらいな肩パット

米子市 新 正子

お値段を聞いて立派な絵と分かり

鳥取市 岩原 喬水

ここまではうちよろしうしてた人生だ

姫路市 丁坪 サワ子

どん欲に詰めすぎていた胸の壺

綾部市 藤田 芳郎

悩みでもあるのか妻が愚痴言わぬ

香川県 木村 明人

歓待の渦へ酸欠気味になる

大阪府 津守 柳伸

本人は金の卵と思っている

笠岡市 松本 忠三

写真となると最前列に来る男

大阪市 尾崎 黄紅

目葉をさして一気に読むつもり

鳥取県 西川 和子

喜びの電話の声が澄んでいる

藤井寺市 高田 美代子

ふろ・めし・寝る 男の呪文だと思ふ

米子市 茂理 高代

逢いにゆくそんな葉書がうれしくて

唐津市 山口 ふさ子

両親に貰った顔で押し通す

岡山県 江口 有一朗

晩節が狂わぬほどの欲を持ち

今治市 渡邊 伊津志

美しい笑顔に逢って若返り

弘前市 岡本 花匠

炎天に梅干しさらし悲ない

羽曳野市 福田 悦子

双眼鏡外野の顔が男前

鳥取県 田村 きみ子

ほどほどの生活神さまから貰う

鳥取県 土橋 はるお

粽たくさん食べて餓鬼大将になれ

岡山県 小林 妻子

お父さん時どき炊事しています

十和田市 斉藤 蒔

父さんがくれた私だけの辞書

鳥取県 鈴木 公弘

道草をいっぱい詰めたランドセル

松江市 松浦 登志子

ピーナツとおかきの味の夫婦です

静岡市 浅子 まつゑ

お座敷の列車で巫女が雑魚寝する

大阪市 大河 未佐子

もう知らん言うているのは背中だけ

吹田市 山本 希久子

出発の元気忘れた八合目

堺市 神原 文

下書きは何ともうまく書けるのに

尼崎市 春城 年代

みそあんの柏餅から亡母が出る
尼崎市 春城 武庫坊

風呂敷を包むと亡父の所作になる
米子市 政岡 日枝子

休肝日ぶらりと覗く古本屋
鳥取県 美浦 美代子

子の悩みついで行けない親となる
大阪市 大福 留吉

朝帰り疑う人が居てくれず
枚方市 濱田 良知

愛していると素直に言うて腹がへり
香川県 川崎 ひかり

横文字が並ぶ私の失語症
鳥取県 石谷 美恵子

叱らずに育て反省しています
島根県 小林 延子

はつきりと言えばつまりはノーのこと
広島市 流 奈美子

げんまんの小指ときどき痛みます
岸和田市 田中 文時

倦怠期言いっ放しに聞き流し
大坂市 今西 静子

弱虫でノラにもなれず生きている
広島市 中村 要

何となく平和な朝だ休刊日
静岡市 青柳 金吾

煩惱が消える事なく禅終る

東大阪市 今岡 貞人

気楽とは思っていない独り者
枚方市 森本 節子

とりたてのアマゴを焼いて缶ビール
茨木市 藤井 正雄

熱帯魚はめて宅配判貰う
兵庫県 遠山 可住

ダイエット先ず好物を血祭りに
今治市 越智 一水

政・官・財ぐるで貧乏人いじめ
阪南市 深日 白光子

速さより安全願うJR
和歌山市 細川 稚代

ソ連邦嫌いなひびきのまま消える
熊本県 増田 一乗

連休あけどの病院も人溢れ
川西市 松本 ただし

不退転呪文のようにする揉み手
鹿児島県 大山 舞鳥影

定年を身に感じますゴミ出し日
唐津市 山門 幸夫

案の定親を泣かせたボランティア
守口市 結城 君子

会席膳いそいそ運ぶ留学生
西宮市 亀岡 哲子

寝不足の国賓に会う京都駅
鳥取県 権代 康女

ゴミの日をカラスはちゃんと知っている

富士宮市 渥美 弧秀

人造の水晶体で喜寿を越え
京都市 松川 杜的

道路情報いつものところが混んでいる
岐阜市 渡辺 杏村

原人の太古がぐつと明るみに
唐津市 山門 タミ

空き缶を拾って帰る人もあり
岸和田市 三輪 通彦

ソロバンを弾けばできぬボランティア
河内長野市 植村 喜代

袖の下くぐるお金は音もせず
米子市 白根 ふみ

普賢岳今日の地図さえ古くなる
岡山県 富坂 志重

研修という旅に出る女連れ
福岡県 本田 忠男

ときどきは拗ねて男を覚まさせる
奈良市 米田 恭昌

漫画より絵本が似合う桃太郎
枚方市 海老池 洋

赤いリボン掛けるとはしやぐプレゼント
姫路市 福島 姫女

老人会まだ肩書きがこびりつき
岡山県 千原 理瑛

鏡よ鏡今日最高の笑みうつす
羽曳野市 芦田 絢子

足からの老いが気になるレオタード

唐津市 山口 高明
肉親に負けぬ寮母の鞭がなる

和歌山市 岩 本 美智子
海鳴りに消されて思い届かない

鳥取県 乾 隆 風
傾いた野ぼとけ直し梅雨が明く

米子市 小 塩 智加恵
あと一煮チャイムの音にガス止める

大阪府 亀 井 円 女
ひと言が多い足らぬと凡夫婦

福岡県 横 地 正 好
小母さんのバイト職場に簪あと

和歌山市 森 口 恵 子
うっかりとおだてにのったつけがくる

和歌山市 堀 畑 靖 子
ジタバタと今日の私は空回り

西宮市 西 口 いわゑ
昼下がりにお伽噺のすきな椅子

静岡市 沢 田 きん
捨て金と思ひながら夢を買へう

熊本市 遠 山 夏 生
クリアした平均寿命から追われ

香川県 辻 上 よしみ
ギーギーと私を嫌う指定席

米子市 中 井 ゆ き
イタリアは愛して食べて唄うくに

和歌山市 山 口 三千子
ままごとのような夫の台所

和歌山県 藤 井 春 子
気まぐれに狂う季節になやまされ

大阪市 中 西 兼治郎
屋上の風が見えてる鯉幟

和歌山県 福 田 和 子
土に生き朝はやつぱりごはん党

米子市 石 垣 花 子
雑巾へミシン明るい響きたて

宝塚市 丸 山 よし津
ケチンボに筋道のある京の町

倉吉市 奥 谷 弘 朗
長生きをさせたい肩をもんでやり

海南市 谷 口 義 男
平で良い気楽に生きる方を取る

香川県 山 地 マツエ
頂上の椅子へ野心が渦を巻く

大阪市 川 原 章 久
白い目で今潮時と追い立てる

大阪市 井 上 白 峰
家計簿の穴をバートで埋めている

岸和田市 島 崎 富志子
カラフルな靴でジョギングしています

倉吉市 米 田 幸 子
手抜きせぬ味が暖簾を守り抜く

唐津市 仁 部 四 郎
勘当の娘も呼んで七年忌

西宮市 瀬 尾 六郎太
往復路桜トンネル足ゆるむ

広島県 田 村 新 造
戦友と呼んであれから五十年

和歌山市 山 田 高 夫
その家の匂が染みた応接間

茨木市 井 上 森 生
中年の好きなグルメや初鰯

唐津市 浜 本 久仁於
白秋の里で柳の雨に濡れ

唐津市 田 口 虹 汀
食欲を甘茶で洗う花まつり

寝屋川市 後 藤 黎之助
墓参りお年の順に並んでる

唐津市 浜 本 ち よ
物忘れ生活のリズム狂わせる

和歌山市 内 芝 登志代
どん底のとても明るい話し声

大阪市 岡 田 ふ み
足に傷さつぱりわやの春も過ぎ

唐津市 岩 崎 實
花びらがお地蔵さんの手で遊び

兵庫県 酒 井 靖 子
悔しさを消すこめかみを揉んでいる

和歌山市 玉 置 当 代
秘めごともなく夫婦独楽よく回る

「銀河系」への投句は、同人・誌友を
問いません。川柳塔用箋に3句を書き、
毎月15日までに到着するよう、川柳塔社
事務所へお送りください。(選 者)

尚香のむ

小出智子選

一人だけ笑わぬ友がいる写真

夫と妻に貸借対照表がある

茶を沸かすことで始まるわたしの朝

一人芝居こっそり稽古しておこう

例えば窮鼠わたしは素手で生きている

全開の蛇口で洗う今日の嘘

期待して大きい鉢に植え替える

検診をもぐら叩きのように受け

一期一会と思えば長い立ち話

丸窓に天女のなみだらしき雨

睡眠薬今夜も極楽ゆきにする

姑さんの背丈を計る鯨尺

ひとつ覚えふたつ忘れて春の坂

一人降りてひとりになったバスの旅

白に慣れて白の威厳を忘れてる

饒舌のすきまに鬼が来て座る

幸せは二重開いにして守る

確率を言うまい夢をこわすから

あの笑顔みんな味方にしてしまふ

和歌山市 森 茜

名古屋市 藤井 高子

鳥取市 西原 艶子

和泉市 中川 楓

島根県 松本 文子

香川県 川崎ひかり

和歌山市 田中 輝子

大阪市 日阪 秋子

寝屋川市 井上すみれ

米子市 鹿島 松子

尼崎市 春城 年代

和歌山市 小川百合子

和歌山市 木本 朱夏

大阪市 北川 弘子

米子市 政岡日枝子

米子市 林 瑞枝

寝屋川市 籠島 恵子

堺市 高橋千万子

芦屋市 黒田 能子

歯を抜いてよいしよと力入らない

開花寸前つっじの白も花嫁も

潮干いて貝は不安でたまらない

追風にたよると転ぶ老いの足

心細くてしつかり絆握っている

また逢える日へ丁寧な傘を干す

老婆心満たして後は何もない

ハンパーガー鬨る勇氣はもう出ない

病む母の愚痴も包んだオブラート

紫陽花のきのうの色ときょうの色

そう言えば丸いポストをとんと見ぬ

美しい姉の化粧を真似てみる

心乱れて仏の前に座してみる

白い花が白く描けないひとつの罪

連休が明けて空気を入れ変える

孫を抱く腕の開きを工夫する

老い知らぬあの宇野千代を目標に

向い風女は髭す術も知る

五十歳 走りまわっているうちに

風呂敷に包む私の嘘まこと

ガラス拭く五月の空に負けぬよう

すんなりと通らぬ糸を持て余す

でこぼこ道がふつと恋しい土踏まず

お背中を流すつもりで墓を拭く

季節はずれの徒花が咲いている

大阪市 渡部さと美

東京都 山口 新子

和歌山市 松崎 幸子

岡山県 富坂 志重

堺市 横田マリ子

和歌山市 福本 英子

大阪市 上江洲勝子

和歌山市 古久保和子

和歌山市 宮口 克子

和歌山市 西山 幸

大阪市 西出 楓楽

西宮市 奥田みつ子

西宮市 西口いわゑ

熊本市 永田 俊子

富田林市 藤田 泰子

米子市 新 正子

寝屋川市 堀江 光子

西宮市 秋元 てる

和歌山市 堀畑 靖子

和歌山市 玉置 当代

青森県 福士 トキ

藤井寺市 高田美代子

出雲市 石倉美佐子

枚方市 森本 節子

鳥取県 清水加代子

よく出来た姑を演じて五十肩

綱引きに疲れブランコ軋ませる

丸い石流れに負けたわけでなし

スタートはいつか忘れるほど夫婦

賞味期間すぎて夫婦の味になる

綻びを繕い合っている夫婦

抜いた歯を大事に埋める庭の隅

おもちゃ箱の底で出番を待つラッパ

恋人も大事とさくら耳うちする

春の顔うっかり世辞にのせられる

若そうに見えるだけではしょうがない

まだ見ない弟がいる雁の列

違うこと考えながら一つ皿

咲く花も散りゆく花も酒になる

○×の答は軽いボールペン

仕合せになろうしっかり手をつなぐ

縄のれん額で分けて外す面

この道もやがて一人の旅となる

一枚の国債の利子涙つぶ

悪妻の娘に拍手してしまい

山径を喘いでうまい水に遇う

ワンカップとスルメで一人花も見た

おだてにはとつても弱い風車

公園を通りぬけたくなる五月

冷や奴情けの裏はまだ読めず

和歌山市 田中 みね

和歌山市 桜井 千秀

岡山県 矢内寿恵子

寝屋川市 平松かすみ

羽曳野市 吉川 寿美

和歌山市 山口三千子

和歌山市 岩本美智子

富田林市 片岡智恵子

弘前市 肥後和香子

大阪市 神夏磯典子

大阪市 本間満津子

西宮市 門谷たず子

伊丹市 前田しゅう子

鳥取市 前田 一枝

宝塚市 丸山よし津

東大阪市 指宿千枝子

寝屋川市 岸野あやめ

茨木市 堀 良江

弘前市 一戸 ツネ

堺市 宮本かりん

堺市 山本 半銭

倉吉市 野中 御前

岡山県 千原 理瑛

堺市 近藤 豊子

和歌山県 小倉 アサ

極楽は吾が家にあつた旅疲れ

五十歳何を食べても肥りそう

へそくりの暗誦番号忘れそう

私にもはるかはるかな青い恋

絵葉書の夢に思ひよせている

飾らない寡婦の生活がつつましい

跳びたくてまだまだ辞書は手放せぬ

連休の財布の口が開いたまま

職域に女だてらは死語となる

売れ残るカーネーションの独り言

嫁した娘へアフターサービスまだつづき

ひたむきに生きてきた道振り向かぬ

歩きぶり話しぶりまで父に似て

強風に牡丹の悲鳴聞こえそう

今日も無事写し終えたる船若経

ゴシックの一句目―写真というものはときとして心の翳りまで写し出す。それに眼を止めたのは作者の温かさである。友を思う心に絞って深い句になった。二句目―「貸借対照表」と固い表現になっているが、これは金銭でなく、心の遣り取りを現わしたもの。きつと帳尻はうまく合っているに違いない。三句目―何でもない些事をこのように作品にされるほどと納得させられる。充実した一日を想像させる。四句目―脇役が居てこそその芝居であるが、さてどんな一人芝居が演じられることやら。それにしても今、幸せだからこの句を生むことが出来る。

◇

投句先 千 544 大阪市生野区勝山南1―18―10 小出 智子

兵庫県 奥野 テル

鳥取市 植田 一京

鳥取県 羽津川公乃

和歌山市 内芝登志代

大阪市 稲本 凡子

姫路市 中塚 遊峰

兵庫県 酒井 靖子

有田市 松井かなめ

大阪市 大河未佐子



腹の立ったこと

茂 見 よ志子

一週間ばかり、東京の娘宅に滞在して、帰阪した日、新大阪駅まで迎えに来てくれた夫と、午後四時頃帰宅した。

「やっぱり我が家が、一番いいわ」と先に家の中へ入ると、裏のガラス戸が開いたままになっている。「不用心やないの、あけっぱなしのまま」と帰るそうそう文句を言いながらよく見ると、ガラスが畳の上に散乱している。

嫌な予感に、動悸も早くなってきた。「空巣にやられたんだノ」。部屋の荒らされた形跡はないが、引出しをあけて調べると、コレクションとして大切に保存していた旧紙幣数種類が全部無くなり、空の財布だけが残っていた。

何はともあれ一〇番へ、警官一人がすぐ来てくれて、いろいろ調べ調書を取り、最近の空巣の手口のあれこれを話して帰って行か

れた。どたばたのうちにすっかり暮れて、土産話もすつとんでしまった。

翌朝、ガラス屋に同じ模様は無いかと、ガラスを入れてもらい、鍵屋には家中の戸へ二重に鍵を付けてもらうなど、余分なもの入りになってしまった。

それにしても、この家に住んで二十数年になるけれど、泥棒に入られたのは始めてのこと、しかもたつた二時間程の留守の間に。被害の多少に拘らず、腹が立つやら気持ち悪いやら。

何処の、何奴が、どうして、等々考えて、今だに腹が立つ、去年の春の出来事です。

「どうぞ皆様も、お気を付けあそばせ」

天国と地獄

佐 治 千加子

テレビ画面いっぱいひなげしの花が、赤、黄、色とりどりに輝いている。アレっ！余りにもそっくりそのままでの風景に、私は四十年前にタイムスリップしてしまった。

四十年前、私はバセドー氏病で、別の病氣と間違われ発見が後れて衰弱しきっていた。入院数ヶ月にしてやっと手術が出来る体力と

なり、手術はどうやら成功した。しかし、特異体質で百人に一人もあるかないかという反応を起し、夜半に呼吸困難、遂には窒息してしまった。手術室に運ぶ暇もなく入院室のベッドで気管切開、人工呼吸、足首切開、輸血などなど、大騒ぎだった。本人は意識不明で麻酔もせず、一秒を争ってノドに穴をあけられたことも知らなかった。その間、私はテレビ画面と同じお花畑をさ迷っていたのである。淨らかなせせらぎの音がどこからか聞え、お花畑はどこまでも果てしなく広がり、さわやかな光が満ち、例えようのない静けさと美しさだった。

意識が戻っても三日間重体だった。昏睡から醒めると、何とも形容し難いオバケのような物らしい顔が現われ、歯をむき出す映像が暗い病室の天井いっぱいに写し出されては消え、また写る。ノドに穴があげられているので声が出ず、誰にも説明出来なかったのは今思うとさいわいだった。ただ眼を閉じたり開けたりしていたが、あれが魑魅魍魎というものだろうか。

しかし、そんな無気味な映像よりも、今なお私の脳裡に鮮明に残っているのは、さわやかに風にそよぐひなげしの花々である。

れくいえむ

川柳こぼれ話

田中正坊

エッセイストで「俳人」でもある江國滋は『慶弔俳句目録』という著作の中で「慶事凶事に贈る挨拶の俳句、一句独立、不即不離をもつてよしとする」と慶弔俳句を定義づけ、例句として一昨年十一月、七十歳で死去したイブ・モンタンを追悼する自作――

おほいなる枯葉は土にかへりけり 滋酔郎を挙げている。

この追悼句に隣接するものに「忌日の句」があり、どの歳時記にも古今の俳人・文人の忌日と例句が掲載されている。まず、その中から私の目に触れたものを紹介しよう。

ばら色のままに富士凍て草城忌 三 鬼
山椿さには見たりき利久の忌 澄 夫
支那街に揺る焼肉 西東忌 不死男
啄木忌いくたび職を替へてもや 敦
禁客寺 鯉着々と百閒忌 古 郷
季吟忌や六十巻の湖月鈔 月 斗

藤村忌 鴨立庵も見て来たれ 波 郷
硝子戸の中の句会や漱石忌 孝 作
それなら川柳ではどうか。尾藤三柳は『川柳俳句教室』の中で、「慶弔吟の考え方」に一章を割き、弔意吟はその詠時によって哀悼句・追悼句・献句の三つがあるとしている。この「献句」が滋酔郎の言う「忌日の句」にあたり、ここに俳句と川柳との「接点」を見ることができ。次に著名な川柳人の「忌日の句」を例示する。

久良伎忌の吉原は斯くほろびけり 竹 二
青い葉は花よりすがし晶子の忌 薫 風
桜桃忌ころにも水溢れくる 俊 平
路郎忌や美濃の大八 備後の垂鈍 栗
モンロー忌聖なるものは遠くなる 藻 介
蟬しぐれ水府忌の人みなしずか いさむ
鏡花忌へ一句供えた女形 水 府
川柳忌だからつき合う下戸の猪口 茶 六
先に「接点」と言ったが、「相違点」もか
いま見ることができかも知れない。さて、
冒頭に紹介した滋ここの滋酔郎は、俳人にして
おくのは惜しいほど、川柳的な俳句をつくる
御仁だが、何しろ時事吟的な慶弔吟とそのコ
メントだけで一卷を編んだ人だけに、「得意
不得意ということはいわせていただくなら私
は忌日の句が得意なのである」とチャーシャ

ーとのたもつている。

何をかくそう、この私もここ数年来、レク
イエムをつくり続けている。私の場合、得
意と言うよりも好きなのである。歳時記をパ
ラバラと繰ってその月に忌日がある俳人・柳
人・歌人・文人や知名人の作品や業績を思い
浮かべると、スツと一句ができる。

いずれにしても、忌日の句は俳句・川柳の
「本流」になることはできないが、もつ少し
その存在が認められてもいいのではなからう
か。かつて挽歌が日本の詩歌において、その
位置を占めたように。あえて我田引水とはこ
とわずに、拙作を各月一句ずつ示してお目
を汚すこととしたい（下の数字は忌日）。

歩兵われ黙々と行く葦平忌 1 24
一寸の虫たらんとす多喜二の忌 2 20
淀川の水ぬるみたり月斗の忌 3 17
石をもてわれも追われき啄木忌 4 13
問答は無用にあらず木堂忌 5 15
なつかしや少年倶楽部 紅緑忌 6 3
一門の末座にわれも不死鳥忌 7 7
絵草紙の恋みな悲し西鶴忌 8 10
人生は旅と酒なり牧水忌 9 17
ルビツキの全集があり直哉の忌 10 21
花一つえらばは椿 忍冬忌 11 21
文豪という語がありき漱石忌 12 9

根

小白金房子選



好きだから農家の嫁に根を下ろす
血の絆だけに争い根が深い
根が生えたように動かぬ土俵上
老木が根強く若芽また燃やす
根をはって太古の歴史今に継ぐ
根回しの巧い男を買い被る
楚々としてミヤコワスレの根の強さ
球根が太る大地に抱かれて
健康な根を褒められて胡蝶蘭
屈辱な根に持つている桜草
雑草の生きねばならぬ根の深さ
球根の綺麗な花を競い合い
芍薬の根に触れ夢を膨らます
地球上争い絶えぬ根の深さ
しっかりと根を下ろしたいもやしの根
根底をあさると孤独見えてくる
農政の不信根深い蟬り
負けたこと言わず根性はめてやる
根を張ったタンポポ空を飛んで行く
ふる里が好きで過疎でも根をおろす
刺ぬいてまだこだわりの根が残る
根性の良さが女にもてている

典子 ようじ 倫子 喬水 水煙 多賀子 よし津 あやめ 英王子 薫 たつみ 哲静 つえ子 あずさ シマ子 寿美子 かおる 大柏 祥庵 孝由 狸村 寿美

根を下ろす大地はなぜか里に似る
三界に無かった家に根が生える
逆らわず流れにまかす根無し草
飛ばされた種が岩場に根を下ろす
根付いては困るものから伸びてくる
焦土から緑萌えさす根の強さ
飯の世の根なし草にも愛の花
根は他人サラダたつぷり酢をきかす
根性のない人間の薄い影
根回しに酒が役買わされる
つまらないことが根っこに引かかる
パイオの根土の情けに触れぬまま
小さいが屋号もついて根を下ろす
割れている植木鉢から根が溢れ
根はひとつ枝の流れを聴いてやる
佳

ちかし しげお 高夫 希久子 れいじ サワ子 きみえ 京子 清芳 諷云児 保州 鉄治 明水 愛論 アサ はるお 俊路 雄々 正坊 テル

文豪の泊ったお寺の部屋で寝る
すぐ裏は部屋に続いた小高い
キャンパテントこの一部屋は星の下
部屋の中夫婦随の絵を吊るす
パソコンをおやじが習う子供部屋
部屋ロック娘と見えぬ距離が出来
父の部屋一ぱい父の匂する
北向きの部屋でくすぶるペンネーム
一部屋で暮した頃の温き妻
部屋住みの大が一番威張つてる
赤ちゃん部屋には春の絵を掛ける
合格と大書してある子供部屋
お婆さんがなくなつたお爺さんの部屋
あつてからんと笑える部屋で逆らえぬ
お嫁さん来てから部屋が動き出す
私の部屋でわたくしが唄う凱旋歌
通された部屋に生きてた御名御爾
納戸には物の怪が居た幼い日
ノックなどする部屋はないひと間きり
冷暖房完備ロボットの部屋
隔離されたように個室にいる部長
子供部屋避けて揺るぎのない積木

抜智 保州 シマ子 雄々 忠雄 白光子 雀踊子 寿美 良知 公乃 高夫 和子 三重 きみえ 高栄 あづま 虹汀 南奉 ようじ アサ

部 屋

坂口公子選



わたしという木偶人形が部屋にいる風の誘惑 私の部屋の戸を叩く一徹を試い切れずに老いの部屋信念を通して軋む父の部屋六法が机上にあった妻の部屋娘の部屋で尾崎ゆたかの絵に出合うドン底で生きた小部屋の裸電球旅戻り私の部屋は世界一金の相談いっきに部屋が寒くなる思い出の修学旅行部屋めぐり大部屋を抜ける芝居の稽古する汗くさい臭いを吊し男部屋鍵かけた部屋で漫画を読んでいる部屋に鍵少年徐々に脱皮する思惑も内緒もいらぬ一人部屋

佳

人

地

天

軸

おもいきり叫ぼう誰もいない部屋まあ上がんしゃいばい飲める部屋はあるここからは派閥以外は行けぬ部屋月原宵明老夫と居て今日も祈りに明ける部屋

濡れる

植村客遊子選



濡れた手を拭き拭き母は膳につく 癌告知 暇を濡らすゆとりなし 行きずりに言葉をかけて濡らす旅 母呼べばいつも手を拭きながら来る 濡れ衣着せ殺し文句の穴を掘る 露に濡れ陽に恵まれて野に生きる いくばくの余命へ濡らす淡い恋 新調のコートが濡れる俄雨 雨の日の傘は黄色い園児たち 濡れた者同士が喫茶店の隅 晴れ着きて雨に濡らして母の顔 野良仕事父は背中の汗に濡れ 小糠雨濡れるも情緒 京の街 お地蔵と共に濡れてる曼珠沙華 秋雨に学徒出陣濡れている 通り雨うちにも布団干してある 女物の傘で半分ずつ濡れる 豪快に濡れて楽しむ川下り 故里の森の緑に濡れてくる 昼ドラマまつ毛が濡れる貫い泣き 会者定離相合傘は濡れたまま 雨宿り出来ぬ神輿はあわれなり

情熱のおもむくままに雨の中 全身が濡れる緑の森の中 春雨じゃ濡れて行こうと酔っている 嫁ぐ日の父の枕が濡れていた 思い出に濡らした傘が干してある 霧雨に肩を寄せ合う古都の宵 片方ずつ濡れてうれしい俄雨 なるほどなあ右半身が濡れている 土砂降りも行かねばならぬ義理がある 濡れ足袋を脱いだ仕草は元女優 ひと刻をみどりに濡れて立ち話 ご神酒に濡れる唇軽くなる 再起する友に情けが濡れている 奈良坂や八一が歌碑に小雨そは降る 軒先に羽ばたく二羽の濡れつばめ

佳

人

地

天

軸

濡れた瞳が男の決断にぶらせる 朝々を濡れてジョギング浜伝い 残照の海に狐愁の頬濡らす 味見した母の濡れ掌のグーサイン

初歩教室

題 — 和やか

吉岡美房

今回の「和やか」という題では、題を入れずに和やかな雰囲気をつけた句に大変いいのがあった反面、題を入れて作句されても抽象的な表現にとどまってしまつて、他人に感動を与える程のものに乏しい句もかなり多かつたようです。別に題を入れても入れなくても課題を如何に忠実に表現するかが大切であると思います。なお参考までに「和やか」というような形容詞が題の場合は、名詞や動詞の題よりも題を入れない句の方が作りやすいのではないかと思ひます。

それでは添削句から発表します。

和やかな地球の上はいつ来るの 伽正雄

(和やかな地球望んで裏切られ)

和やかな総理の顔が頼りない あづま

(兵の死に総理の顔の和やかさ)

和やかな握手心は敵味方 保夫

(会談の握手演技の和やかさ)

和やかに軍歌うたつて晴々と

(和やかに歌つて軍歌涙する)

佳き伴侶得られし君の和やかさ

(良き伴侶得られ殿下の和やかさ)

腹の内隠して和むGセブン

(Gセブン腹は見せない和やかさ)

コップの中で和やかさを競演する

(競い合うコップの中の和やかさ)

一随に孫抱かされてからの顔

(孫抱いて父和やかな日をもらう)

病院で曾孫と和む義母の背な

(入院の母を和ます孫の顔)

孫唄り二才の芸に泣き笑い

(三世代二歳の芸に泣き笑い)

和やかな笑みを浮べる満一歳

(零歳の笑みとり囲む和やかさ)

金婚式ひ孫が歌う鯉のぼり

(金婚を囲む四代孫曾孫)

嫁姑孫が生れて和やかに

(和やかな姑に変えた孫生れ)

孫の数と和やかな娘が人気者

(孫の数かぞえて和む父と母)

嫁が来て和やか色気見せてくれ

(和やかな色香加える嫁が来る)

突然の客に驚く食事時

(悪友をもてなす妻に手を合わす)

久峰

ふさ子

武春

彩子

芳水

たもつ

嘉子

美寿子

ひろ子

君江

隆

孝由

九

真ん中に祖母座つて和やかさ

(祖母の座を囲み我が家の和やかさ)

和やかに話すお方のあたたかさ

(温い嫁から貰う和やかさ)

和やかに嫁が姑の肩流す

(嫁に肩流してもらう旅の宿)

褒めそやし夫にゴマするお茶の間で

(褒められて機嫌の直る夫と居る)

和やかになったと和尚に褒められて

(和やかになった二代目褒められる)

いい事があるらし和やかな笑顔

(和やかな妻の笑顔がまぶしすぎ)

和やかな嫁で家族の輪が丸い

(和やかな嫁の話で輪が丸い)

お裾分け夕餉へ和む老い二人

(お裾分け句の野菜へ和む老い)

祖母囲み和やかでした母の日は

(母の日の祖母和やかに笑み給う)

有難う一言空気を和やかに

(和やかに暮す感謝のありがと)

和やかに老人クラブの隠し芸

(楽しくて老人クラブ休めない)

わかれな誰もが思つた和やかさ

(離婚する日まで和やかそうな見栄)

和やかな亡母の笑顔が好きだった

(和やかな亡母の写真笑つて)

節子

志重

義男

君枝

幸夫

静子

侑里

金吾

(出正子

秀香

暁子

あきら

円女

和やかな雰囲気のある隣人

松子

和やかに茶粥をすすする友が居る

姫女

戦跡觀光和めず心もあたまず

幸子

(和やかな近所の中で生き延びる)

ますみ

(和やかに茶粥すすする友が居る)

一乗

(戦跡でこころ和めぬ観光地)

花の下愛憎忘れ和やかに

ますみ

童心に返り和やか同窓会

一乗

着想・表現ともに立派な句

(羽目少し外して和む花の宴)

トミエ

(童心へ一氣に戻すクラス会)

義子

和やかな家が育てた子の頓智

忠男

酒が出てお国訛りの和やかに

幸枝

あざみ草に山靴とめて息和む

友照

じやんけんで決める茶の間の残り福

芳郎

(里がえりお国訛りて花が咲き)

幸枝

(登山靴止めた薊の和やかさ)

友照

ふる里の海が帰省子と和ませる

幸子

和やかに見合いの席の親どうし

幸枝

訪ね来し友和やかにいちご園

友照

カラオケの音痴が受けて場が和み

辰男

(和やかに見せて見合いの親同士)

きぬ

(いちご狩り招いて話つきぬ友)

幸雄

スリッパにかえて茶も出る村役場

九

傾けぬ妥協和やか好んでも

きぬ

和やかに投げたら水の輪が丸い

幸雄

和やかに娘に戻るクラス会

静子

(うなすけぬ妥協と和む会議室)

黎之助

投了に話も和む対局場

絢子

和やかな笑顔に出合う万歩計

志重

和やかな輪で営みを忘れゆき

黎之助

(基敵が酒を一本提げて来る)

絢子

和やかな笑顔に出合う万歩計

志重

(和やかな輪からはみ出す正義感)

三重

若草をしがんで乳牛は和やかに

春風

懺悔して祈れば和む朝のミサ

ツネ

和やかに見せて手の内読ませない

三重

(和やかにする乳牛のいる景色)

春風

訪れた子等を和ます役はボチ

君枝

(和やかに見せて手の内読ませない)

りつえ

海神も和やか今日は風いでほる

高栄

爺婆がお手々つないで旅に出る

タミ

(和やかな仮面の下にめらめらと)

りつえ

(大漁旗帰ると海は風いで来る)

高栄

にこにこ座を和ませる聞き上手

和子

(和やかな仮面の下にある妬心)

りつえ

風よおいで一緒に遊ぶ食べようよ

とし子

同居してこの幸せをつづけたい

しづ子

紅一点座が和やかに息をする

みつこ

(和やかに五月の風にとにぎりめし)

とし子

和やかに言葉交して名を忘れ

ますみ

(艶やかな紅一点で座が和む)

子

つぎつぎに花が和んで庭の春

忠男

あのを星を亡母と決めて気が和む

美智子

和やかな家庭に変わる化粧する

修幸子

(次々に花を咲かせて和む庭)

忠男

私句

はる子

(和やかな家庭に変わる化粧する)

美恵子

沢山の乳もつブタは子だくさん

礼子

うっかりしていると仲の良い議會

美智子

(裏のあるシャンシャン会議無事に終え)

修光

(母豚の乳房とり合う子沢山)

義子

団欒へ猫も家族を主張する

美智子

(和やかな人生願ひ過疎に住む)

修光

明治生れ氣迫の中に和やかさ

義子

題「ガラス」――7月15日締切(9月号発表)

先

(欲のない暮しで過疎の和やかさ)

修光

和やかな祖父に明治の氣骨見る

方郎

究先 千583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房

鍋の湯気と和やかな顔寄っている

杏村

和やかな杜風もバブルまでのもの

方郎

題「ガラス」――7月15日締切(9月号発表)

先

(和やかな顔が集まる鍋の湯気)

杏村

和やかな杜風もバブルまでのもの

方郎

究先 千583 藤井寺市道明寺2丁目11-4

吉岡美房



原稿は川柳塔社事務所へお送りください
毎月25日締切・30句以内厳守。二百字詰
原稿用紙に清記をお願いします。編集部

川柳後楽吟社

從野 健一報

悪玉も他人に言えぬ胃の痛み
三振で終わる余生にしたいくない
水割りの中で理屈が溶けてくる
欲がない言ってる変な叱り方
時間です言われて気遣う血が走る
ふるさとに住み慣れ懐かしさを知らず
風邪ひいた猫へ謝る旅がえり
旅がしたくて紙人形は風を待つ
山菜も馬券も売って駅は春
鼻薬きいて正義を踏みつぶす
落ちた子が明るく振る舞うからいとし
減点の怖さ知ってる五十肩
年金の振り込み日をば数えおり
頑張れよ朝日がそとと背中押す
お花見のお誘いもなく手酌酒
金婚の舟が錆びてる弱ってる
今晩はデキです但し舶来の

草 風 哲 郎 柳 五 郎 博 友 淨 美 青 銅 拓 治 道 博 進 秋 月 正 秀 邦 秀 桃 風 金 吾 照 路

久世川柳クラブ

二宗 吟平報

三寒四温春が足踏みばかりする
梅の香にふと足止める万歩計
ばあちゃんの煮豆ふくらいいい句
八十路来て塩も砂糖も敵になり
ゆきずりの縁がとりもつある出合い
有り難い事に卒寿もいらぬ杖
生きている喜び天地より難う
衣食住足りて夕日より難う
階段の一步一歩に違う風
階段を上がるルンルンまだ達者
階段を上がるとローシンの音がする
有り難いシルバースhirt空けてあり
神棚に立てて満足そまつな松

川柳クラブわたの花

片上 英一報

土産話は雪の深さよ置きぐすり
一袋さげて土産の湿布薬
のりこえる薬がほしい五月病
萌える野へ薬草摘む手に祖母の勘
飲みもせぬ薬どきと十日分
薬から薬へ冬の日が昏れる
薬効を信じきってる妻の風邪
きんかんの咳止め孫に喜ばれ
まに合っていますアロエが庭にあり
自己暗示しながら薬飲む夫
ドクタミを陰干しにして春日和
意識して飲めば薬も馬鹿じゃない

シマ子 幸 枝 君 江 初 子 正 子 暁 子 ますみ 道 子 トシエ しのぶ 俊 子 みき子

薬屋に見舞い言われる回復期
まじないがほめられ薬横を向く
百薬の長だとババは上機嫌
ちよっぴりと話に薬味効かせとく
効きすぎる薬に悪い副作用
母からの宅配便に胃腸丸
足下に落した百円光ってる
父さんの光るおでこにあるゆとり
光る石教祖のそばで鎮座する
さらわれず浮くのがやつとこの婆婆は
春霞波音遠く峠越す
春あらし女が止める防波堤
傷心を包んで光るくにの海
ほんとうによく効きましたトリカブト

三幸川柳教室

三宅 保州報

啓蟄へ無沙汰お詫びの鍬入れる
大器晩成待つてはおれぬ掘り急ぎ
掘り出され貝は捨て身の蓋をする
穴掘って言いたいことは溜めておく
万年後地球を掘ればゴミの山
掘り下げた心に棲んでいた阿修羅
母さんと内緒話をする類っぺ
春盛り内緒話も弾け出る
神様に内緒の話一つ増え
マスコミが恋のタブーを覗き付ける
窓あけて内緒話を招き入れ
内緒事ふえて娘に春が来る
五百羅漢内緒でさんざめく

由 梨 かなめ 当 代 恵 子 一 郎 朱 夏 美 智 子 和 子 親 躋 町 子 利 治 公 子 千 秀

マサエ よしみ 伽名子 放正 雪ふみ かおり 迷貫 白柳 小なみ子 文仙

子報

清芳 留吉 千枝子 とよ子 暁子 シマ子 田実子 慶直子 弘直子 能子 光子 光子 あずき 欣史子 宣司

洋住 香

朱快 京竹 千幸春菊さ
坊風 幸功 子萌 暖 鳥 泉 枝 野 ち

撓保

荒 夕 曉
介 實 花 子

昭子 光太 鹿和子 澄子 ひかり

俺の土地削って道が広くなる
本当の味方は金のない男

川柳東大阪

森下

愛論報

主風
松風

霧晴れて普段の町の顔になる
霧流れ橋の向こうが点つてる

決断の悪さを霧に叱られる

冬枯れの野仏寂し露の中

鶴を折る平和を破るものはない

約束を破り小指が疼きだす

純真な子と約束は破れない

連敗で破れかぶれの塩を撒く

有頂天私の地図が行き止まる

父の書く地図はゴロ寝の夢にある

ハンドル人生男の道がまだつづく

米作りハンドル重い耕耘機

ハンドルも無くして器用な一輪車

一枚の地図から謎が解けてくる

志半ばに刺客の太刀に泣く

赤れも客から見ればまだ高い

関東弁しつくり肌に溶けぬ客

南大阪川柳会

金井

文秋報

空き缶を蹴って母なき子の涙
歩道橋で自分の影を見失う

セールスに尾を振り番犬にはなれぬ

控え目を失ってから嫁に波

お人好し不向きな役も引き受けて

萬の

作一郎
雀踊子
信治
章久
萬の

喉仏男の涙せき止める

美しい人だが妻に向いてない

老いの報恩般若心経声たかく

緩やかな口調厳しいことを言う

花鉄花の涙を見ないよう

失って大きい夫と思う日々

恩愛に遠い縁者の花手桶

どん底で恩に報いること思う

健康なままで老いたし緩やかに

緩やかに流れて河が病んでいる

もう妻の信用無くしてからみじめ

鏡台の前で不向きを確かめる

裏町の温い涙に立ち直る

子育てに必死で涸らす涙壺

花手桶報いることの空しさよ

寝たきりの溜める涙に嘘はない

緩やかな坂にもあった急カーブ

緩やかに凝りがほぐれる妻の酌

不向きかもしれない靴にする

四捨五入しても不向きな梓に居る

しあわせな日々報恩の経を読む

涙腺の弱い女のもらい泣き

頑張りが報われましたマイホーム

悲しい酒最後は涙で締めくくる

川柳塔わかやま吟社

宮口

克子報

光代

保州

幸

花鉄出来た逆さの空は青く澄む

井の中に大きな天狗棲んでいる

従いてくる影が迷路を出てこない

幸

寿美
智子

度

冬葉

頂留子

千里

文秋

秋子

柳宏子

二南

悟郎

柳伸

凡子

勝美

シメ子

トミ子

文子

千梢

新造

智久

清水

東雲

克子報

光代

保州

幸

花鉄出来た逆さの空は青く澄む

井の中に大きな天狗棲んでいる

従いてくる影が迷路を出てこない

幸

花鉄出来た逆さの空は青く澄む

井の中に大きな天狗棲んでいる

従いてくる影が迷路を出てこない

幸

母の日は亡母の形見の着物着る

権力の天狗ぶざまな落ちつぶり

泣きに来た膝に母の手温かい

母亡母今に気付いた親世音

マジシャンの帽子から夢溢れ出る

何もかも承知で母は折れて出る

うまく飛べないので天狗虚勢張る

子守唄母の音痴でよく眠り

母さんの傘は雨漏りなどしない

カーネーションゆつくり母を思い出す

私より母親らしい娘が誇り

ころころと母の前では笑う鬼

無人駅母の笑顔が待っている

ひよいときた天狗に娘さらわれた

幼稚園もつ小天狗がタクト振る

助太刀の母もいっしょに叱られる

鉄鍋も妻のたわしに負けて艶

歯の欠けた刃いつまで夢を抱く

時折は天狗になるも処世術

人生の醍醐味 迷路出るまでか

はびきの市民川柳会

櫻本

吐来報

善行をほめられた日の判がいり

二枚目が三枚目となるいいお酒

柳友の短冊さがる花見行

札束にまけて政治を見失い

桜見る足元スミレ踏まないで

言い訳を聞いている妻の薄笑い

花鉄おしげもなしに切る流儀

吐来

夏秋

辰子

伴子

三男
久弘
吞天
忠
鉄治
高夫
和成
正博
豊太
輝子
紀久子
公子
栄美子
稚代
英子
紀美女
好笑
寿子
登志代
克子
キミ子
吐来
夏秋
辰子
伴子
志洋
シマ子

カーテンをピンクに夫婦若かえる
怒らせて勝手にしろを待つ娘
散歩道アベックに遠慮しています
チョンガーの頃は弾んでいた日記
チョンガーにさよならをする櫓を握る
自己破算カード地獄に見る虚栄
耳よりな話に乗った生き地獄
更衣室壁に住んでる地獄耳
舌を抜く閻魔も呆れる水田町
うま過ぎる話に引かれ蟻地獄
奉加帳見栄と本音が思案する
寺の寄付極楽ゆきを保証する
出世頭を自認している寄付の額
じんわりと妻が昔を攻めてくる
じんわりと女切り札匂わせる
病人も春を感じた花吹雪
すき焼へ病人そっと起きてくる
病人の顔を見飽きたバラの花
ためるだけためた病人無口なり
病室のボスが元気で世話やきで
鍵一つチョンガーだけにある自由
チョンガーの夢汪洋と飄々と
ヒマラヤの雪に恋しているチョンガー

岩見川柳会

羽津川公乃報

妻と反省歩幅だんだん合って来る
反省がうず巻くときは海を見る
反省の顔でとことん掃除する
恋破れ捨てた女が夢に出る

孝由 睦子 希久代 たけし

利武

晋

昭平

ダン吉

たかし

たけし

かつみ

りつえ

敏

昇

泰子

敦子

絢子

昭子

重人

ざいち

繁男

志津江

与呂志

美代子

悦子

一屯

みつこ

川柳塔唐津支部

久保

正敏報

粗だけを捜して今も無二の友
死にたいと言いつつ病院通いする
顔形少しずれてお人善し
澄みし目に涙浮かべた別れ詩
初雛も孫も同じで十五歳
あなたとならたどえ火の中水の中
ハンカチを貰い友情まだ続き
標札も少し古びてきたわが家
舞踊練習夫は草を刈っている
天の邪鬼親の意見も右左
オムライスでつかい腹に赤い帯
定年日煙草の灰が長く伸び

喜与志 嘉津江 美代子 公乃 芳江 善幸 單車 美恵子 はお 大漁 照女 きみ子 公弘 忠良 紀一 治幸 青琴 喜久亭 ミチ子 義美 ちよ ふさ子 旭恒 幸夫 四郎

男と女の愚痴を聞いているコップ酒
泥棒の土産が庭においてある
乗り降りに手を添えてやるバスツアー
チューリップみんな咲いたよ一坪に
外圧と内圧に耐え定年だ
天網が大魚掬った民の声

川柳塔鹿野みか月

土橋

螢報

議會答弁弁論に衣せぬようにせよ
酒たばこ止めるテストを繰り返す
また明日があるから今日の竹を踏む
春ですわワイパーウロチョロ踊ってる
戦争の苦勞骨身にしみている
私の人生ドラマ綴りたい
音信不通元氣印の句を送る
子は命踏まねばならぬ踏絵ふむ
殿さまはいたずら花を踏んで行く
連休に五竿タンスの整理する
荒れた海わたしの心そのままに
ふるさとの浜侵食に海は吠え
月五円の学費つづけた母でした
降り続く雨に背骨がかゆくなる
骨までも愛してますとお世辞言う
にんげんの道を踏み外さぬように
女故に男の海に抱かれる
骨埋めるその角隠したたはす
おばあさんの作るちまきは芸術品
ハイヒールに踏まれた痕がまだ消えぬ
老骨に鞭打ち墨をすっている

孝由 黙光 八重子 明美 静枝 幸恵 くに子 芙美 弘子 房子 公子 汲香 和子 きみ子 隆風 睦子 節子 喜与志

どぶ板を踏んでも生きる男なり
踏む石が滑って次に跳び越せぬ
神さまの過労死なさる日が怖い
麦を踏むように福運育ててる
母の日のカーネーションに骨休め
生意気ですが白い骨には憧れる
五寸釘ほどの長さの鬱を打つ
思ひ出を踏んで行ったのは男
働いて遊ぶ五月の八連休

倉吉川柳会

渡辺

独歩報

母の日はおいと呼ぶのを遠慮する
煙たいがいざと言う時役にたつ
汗かいて鳥肌たてて生きている
大勢の中だ煙たい奴もいる
母の日に父はキッチン引き受ける
美しい色の煙になるつもり
あごひもにいつも小馬鹿にされて
ママさんは上手に紐を客につけ
母の日は父はスパー回りする
森英恵のハンカチ汗はふきません
真つ黒だ極悪人の煙だろ
噴煙が見事だと言う他所の人
母の日を忘れ父さん飲んで来た
汗かいて空鉄砲をうっている
母の日に愛猫ミミがお産する
甲斐性なし女の紐にぶらさがる
母の日だせて朝寝をさせておく
冷や汗をかいた昔の人に逢う

公弘 実満 一京 しげる 智恵子 諷人 富恵 盛桜 螢 柳風 碧水 石花菜 秋草 幸子 完司 洋 寿朗 独歩 御前 節子 よしえ 和枝 とみお 加代子 康子 康子 美智子

いい汗をかこう地球は五月晴れ
てのひらでするんと顔の汗を拭く
細いのを私をくくりつける紐
男結びの紐へぬくもり感じない
皮靴の紐を結んでくれますか

尼崎小園川柳会

立谷勇次郎報

父さんの古里の空着かった
師の句碑としばらく語る青い空
追憶の刻したたかな空の蒼
黄砂降る向うに疼くいくさの傷
少し離れて父の背を見て歩く
廃線を歩くと語る今昔
最愛の妻がとなりて軒かく
最愛の女と風の中にいる
最愛のベットのさがす落し物
最愛の妻に感謝のカーネーション

富柳会

池 森子報

胃袋がおでん恋しい回り道
世界平和回り道でもいいですよ
目がこえてお見合い重ね回り道
家計簿のピンチ母親泣かされる
ほめ言葉連ねてそつと腹を読む
回り道しても離れぬ二人の手
一言がばくを大きくしてくれた
あの世へは直行させて回り道
人生双六回り道でも終り吉
当然と回り道指す工事中

秋女 苦句 京子 雄々 螢 夢之助 弘治 鹿太 定人 紫香 幸代 石舟 歌子 フクヨ 勇次郎 和夫 宗一 二子 花子 登子 絹子 昭水 トシェ 伊勇 勇

あの花が見たいばっかり回り道
一言が殺意に変わる五月闇
顔色を読んで本音をほかしとく
回り道そこから坂がきつくなる
一言が矢とも槍ともなる諷刺
追込みへ敵もピンチを連呼する
これからに賭けていそいそ回り道
社のピンチ私の椅子がゆれている
一言も喋らず置いて来た土産
自我を捨てながら女の回り道

川柳岩出

小倉

アサ報

すれ違う事もなかった金と運
用心をしすぎて翔べぬ春のうつ
政争の金権マクマ噴火する
ピリオドをつつた夫婦のすれ違い
すれ違い夫婦のはずの子沢山
すれ違う夫婦の仲が好い
すれ違い夫婦くらしの妥協劇
きつかけで政治改革出来るかな
あれこれと用心すぎて拂らず
ご用心電話の奥の甘い声
すれ違うシャネル五番の深呼吸
政治家に義理で入れるな鬼になれ
用心を重ね重ねてこけている
万札を見れば用心深くなり
お互いに底い合いつつする用心
政治家の風呂敷世界包み込み
酔ったかな妻は用心棒になつてくれ

智久 美代子 二二三 透太 美房 柳太 維久子 花梢 文次 森子 和子 精男 悦子 春子 紳一郎 英子 綾子 愛子 正直 保子 正義 達子 幸子 千鶴子 昌子 瑞穂 忠雄

目標とすれ違うまま独楽ねすみ

与呂志

はたる川柳同好会

井上

直次報

母の目に白髪 of 社長まだ子供

博史

長男を叱れば次男共に泣き

眞郎

同権になり子供を生まぬ才女が増え

吉太郎

腕白がこよなく愛す赤トンボ

一笛

通信簿つまひ褒め方子にやる気

純次

とんかつと言ふ名を子豚まだ知らぬ

喜美子

ままごとの子供旨そにビール飲む

しずえ

天婦羅の揚げ具合が良い天気

明光

五月雨の晴れ間が欲しく本能寺

馬洗

濡衣が晴れば元のいい隣人

英子

五月晴れ心うきうき電話する

恭子

晴ればれと傘寿の顔も役者する

敞子

晴れ曇り病気が知らせてくれると言ふ

昭子

抜け殻のわたしに青い空がある

ゆき子

ペンよりも剣また強くなる気配

方郎

ペンだこがチャンスくれた二度の職

直次

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

川柳塔きやらばく

政岡日枝子報

底抜けに明るい友に助けられ

保子

淵の底河童とじやんけんして帰る

天雀

コップの底に私をのぞく眼見る

晶子

春うらら底の声を聞く眼見る

ふみ

よみがえる音が庭から聞こえない

富美子

孫が生れて母の難壇よみがえる

千春

花のいのち甦らせた水の愛

玲子

栄転でよみがえるはずだった椅子

高代

いためつけ蘇れとはなあ地球
大勢の声を頼りによみがえる

ゆき
亜弥

上淀の騒ぎロマンがよみがえる

恵子

シャンソンを聴く越路吹雪がよみがえる

夕子

よみがえる姉とかこんだ花の眞座

八重子

目をつむるとある情景がよみがえる

松子

不況風人情話よみがえる

花子

絹擦れの音に優しさよみがえる

てい子

れんげ畑念をつないでよみがえる

日枝子

なだれ人よみがえらせた牛舎の灯

寿々子

雪とけて裸木たちは駆けりだす

荒介

一樹蘇生天のちからを頂いて

千代

古簾筒使えば亡父がよみがえる

瑞枝

川柳ささやま社

平野百合子報

あの時に手ぶらで寄れば済んでいた

とよ子

朝市へ人の情けも買つて来る

恵美

明け渡す椅子を正して手を洗う

つや子

招かれた椅子に冷たい風が吹く

靖子

終点のない椅子に乗る長い旅

とみ子

前進の椅子へ二の矢を準備する

百合子

招かざる各にも椅子が一つ要り

市三

真ん中の椅子できれいな夢をみる

和子

白い糸ゆつくり婚家の色になる

富美

ばあちゃんが座ると鳩が来るベンチ

芳郎

皺の手が編む執念の毛糸玉

テル

寄せ書きに命をかけて来た軍靴

ヒサ子

喝采へ命をかけた長い道

可住

子が語る未来に父母の椅子がない

貞子

京都塔の会

松川 杜的報

母でしたときめき気がつかないように

葉子

ときめきをそつと枕に沈めよう

磔

ときめきの種火は今も消さず持つ

英一

ときめいて生きたし灰になる日まで

諷云児

美しい声だなきつと美女だらう

正坊

何やかや言つて今年も行く花見

求芽

何気ないしぐさ女になった孫

修水

咲く夢があるから花を抱いている

栄

ミモザ咲くベンチに泣けりきみは人妻

武庫坊

野の花も咲けば誰かが摘みにくる

紫香

咲いて良し散つて又よし山桜

キク子

返り咲くチャンス無いまま定年期

百合子

残像に節目くぐつて来た誇り

英子

交替の節目打たれた逆転打

白溪子

日本史の節目節目に残酷史

萬的

笹竹がわたしの節目かきまわす

石舟

傘寿とや節目の歩み整える

メ女

土踏ます男の節目知っている

芳子

真相の何かも知らず啼くカラス

巨詩

月下美人咲いた咲いたと話だけ

福子

幾度か咲かして散つた放浪記

ただし

さわやかな別れに咲いた白い花

真柳

節目から春の息吹きに出る新芽

庸佑

起死回生の節目に賭けている

倫子

節目から節目へ僕のマイベース

飛鳥

香煙に浮く顔ひととき過去が澄む

達子

眞産敷いてあと幾たびの花の下
思い出は逢いたい人の顔ばかり
政界のボス カネの亡者になりはてて

打吹川柳会 奥谷 弘朗報

わらべ歌繰返しては春を待つ
安眠の出来る枕が実家にある
ランドセル背負って二十一世紀
鮮やかな舞で今年の幕があき
罪抱いて白になれよと雪積る
孫の目にはるか昔の光見る
百生きるはるかな計をたてている
陽の光阻む隣の二階建て
陽光に弾みこんべが種を蒔く
陽光が合格の子に降りそそぐ
陽光をおそれて地下へひそむ人
神様にもらった命捨てられぬ
陽光を浴びても溶けぬしわん坊
ブランコに揺れて安らぐ城に老い
城石は牛の力をしりつくす
共稼ぎ女の守る城はない
砂の城崩れて嘘が顔を出し
啓蟄をせきたてている陽光だ
わだつみは帰る城なく雲に散る
一城の主となつて首洗う
袴を脱ぐ三畳の城がある
城山の方から臭う一揆の血
借金ば借金花見は花見だ
死ぬるまで米は一粒でも拾う

年代 杜的 水客
陽光に私の影が生きのびる
おんな離して遙かにおくと美しい
立板に水でつけ入る隙がない

西宮北口川柳会 丸山よし津報

寿満湖 よし江
神明しすれば恐妻家の家庭
大切な一粒種が病気がち
未知数の可能性ある小さい種
万葉集山紫水明ちりばめて
見る紫着る紫の落差かな
自立するミヤコワスレと対話する
紫の痣が内緒を喋り出す
紫のいろ紙で折る鬼の面
タイムスリップそこに私の座る椅子
招かれた本家に座る順がある
無口でも父が座ると座がしまる
なれそめは市電の席をゆずられて
お茶席の帰りコーヒー店に寄る
どう座り直してみても父の椅子
逆縁の淋しさを知らずだこ
窓際に座ると鼻毛よく伸びる
万札を出す度偽札意識する
季節感偽り秋の花が咲く
偽物がとても綺麗に出来ている
物真似をされて人氣が出始める
持つ人が持てばコピーと判らない
凄いの雪舟の絵がある露天商
偽者が来てうまいこと言うて去に
偽りの言葉が甘くひびく時

螢 とみお
隊列を組むと元氣が出るわたし
耐え忍ぶ事に根差した風媒花
言い足らぬ言葉に妻が助け舟
合掌の指に我欲はなかつたか
温泉の湯気の向うにあるドラマ
熱帯魚だけが動いている書齋

川柳塔まつえ吟社 恒松 町紅報

歌子 トミエ
現役を降りると男粗大ゴミ
現役を辞退僻地の子と生きる
現役を去る日机を拭いておく
現役が背中丸めてぐちつてる
まかせとけまだ現役の老父の鍬
現役を退いて背広に張りがない
世渡りの坂がゆるめになつてくる
書店には世渡り術の本もある
世渡りに少しは慣れた水たまり
世渡りの一つうちの子叱つとき
世渡りのコツは誰にも聞かれない
世渡りを老母に聞いたらマイペース
青い鳥もわたくしも方向音痴
手にすると色あせていく青い鳥
青い鳥笑い袋の中にいた
酸欠の街を逃げ出す青い鳥
ホーホケキョと鳴いてしまった青い鳥
年金のなかで見付けた青い鳥
才媛に十二単衣の日が近い
才女でも寝惚けまなこは変らない
味噌汁がうまくて才女ならいいね

きつと才女だらう前を行く日傘
才媛の陰の涙をみてしまつ
時たまにのぼせることもある才女
無人駅花に会釈を返される
停車場と言う人も消え村の駅
雑踏の駅で出口を間違える
駅裏の赤提灯が呼びとめる
若者が果立つと寒い無人駅
人混みの駅に疲れた旅の靴

城北川柳会

吐田

公一報

一步でも歩ける喜び生き還り
目も鼻もどこかおどけた花粉症
お世辞より厳しい愛の鞭がよい
結婚式世辞また世辞の披露宴
地団駄を踏んでも野党攻めきれず
休日の子に攻められて動物園
弔辞聞く遺影が笑いそんな世辞
先輩がまぶしく見える新入社
伯父 父に恥じない技で綱取りに
寄付の時だけ先輩と寄ってくる
唇を盗んだ罪を攻められる
美辞麗句最後にはろつと出た本音
階段が苦手で天国昇れまい
傷口を洗って痛み軽くなり
一病息災少うし気ままだしくなる
先輩へ気配りすぎてうとまれる
どうにでもなれと捨て種芽ぶき出す
井の蛙大海に出て愚を悟る

太泡 文子 草丘 芳枝 清志 静恵 静江 与根一 叮紅 寿美礼 昭子 八重子 行子 秀夫 千世子 史風 だし 政子 倫子 静子 あい子 ふみ 満津子 達子 久留美 登美子 白峰

抜かれても亀は自分を知っている
枯枝と見せて炎を抱く芽木
狡いこと教えてくれたのも大人
酸っぱさの加減に迷う嫁姑
世辞一つ言えぬ男の固い椅子

わかあゆ川柳会

松本はるみ報

手の内は見せぬ女の意地がある
手の内を知らされあほらしうなってきた
手の内がわからないから靴をはく
ゼロからの出発大きな輪を描き
ゼロだから越される不安はありません
水いらず財布のことは忘れてた
手の内もつきたか地球熱を出す
来し方の労苦農婦の背の線
ふりむいてほしいと思う広い背な
残高はゼロで世間も怖くない
背伸びしてポブラは風にさからわず

川柳ねやがわ

高田 博泉報

顔とよく相談したカイヤリング
ホロホロと鳩が啼いてる闇魔堂
先輩の顔で姉学校へつれてゆき
スタートへ終点のない汽車に乗る
ご機嫌がよくても悪くても酒
相談のつて和んだお茶にする
真新しい辞書で法説く古狸
内定の取消しスタートから遅れ
贅沢が産んで流行った使い捨て

典子 春蘭 柳影 頂留子 公一 鈴江 かつ子 聖子 好栄 ちよえ 英子 はるみ 歳栄 博利 清泉 白汀 英明 弘直 シマ子 欣史子 洋風 波留吉 竜児 とし子

逃げ水のような流行追っている
腹決めて相談らしい顔で来る
辞書を手になくわえているエネルギー
辞書積み上げて頭の中が空になる
追いつける自信スタートあわてない
平凡なスタート今も群の中
流行の先取り春の街歩く
流行を追うほど私アスじゃない
青春切符琵琶湖めぐりを思い立つ
散る花の余韻に縋る片想い
一人じめ花のトンネル自転車
娘の相談来べきものがきた思い
花ざかり机の辞書があくびする
看取り妻世の流行に縁もなし
果立つ子の一点曇りない瞳
温もりは亡父の手垢のついた辞書
流行の歳などないと思う若さ
カッパルのスタートばたん掛け違い
追憶に浸る流行のひと昔
夜九時にきつちりコーヒーくる書斎
通り抜け偽札犯も通り抜け

尼崎尾浜川柳会

前田いわお報

七万年昔読み取る考古学
小銭での大きな願い鈴にこめ
姑の気持が分かる嫁が来て
花咲いて見知らぬ人と話す庭
母の日に罪ほろぼしのカーネション
八の字の眉が出してる人の好き

高栄 一芳 英壬子 冬葉 庸佑 黎之助 一途 一鬼 恵子 一八十八 一笑 時弘 君子 あやめ 光子 速水 頂留子 良三 菜月 度 薫風 いわお 末貞一 よしゑ まさ 勇次郎 澄子

床に臥し春の盛りをおいとかれ
またしても騒ぎの種をまく男
風の声地の声村は活気付く
自惚れの声を背中で聞いている
孫の声暫らく聴けぬバスポート
祭り太鼓に河内男の血が騒ぐ
銀行を出て札束どんな風にあう
札束に縁遠く住む裏長屋
札束を積んで妥協の糸を引く
札束にもう飽きて来た女行員

堺川柳会

河内

月子報

故里に寝て見て広し隙間風
突然に旅の途中で気が変わる
隙のない人で些か過労気味
怪しんで心で詫げる置き忘れ
一瞬の隙にのそいてきた地獄
怪しいと睨んだ奴に怪しまれ
結婚を口にしてから隙間風
隙のない人と話が弾まない
森を出る男に踏絵置いてある
隙のないおしゃれしてゆく同窓会
ママの隙狙って兄に叩かれる
おほかで隙間だらけの君が好き
割り込める隙見逃さぬでかい尻
迷路から抜ける出口はきつとある
信心の母に迷いの隙がない
風とおしほどの隙間をあけておく
息抜きの隙間 大事にしています

昌子 夢之助 鹿太 六浦 弘治 石舟 すみ 敏之 正治 紫香 春蘭 道胤 美代子 昭子 花梢 勝晴 文時 紀美女 寿美 ひで 富士子 泰子 頂留子 小雪 半銭 かりん 楓

しあわせになって笑顔も隙だらけ
出る幕はちゃんと知ってるおばあちゃん
溜息が出るほど長い夜のうつ
突然に浮気したらと妻が言う
遠出する誘いに揺れる膝頭
隙みせて貴方の出方待ってます
万全に見えた備えに針の穴
ちらちらと母性くすぐる隙を見せ
値切るのが上手な友とショッピング
改札を出ると乳房が母になる
独身の顔して家を出る主人
値札など見ずに買物してみたい
お互いの財布を当てにお買物

翠洋会

渡部さと美報

ドラフト一位期待するほど働かず
親のエゴ幼稚園から子に期待
押売りが残していった捨て科白
目として悟ったようなひるの風呂
期待株バブルはじけて塩漬けに
悟りなど遠い世界でございます
期待などせぬ末つ子に養われ
使いつて文化悟れぬままに老母
こりもせず期待して買う宝籤
慎しみのタガがはずれて捨てぜりふ
期待せぬように蛙の子は蛙
悟ってもなおぶらんこは揺れやまず
濁り水のもんで砂漠の子は育つ
失って自分に過ぎた友と知る

慧梢 文子 磯子 福一 満州 菜々 晋 一二三 途子 美子 東雲 みずき 摩耶 東雲 恭昌 綾子 兼治郎 拓生 叡子 久峰 さと美 光子 登志子 希久子 正坊 宏子 ひろ子

川柳藤井寺

高田美代子報

悟ったらこんな形になるグルマ
夕焼けがきれいな明日こそいいことが
ネクタイを締め直してある期待
悟るのは極に入ってからでよい
子のためにときには苦い水も飲む
一杯の水を下さいきのこ雲
三面鏡どう写しても丸い顔
ママの名はつきり「オイ」思ってた
カラオケで消せる憂さならしたなもの
それなりの勝算はある福袋
春四月祝儀袋が走り出す
少しづつ繕っている知恵袋
嘘いっぱい詰めた袋がほころびる
母の愛入れる袋がみつからぬ
ばあちゃんにそつと借りてる知恵袋
気まぐれな性格だけが父に似る
気まぐれな女を鬼にねらわれる
気まぐれな恋に追われる春の宵
気まぐれの花東誤解なきように
気まぐれな蝶をタンポポ諦めず
気まぐれなひと言木偶が狂い出す
気まぐれにちりめんじやこを選っている
気まぐれな女と渡る丸木橋
これ孫よ実物それほどでかくない
天井の見本のえびはびんとはね
みやげ屋の見本の味をはめてあげ
見本など無いからうまい惣菜屋
蛙 みつ子 正雄 佳秋 楓楽 鬼遊 トミ子 たかし 志洋 三夫 昭一 吸江 悦子 キミ子 ケイ子 利武 和子 美房 美代子 しげお 透太 敬一 繁男 末一 与呂志

ウインドの見本が熱い吐息さく見本だけとつて注文せずじまい見本から会社の顔が見えてくるもつ少し濃くも薄くも見本です泣き黒子描いて見本の貌となる一豊の妻を見本に貯めている戦争は悲惨日本がよい見本ひとり住むサンプル程の米をとき

川柳若葉の会(前月分) 宮崎シマ子報

新緑へ錫物民俗資料館

娘と孫はべったり婿とのだけは客客室のひそひそ話気にかかり通勤車これでお客と言えましか来客と言うには静か姉の部屋手をあげて乗客となる里のバス客が客呼んで小さな喫茶店美味安価千客万来 来々軒珍客は七つ釘の生き残り好かん人押しの一手に流される人肌が恋しいような春の雨王仁公園九州なまりの人に会う旅心みどりの雨に洗われる

川柳大坂 高須賀金太報

春うらら眠ってしまった降車駅すれ違い女が匂う春の風もつ五十まだ五十ですローン攻め身障のハードル低くする工夫

寿美 みのる 修六 敦子 三郎 政代 智久 治子

薫風 正晴 欣史子 田実子 慶子 香住 あずき 英一 清芝

晚子 弘直 シマ子 光子

哲流 亮太 柳弘 我勝

出る杭に烈しい風の返り討ち年金で食えず老体まだ酷使わだつみの悲劇再びひたひたとワープロで心通わすのがにぶい夢いっぱい孕んで孫の鯉のぼり出戻りを二人抱えている易者塩漬けの株を抱えて出る吐息右派と左派抱えてるからややこしい爆弾を抱えてくすり持ち歩く素顔です仮装行列の中の顔仮装した鏡で女喋りだし仮装してあなたあなたを消せますか春闘に生きるさけびをぶつつける平成不況春闘紳士的妥協立つ気配闘志だんだん盛り上がり闘争心顔ではないぞブルドッグ闘えば負けそう相手は男前

川柳塔みちのく

小寺 花菱報

煩惱の結び目ほどく朝桜夜桜に薬人形打つ雪おんな美を散らす桜に狂う風の恋桜 桜タイムカプセル風に会ううぐいすのひと声ごとに散るさくら風葬のまつた中の花吹雪駅ホーム悲喜こもごもの分かれ道ロケットに切られた首が駅に来る婚約の記者会見とやらしてみたい青い鳥やと掴んだ御婚約

希久志 しげお 美津留 雅果 洛醉 本蔭棒 鉄心 まつお 笑風 青道 与呂志 重人 一步 比呂志 天平 金太

花匠 生恵子 一路 ツネ 千加子 五楽庵 光子 黙人 和香子 善保

花匠 生恵子 一路 ツネ 千加子 五楽庵 光子 黙人 和香子 善保

花匠 生恵子 一路 ツネ 千加子 五楽庵 光子 黙人 和香子 善保

長者にも買えない婚約指輪です今だから婚約相手が気になるの婚約に喜んでなぞいられない婚約で変わり結婚でまた変わり襟足を覗いた酒がまたも酔う古女房いい女のまま齢をとり金婚の相手は女とは見えす日本の芸術がある女風呂女対女 女が負けている

川柳塔とつとり

武田 帆雀報

咲く花を心の中に移植するひっそりと高嶺に咲いた百合寂し咲き染めた乙女の肌はほんのりと咲かんでも咲かせてみたい老いの恋桜咲く通院止めて花見する關魂を球児が咲かす甲子園チュエリッアップ咲いてドレミファ歌い出す咲く花へ蝶が墓前で舞を舞う佐治谷にアホウ話の花が咲く薫風に琴の音聞こゆ城下町城下町どこか武将の音がする主の夢見ながら城下町に棲む城下街区画整理が儘ならず城下町二度の災難知っている城下町見知らぬ人もおじぎする庭を掃くことで始まる城下町封建性がまだまだ強い城下町影法師僕の栄転笑うなよ

雅城 正徳 朱圃 一光 花峰 堅二 井蛙 叶

行男 銀嶺 粗粒 楊芝 一木 喬水 一京 輪多朗 圭一郎 明美 多可志 公弘 のりゆき しげる 大漁 艶子 螢 孝由

意地悪い風が桜をもう散らす
ライバルの自慢は別の顔で聞く
亡父の辞書アンダーラインがまだ解けず
越後生まれの妻に納豆攻めに会う
花冷えにひさごの紐が踊らない
着てみたい色が溢れて街は春

尼崎いくしま川柳会 春城 年代報

前借りで連休過ぎず修羅もある
連休へ挑む財布が軽すぎる
連休のタクトは妻が振りたがる
連休のプランが歳にそぐわない
夕焼けの一本杉に過疎暮れる
風と雲昔話の好きな杉
もの言わぬ杉が後世喋り出す
杉の木の高さと亡父の樹の高さ
杉の子は筏に組まれ旅に出る
一本杉に吊ってあるのは僕の愚痴
でかい夢もって杉の子耐えている
糸杉の道でゴツホの星に遭う
目から鼻に抜ける器量を煙たがり
ライバルに天狗の鼻が狙われる
低い鼻男の嘘を嗅ぎ分ける
ときどきは妻をあざむくだんご鼻
ナツメロに耳傾けて夢をみる
苦勞人 耳傾ける話する
物差しで額の傾き直してる
右脳の傾き少しずつ確か
刺のあるバラに傾くのも男

庸 佐 佳 秋 太 茂 津 静 江 諷 云 児
正 一 園 歩 二 南 伊 三 郎 昌 子 佳 女 武 庫 坊 英 子 正 坊 澄 子 す み 風 云 児 芳 子 フ ク 子 吉 太 郎 正 子 年 代 柳 影

母の日は守れと父の期待感
読み書きが今さら楽しい日々
風変わりなビル見て回る環状線
掌に乗せた顎が奥の手考える
吊橋の渡りきるまで笑えない
無心したとたんに言葉改まる
連休を憚るように逃げてみる
アスピリン無いかと祖父が風邪を引き
老女医と話が合うた聴診器

豊中もくせい川柳会 田中 正坊報

決心がつかないままに行き戻り
無農薬印のために土を付け
土器を掘る名もなき民の涙をも
夕焼け小焼け観音さまに今日の無事
観音の伏し目に慈悲をためている
観音の頬かあさんの線が似る
逆境に観音様と目が出会う
惚れ切って観音の掌に乗せられる
観音もコレクションになる美術館
透き間風 読経が流れる観音寺
同病者に逢うとおろおろする私
キッチンでおろおろしてる妻の留守
おろおろとしただけ水を吞んでいる
犬もわたしも緑に染まる散歩道
五月晴れ傘寿の母も缶ビール
自分だけかばう単車の鉄かぶと
種明かしすれば何でもなし話
あした咲く花に迷う花鏡

修 水 尚 利 萬 的 石 舟 真 柳 白 漢 子 正 治 鹿 太 紫 香 英 子 吉 太 郎 蕪 蕉 落 児 石 舟 武 庫 坊 悟 郎 明 光 一 笛 つ え 子 慶 子 千 子 け お き 子 博 史 福 一 正 坊 女 女

茗人忌川柳大会

とき 8月29日(日)

午前9時開場・同10時半開会

ところ ホテル・ニューいなば

(鳥取市永楽温泉町403)

☎0857-2718181

おはなし

橘 高 薫 風

兼題(各題2句)

「風」 川島諷云児選

「刻む」 河内 月子選

「穏やか」 久家代仕男選

「袋」 小林 妻子選

「流れる」 八木 千代選

「墨」 但見石花菜選

「乾杯」 小林由多香選

締切 午前11時半

会費 3500円(作品集・懇親会含む)

投稿料 10000円(作品集呈)

◎投句は8月15日までにうみなり川柳会へ

〒680 鳥取市相生町3丁目204(森田熊生方)

うみなり川柳会

灯台の夕陽に招かれて

尼緑之助句碑建立二十周年記念大会

出雲路の旅

木 本 朱 夏

「やっぱりレインコートがいるわね」と、みつ子さんがつぶやいた。五月二十二日の土曜日、朝からあいにくの雨である。大阪組の集合場所の梅田三番街バスセンターへ、幸さんが差入れのお菓子とともに見送りに来られる。

午前九時五十分、出雲路めざして高速バスはスタート。早々と缶ビールにおつまみが配られる。「句を作らなくてもいいから楽だねえ」「ふつうだとああでもない、こうでもない大変よ」と、車中は学生時代に戻ったように遠足気分である。

午後四時、雨に煙る出雲に到着。松本文子さんたちがお出迎えして下さいさる。出雲ドーム、島根ワイネリー、出雲大社を見学しながら日御碕の眺瀾荘へ（島根ワイネリーではたつぷりとワインを試飲し、すっかりほろ酔い気分のまま、出雲大社へお参りしてしまっただ!!）。

雨も上がって夕刻六時、草丘さんが山で切ってきたというタニウツギと百合が飾られた大広間で前夜祭のスタートとなる。久家代仕男いずも川柳会会長の挨拶に続き、野村大茂津氏の乾杯の音頭。参加者全員の十秒間ずつの自己紹介とすすみ、にぎやかに会食が始まる。

会場のあちこちで「やあ、ごぶさたです」「ようこそ」「お世話になります」となごやかに宴はすすみ、藤東清子さんの「夫婦川」のカラオケから座は一段と盛り上がる。昭和



句碑を背にして記念撮影

四十八年五月十三日緑之助氏の句碑建立の際の記念写真が回覧され、二十年の歳月の重さがひしひしと胸に迫ってくる。

吉岡きみえさんの「安来節」、松本文子さんの「関の五本松」が大いに座を湧かせ、午後七時四十分、小林由多香氏のバンザイ三唱でめでたく前夜祭の第一部はお開きとなった。ひきつづき二次会は、有志一同により近くの民宿ということで、表に出てマイクロボスを待つ。東洋一という日御碕の灯台がまるで女王様のように気高く白く美しく夜空にそ

びえ立ち、私はしばらく茫然と見とれてしまった。二次会の民宿では目の下、ン尺(?)という美事なブリの活造りに歓待され、完司さん、射月芳さんたちのカラオケもにぎやかに出雲の夜は更けていった。

記念川柳大会

板垣草丘

前日の夕方、川柳塔社のご一行と地元勢が眺瀾荘で前夜祭を開き、出席者五十名が自己紹介、誌上での名前とお顔を確かめ合つて親睦を深めたが、五月二十三日の当日は夜来の雨もやんで晴天となり、お泊りの方、バスを乗り継いで着いたばかりの方々がそれぞれ日御碕神社に参拝された。乱舞するウミネコの声を聞きながら遊歩道を散策し、句碑を囲んで記念撮影をしたり、東洋一の灯台に登ったりして会場へ戻られた。大会の出席者は除幕式以来二十年ぶりの方、初めての方々総勢百二十名、午前十一時に尼れいじ氏の司会で開会、主催者あいさつの久家代仕男会長が来し方を振り返り、多くの方々のご支援に謝意を述べ、句碑建立委員長原独仙氏を偲んだ。

来賓祝辞で大社町会議員の山根氏は、「こ

の句碑は年間三百万人の観光客に親しまれている」と話されたが、同氏は二十年前、役場で句碑建立を管轄する職におられ、直接ご指導頂いた方だけに懐かしく、有難く聞き入った。続いてあいさつされた黒川紫香副主幹は尼緑之助師と同年で丁未らしく、穏やかに祝辞を述べられ、おはなしの西田柳宏子副理事長は、「川柳に打ち込める環境を作り、基本を忘れず、新奇を追わず、自分の句を作ろう」と切々と訴えられた。

午後からいよいよ披露に入つたが、遠来の



盛会の記念大会場

方の呼名が多く大きく、いずも勢は押され氣味で、最後の「灯台」の選者の西尾葉主幹は「川柳の絆は温かい。これを大切にしたい」と述べ、「出雲弁と〇〇弁で話したら、さぞ面白からう」との御説に会場がドツと湧いた。祝宴では久しぶりの方、初めての方々とのみ交わり、話し足りぬまま、夕陽に染まる灯台を眺めて別れを告げた。各題の天位句は次のとおり。

「青い」

久家代仕男選

千し魚は海より深い青になる 金築 雨字

「建つ」

中川 幸一選

ふる里の絵に一色を添える句碑 浜野 肇

「裸」

恒松 町紅選

裸になってやつと人間見えてくる 松本文子

「惜しむ」

小林由多香選

虹の橋渡りそこねた日を惜しむ 山根ゆき子

「道」

小出 智子選

人の道というものが立ち止まる

「夕陽」

松本 文子

蜩舟夕陽を背に父還る

野村茂津選

「発展」

黒田 桜水

発展か命が原子発電所

柴田 午朗選

「灯台」

宮園射月芳

灯台は直立不動を崩さない

西尾 栗選

本社 六月句会

六月七日(月)午後五時半

メNZフアツションセンター

皇太子の結婚の儀を明後日にひかえた六月句会は、百一名の出席者全員に、このほど西尾栗主幹が上梓された『水鶏庵こらむ散歩』が贈られ、うれしい句会となる。

主役の主幹が所用による遅刻があつたのをはじめとして、いつものメンバーに番狂わせが生じた。司会、記録が初めての顔ぶれになつたため、フレッシュな雰囲気になつた。

時間過ぎの、西田柳宏子氏の短い「おはなし」は、ほどなくかけつけた主幹と交代となり、例によつてユーモアたっぷり本の紹介。今すぐにも手許の本を上げて読みたい気分。にさせられるが、披露がはじまる。

席題の選は「都大路」主幹の奥山晴生氏、八月の創立十五周年記念大会の紹介があつた。初出席はなし。

月間賞は田中薫氏(尼崎市)に輝く。

(司会)朱夏(受付)千歩・いわゑ

(記録)タン吉・いわゑ (清記)楓楽

席題「祝辞」 奥山晴生選

鹿島立ち無口な父のおめでとつ
おめでとつその一言でよい祝辞
悪友の祝辞が宴をなごませる
悪友の祝辞だんだん怖くなる
長々の祝辞 料理が冷めてます
一生を祝辞に縁のないすめ
歯の浮くような祝辞きいてる冷えた皿
飛行機で書いてのぞみで去ぬ祝辞
いい祝辞もらつたわりにすぐ別れ
祝辞が続く花束が重くなる
サービスの過ぎた祝辞はほめごろし
花嫁の父うつむいて聞く祝辞
また一人ホープがふえた社の祝辞
だしぬけの祝辞トイレで考える
のんびりと祝辞もろつている傘寿
それなりに誉め方もある披露宴
はなむけの祝辞きれいに嘘を盛る
しやあしやあと昔のおんなに祝辞いう
花嫁も思わず苦笑する祝辞
秒読みへ日本列島満ちてくる
代読の祝辞 欠伸をかみ殺す
嘘すこし混ぜて祝辞を練り上げる
再婚の祝辞で少し言い難い
あの人が来たので祝辞また頼む
ほんとこの祝辞 茶漬けの音にある
祝辞聞く清少納言の髭が揺れ
祝辞ではほめ上げ社では叱りつけ

柳 伸
保 州
い わ ゑ
美 房
欣 史
森 子
た ず 子
し げ 子
た ず 子
幸
倫 子
達 子
吐 来
度
歌 子
親 路
親 路
風 雲
醉 虎
稚 代
寿 子
朱 夏
正 坊
昭 子
紫 香
美 幸
岳 人
洋

少ない寄付で祝辞だけ長いひと
善人の祝辞がどこかきこえない
電文のような祝辞にしておこう
お祝辞の前におトイレ混んでいた
おさなりの祝辞へ耳が痒くなる

佳

ちよつとほめ過ぎたかいいという祝辞
入れかわり母を泣かしている祝辞
月下美人に祝辞を送る月明り
ライバルの祝辞 火縄の匂する
新語辞典をわざわざ買った祝辞

人

ぶらんこのリズム祝辞が長過ぎる
いい祝辞に出会い心の風が風ぐ
天

祝辞だけ言うネクタイを締めている
二度泣かせ三度笑わす祝辞です
軸

兼題「ぶらぶら」 津守柳伸選

ぶらぶらと何もせんから肩が凝る
働く気あるがぶらぶらさす不況
ぶらぶらと歩いた昔戎橋
ぶらぶらとさせぬ停年ない家業
法善寺ぶらぶら句碑と巡り逢う
イヤリングぶらぶらさせている未練
ぶらぶらと真昼 祇園の二日酔
賑やかな街でぶらぶら空財布

外 吉
希 久 子
丹 吉
冬 葉
薫
天 笑
醉 虎
森 子
寿 美
し げ 子
美 幸
雅 文
美 代 子
晴 生
章 久
庸 佑
雷 音
柳 右 子
憲 太 郎
道 胤
愛 論
豊 太

傍目にはぶらぶら野心燃えている
名利を選びぶらぶら古都のまち
良寛のプラブラ子供が追いかける
ぶらぶらとしてと皿が乾き出す
ぶらぶらとしている犬と仲がよい
一人ぶらぶらガイドの旗に叱られる
織田作を気取りぶらぶら法善寺
ぶらぶらとしてもやりくりうまい人
停年の靴はぶらぶら駅へ向く
秀才もぶらぶらさせる不況風
ぶらぶらと見える万引監視員
信楽の狸ぶらぶら見て歩き
プラブラと赤提灯の誘う街
心ぶらで妻はウインドーショッピング
ぶらぶらがちゃんと明日を読んでいる
檜山もぶらぶらして暇がない
ぶらぶらと暮し話の種にされ
隠れ家で尻尾を思い切り振ろう
プランコにゆれる男で職がない
心ぶらで昨日の人とまた出逢う
ぶらぶらと晴着見せたいばかりに
ぶらぶらと好きでしている訳でなし
ぶらぶらと祇園の鉾へ浴衣連れ
失業保険すこしぶらぶらしていよう

佳

三男 澄子 美幸 森子 一風 正雄 澄子 希久子 小路 親路 隆子 絹子 透太 吐来 諷云児 蕨児 鬼遊 英子 公子 柳宏子 利武 晴生 天笑 薰子 森子 英子

へちまぶらぶらとほけることがうまくなる
人
パレードの乳房が揺れているサンバ
地
さまざまな風に出逢った柿の色
天
結構な身分で好きに生きている
軸
一病息災ぶらぶら見える他人の眼
兼題「吸う」 西山 幸選
乳を吸う子を抱き折る幸がある
吸い込んだ空気が吐き出せないでいる
誰もいない昼の煙草を吸っている
本当のおっぱい吸った琢磨ちゃん
お乳吸う満足感に満ち足りて
亡母の胸を吸取紙にして哭いた
阪神の負けた夜デカイ息をする
深呼吸もつすぐ姑になりますの
旨い汁 吸い損なつた不眠症
吸い殻のひとつが抱えているドラマ
自分史の涙を吸わす原稿紙
お日様をしつかり吸った肌ざわり
根回して甘い空気を吸わされる
吸いかけの煙草をやめた好い話
頂点の空気を吸うてからの鬱
静止画像になりたくないオゾン吸う
ストローが知つたプラトニックラブ
うまい空気 島は昔のままだった

みつ子 正坊 雅文 笛生 柳伸 幸選 衛正子 文子 螢 昭子 笛生 倫子 美幸 みつ子 小路 吐来 シマ子 洋 だし 白溪子 美代子 澄子 正坊 酔虎

森の気をいっぱい吸って森を出る
他人さまの前では呼吸合う夫婦
センセイがたつぷりすった旨い汁
息吸えばひらひら胸に落ちるもの
お小遣い任天堂に吸い取られ
衣替え初心にかえる深呼吸
吸血鬼がふたりバートを辞められず
吸い殻の数だけ待ったことになる
毒のある花に吸われてみなくなる
祈る間に海に吸われてゆく夕陽
ガンになる煙草スパスバ吸う勇氣
思い切り吸ったのはああ排気ガス
無位無冠 軽い空気を吸っている
佳
呼吸まで合わせ女に惚れている
吸い殻にくすぶっているメランコリー
魚には水の呼吸がよく見える
自立した女がうまい煙草吸う
公害も吸うて都会の隅に生き
人
都会の空気を吸った花子は帰らない
地
錯覚を吸うストローが二本立つ
天
許さねばならぬと深く息を吸う
軸
ひっそりとおんなを生きる大気吸う

英子 重人 恭昌 小路 千歩 森子 吸江 公子 たず子 勝晴 房子 楓楽 歌子 朱夏 蕨児 洋敏 希久子 楓楽 晴生 みつ子 幸

兼題「毎日」 川島 諷云児選

生きる死ぬ毎日出逢うことだけで
 毎日がしあわせならばいいじゃない
 毎日見る山が暗い日明るい日
 よくもまあ毎日飯をかかさな
 毎日を軍鶏と闘う河内べん
 毎日の小言が妻の武器らしい
 飽きもせず毎日妻と飯を食う
 毎日をどっこいしょと生かされる
 毎日の散歩老人バスを持つ
 めりはりのある毎日を過ごしたい
 子供等に毎日見せている笑顔
 毎日をたった二合の米洗う
 面影を抱いて毎日書く日記
 猫の眼が毎日変わるのも刺激
 毎日チャンス合鍵もち歩き
 好きな人できて毎日悩んでる
 こんな顔 毎日してる訳でない
 妻には妻の毎日が有り布団干す
 毎日が日曜これでいいのかな
 遺言となり合わせている毎日
 無風地帯で日毎翔べない鶴を折る
 目がさめるたび黒髪よさようなら
 休まずに店開けてますお越しやす
 国会は毎日なにをしています
 伴せだと思つ毎日そう思つ
 美女になる暗示鏡にくりかえす
 毎日逢つていても飽きない人がいる

文子 柳影 二風 武庫坊 房白 保州 歌子 透太 柳伸 かすみ 洋敏 欣史子 たす子 みつ子 美代子 外吉 章久 鬼遊 美代子 雅文 公子

愛してる毎日言えるはずがない
 毎日が毎日違う日記書く
 毎日が日曜なのも疲れます
 減ってきた金庫 毎日開けてみる
 子離れの妻は毎日風船だ
 住
 良いことが毎日続くから怖い
 毎日がいくさトップが瘦せている
 毎日を猫と欠伸を繰り返す
 日に一度はチンジャラの音聞きにゆく
 アイラブユー毎日私言わされる
 人
 保険屋が毎日のち買いに来る
 地
 寝る前にいつもへそくり確かめる
 天
 管理職 毎日首を洗つて
 軸
 生きている証 毎日忙しい
 兼題「字」 里 小路選
 古文書の達筆憎い墨の色
 誤字脱字あって親しみわいてくる
 漫画文字 秋には嫁にゆくらしい
 億の字がいつか気持を麻痺させる
 筆持てば少しはましな字が書ける
 特選の草書通じぬ腕を組み
 半分は読めぬ草書でできた手紙
 やんわりと草書で諭す母のふみ
 いわゑ 笛生 鬼遊 しげお 晴生 小路 柳伸 雅文 醉虎 親路 蕉 保州 外吉 風云児 笛生 欣史子 稚代 親路 蛭来 美代子 柳伸

大好きな愛という字はでかく書く
 威厳ある書体に亡父の声を聞く
 ひらかなを散らすおんなの情となる
 婦人会のコラムに怖い字が並ぶ
 大の字になれるわが家の灯があかい
 恋文を書くときの字も燃えてくる
 凄いの達筆 凄いの女に違いない
 この人の顔が浮かんでくる文字だ
 追伸の文字から本音ころげ落ち
 生字引 家では用のない男
 忠実な部下できちんと数字書く
 そろそろと母の手紙の字の乱れ
 方言のかたちで老母の温い文字
 出稼ぎの無骨な文字が温かい
 結ばれてどっちも下手な字とわかり
 契約の細字にあった落し穴
 走り書き自分の書いた字が読めぬ
 師の便り一字一字を胸に置く
 伝えたい事は楷書で念を押す
 裏切った男を責める女文字
 私ならスラスラ読める母の文字
 写経する一字一字が持つ祈り
 ワープロの達人が書く下手な文字
 先生に習った字から脱皮する
 住
 ハングル文字のお店へキムチ買いに行く
 忍の字を背負い女が燃え尽きる
 元気だと元気な文字で来た便り
 父の名を一字もらつて出世せず
 弘直 外吉 幸 天笑 雅文 雀踊子 透太 森幸 美幸 庸佑 吸江 洋敏 昭子 美代子 章久 紫香 鬼遊 雀踊子 天笑 いわゑ 幸 外吉 洋 天笑 歌子 風云児 楓楽

筆が立つ女が嘘を書いてくる

人

豊太

丸文字を書いた漫画も母になり

地

森子

嘘という字をいくたびも書きなおす

天

幸

小学校しか出てないけれど達筆で

軸

笛生

お隣へなにかと頼む字の苦手

小路

兼題「朱」

橘高薫風選

めでたい日 日本中朱に染まりそ

初恋のそれはきれいな珊瑚の朱

そよ風につて朱色の花だより

歩み寄り出来てきれいな朱になる

朱の橋を渡って逢いにゆく小紋

原稿を朱で切り刻む編集者

自叙伝に朱を入れてゆく妻の指

朱を入れる度に私を見失う

古文書の朱の点に謎がある

拇印押した指先の朱が痛みだす

拇印押す朱肉に少し罪意識

達筆の色紙 朱印の位置正す

落款の朱が鮮やかな一字の書

落ちてなお煩惱を抱く椿の朱

鳥居の朱 昔はものを思わざり

どの位置から見ても太陽朱に光る

歌舞伎町 青いリングを朱に染める

消えかかる虹に朱を足す余命表

たず子

目尻に朱 人形の貌生きてくる

好きだった朱色富士の絵父の部屋

朱印帳あの日の友はソロモンで

落陽を拝む戦後史五十年

バレットに仲良くとける朱と緑

朱蠟燭一本 生死の泪流す

情熱も一息したい朱と緑

溜息も嘘も蝨も吐く朱唇

生き方に父が一杯朱を入れる

朱を入れたからには異存言わさない

火砕流ふるさとの川朱に流れ

おみなとは訣れる日にも朱を添えて

風花や朱の楼門に見惚れたり

朱の衣 僧に感傷多かりき

赤鬼のように怒ったことがない

朱の色は孤老の部屋に温かし

朱の葵むかし栄えた城下町

鶴を折る指の先まで朱に染めて

繰り返す愚も女なりバラの朱

まだ未練 朱肉のうすい離縁状

交われれば朱になる人に憧れる

朱に染まる方が楽だと思ってる

朱線引く 一人ひとりに手を振って

七夕や春信の朱と路郎の朱

七夕や春信の朱と路郎の朱

七夕や春信の朱と路郎の朱

七夕や春信の朱と路郎の朱

露児

章久

晴生

千歩

房子

哲夫

正雄

朱夏

美房

二南

美幸

眉水

重人

隆

英子

いわゑ

希久子

親路

諷云児

欣史子

薫

薫

薫

薫

薫

薫

薫

全日本川柳愛媛大会 秀句

6月13日 愛媛県民文化会館

「澄む」

塩見 草映選

菩提樹のしずくはいつも澄んでいる 森 恵子

空澄んで木偶が哀しいまで喋る 山本ひさゑ

「秘話」

波多野五葉庵選

秘話洩れて渦中の人となつてゆく 西村美智子

臍の緒に母と子だけの秘話がある 中山 雅城

「少年」

吉岡 龍城選

少年が繫げば一つになる世界 佐藤 曙光

少年の今しか出来ぬ事がある 川見 絹子

「雲」

桜井 豊泉選

八月の雲ケロイドが疼きだす 藤本 鬼道

真ん中に母が座ると暗れる雲 今井 白柳

「線」

住田英比古選

軌む日もあつた線路を振り返る 川島諷云児

一直線を貫く父の火よ風よ 木野由紀子

「海」

石原 伯峯選

埴輪の目ヒミコの海を凝視する 大橋 政良

海鳴りの果てに逢いたい人がいる 有田 愛子

「全」

大木 俊秀選

少し笑って全巻を締めくくる 兵頭まもる

全うに生きてお辞儀をくり返す 宇都宮広二

柳界展望

編集部

えてくる

西出 楓葉

★川柳たましま創立35周年記念大会は5月23日、187名が参加して玉島信用金庫本店で開かれ、玉島商工会議所会頭賞を八木千代さん、玉島文化振興会長賞を小林妻子氏が獲得した。

★田中五呂八句碑建立除幕式が5月23日午前11時から小樽住吉神社境内で行われ、つづいて祝賀川柳大会がニュー三幸で開かれた。

★川柳塔あおもりの平成4年度賞は小寺花峯・田中叶両氏に贈られた。

★第13回鳥取県川柳作家協会賞は一席(日満賞)に門脇かずお、二席に町よし江三席に青戸千絵の各氏が受賞した。

★平成4年度のいくしま月間カップ賞は春城年代さんに決定した。

★日本川柳ペンクラブ創立3周年・第1回ランド賞表

彰式および記念句会は8月29日、東京・池袋の八峰閣ホテルで開く。宿題(事前投句)は、天〳今川乱魚選▽地〳橋爪まさのり選で、投句は整理費500円を同封、7月15日までに日野市東豊田1-4-17・日本川柳ペンクラブ事務局へ。入賞者全員に記念品、高ポイントに染筆・柳書呈。

★第20回沼津市文芸祭の作品募集が行われている。川柳は1人1句で応募料1000円を添え、7月31日までに沼津市御幸町16-1・沼津市役所社会教育課文芸祭係へ。発表は10月1日。

★倉吉市制40周年農業博打吹川柳大会は8月10日、倉吉体育文化会館で開催される。兼題と選者は、倉〳仲川たけし▽農〳野村太茂津▽博〳小林由多香▽フルーツ〳八木千代▽打〳石原伯峯▽吹〳両川洋々▽天女〳

小西雄々▽盛〳恒松町紅で各題2句、投句拝辞。

★『川柳なごや』650号突破記念川柳大会は8月29日、愛知県芸術文化センターで開く。宿題と選者は、発展〳梶川雄次郎▽開く〳脇屋川柳▽しなやか〳渡邊蓮夫▽真ん中〳加藤翠谷▽丸味〳野口初枝▽試鍊〳藤本静港子▽窓〳北川絢一朗▽先輩〳吉原辰寿(各2句)会費1500円

★第48回尼崎市文芸祭大会は9月5日午後1時から同市立中央公民館で開く。各部門の入賞発表・作品研究があり、「先人を超えて」芭蕉から蕉村へ」と題して笠原芳光京都精華大学教授が講演する。

★第9回国民文化祭文芸大会は平成6年10月23日、三重県津市で開かれる。川柳作品募集は3月1日から5月31日までの予定。

▽出版△

■西尾菜「水鶏庵こらも散歩」(A5判・220頁・2000円) 東野大八序文・「川柳塔」の巻頭言・ずいそうなど48編を収録。

▽芳志△

■いずも川柳会から本社に對し、金一封をご寄付いただきました。

■土居ひでのさん(大原川柳社)から句集発行内祝として金一封を拝受しました。

▽計報△

■後安江山さん(本名久江・久世川柳クラブ同人・本誌誌友)は5月9日、脳溢血のため死去、80歳。告別式は同11日、行われた。

▽訂正△

■6月号〳P42下段8行目「紫陽・忌達いたい人が一人いる」↓「紫陽花忌」▽P90上段20行目「一分の遅刻・一年石背負う」↓「一分の遅刻・一生石背負う」

★第5回時の川柳交歓川柳大会は5月9日、神戸市立福祉センターで187人が参加して開かれたが、本社同人の林荒介氏が兵庫県知事賞、門谷たずさんが神戸新聞社賞、小島蘭幸氏が時の川柳社賞を受賞した。

★尼崎春の川柳大会は5月9日、サンシビック尼崎で開かれたが、本社同人の3氏が秀句に入選、辻白漢子田中薫・川島颯云児・春城武庫坊の4氏が準秀句に選ばれた。

ランチジャー私の笑顔詰めておく 田中 正坊 燃える火が家の方角だから走る 黒川 紫香

旅三日見えないものが見

暑中お見舞い申し上げます

西宮北口川柳会

例会 毎月第2月曜日午後1時 西宮市中央公民館
(阪急電鉄神戸線西宮北口下車南西5分)

事務局および投句先

〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ

黒	門	奥	奥	上	朝	秋	黒
田	谷	山	田	田	山	元	川
能	た	美	み	佳	千	て	紫
子	ず	智	つ	秋	世	る	香
	子	子	子		子		
吉	山	丸	藤	春	春	林	西
田	崎	山	村	城	城		口
笑	君	よ	へ	武	年	は	い
女	子	し	女	庫	代	つ	わ
		津		坊		絵	ゑ

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔社常任理事会

常任理事					副理事長		副主幹	理事長	主幹			
川島	河内	河内	神谷	奥田	榎本	板尾	阿萬	西田	野村	黒川	橘高	西尾
諷云児	月子	天笑	凡九郎	みつ子	吐来	岳人	萬的	柳宏子	太茂津	紫香	薰風	栗
吉岡	宮園	宮口	春城	西出	辻	玉置	田中	高杉	塩満	小出	小池	
美房	射月芳	笛生	武庫坊	楓楽	白溪子	重人	正坊	鬼遊	敏	智子	しげお	

暑中お見舞い申し上げます

夏バテになりませぬように

1993年 盛夏

第14回“川柳塔鹿野みか月”記念川柳大会は
今秋、11月14日（日）に開催いたしたく
皆様のご支援を心からお待ち申しております。

川柳塔鹿野みか月

☆事務局 〒689-04 鳥取県気高郡鹿野町鹿野1279 中原諷人方
電話 (0857) 84-2100

暑中お見舞い申し上げます

翠 洋 会

児 栗 北 片 奥 岡 梅 内 上 稲 井 市 池 中 山 高 橘
玉 谷 田 上 田 本 田 田 田 本 上 野 田 西 根 杉 高
春 綾 英 み 久 宣 結 佳 凡 照 友 登 兼 鬼 薫
蛙 子 子 一 つ 峰 司 実 秋 子 子 美 志 治 っ 遊 風

渡 米 山 堀 堀 古 藤 藤 西 中 寺 田 高 住 神 清
部 田 本 江 谷 村 井 出 村 井 中 杉 谷 保 水
さ 恭 希 光 良 ひ 宏 正 楓 叡 東 正 千 石 拓 絹
と 昌 久 子 江 子 子 雄 楽 子 雲 坊 歩 舟 生 子
美

暑中御見舞

申し上げます

城北川柳会

連絡先

〒675-01

加古川市平岡町新在家二〇〇六一八

吐田公一

電話（〇七九四）二二二三六八一

暑中お見舞い申し上げます

高槻川柳サークル卯の花 一同

暑中お見舞

岸和田川柳会

橘高薫風	西田柳宏子	阿萬萬的	福浦勝晴	深日白光子	真崎浪速子	内田一弥	楊井二南	宮園射月芳	中野恵空	田中文時	三輪通彦	辻翠子
小林すみえ	芳地狸村	岩佐ダン吉	高橋操漕	林春栄	島崎富志子	清野こう	古野ひで	原さよ子	藪野ケイ子	寺田甚一	上田真柳	

暑中お見舞申し上げます

三幸川柳教室一同

事務局 〒640-01 和歌山市西ノ庄239-23

桜井千秀

もくせい川柳会

三満枅春辻玉田滝栗木北岡江安黒橘
宅仲本城川置中北原村山本口藤川高
つき路武慶英正博富一悟吉明寿紫薫
えく子庫庫坊子子坊史子笛郎郎光子香風

定例会 毎月第3月曜日 豊中市立中央公民館

暑中お見舞い申し上げます

山前古中富玉滝黒木岡奥岡江稲月湯井橘
田田川田永置北崎村田本口葉原浅上高
他光昭喜純敞英博恭一幸し吉太明眞方馬直薫
同也子子次子子史子笛子え郎光郎郎洗次風

ほたる川柳同好会

毎月第2火曜日午後1時から豊中市螢池公民館にて毎回薫風先生の御指導を受けております。 申込み・お問合せは 06-841-5265井上まで

暑中御見舞

サークル 檸檬

暑中御見舞

申し上げます

はびきの市民川柳会

徳山みつこ

芦田絢子

山本たけし

塩満敏

榎本吐来

福田悦子

暑中御見舞申し上げます

笠	吉	中	中	福	高	菊	赤	高	楠	高	田	吉	三	武	田	児
原	岡	原	島	元	津	地	木	田	田	田	田	田	崎	部	中	島
吸	美	比	志	みの	三	繁	和	美	昭	治	つ	伴	敦	孝	与	他
江	房	呂	洋	る	郎	男	子	代	子	子	子	子	子	子	志	一
		志						子							同	

寺井藤柳川

東大阪市川柳同好会

会 長 ^{カタ}片 ^{オカ}岡 ^コ湖 ^{フウ}風

会 員 一 同

南大阪川柳会

会 員 一 同

暑中お見舞申し上げます

八尾市民川柳会

会員一同

尼崎
いくしま川柳会

例会 毎月第一金曜日午後一時

サンシビック尼崎三階
(阪神尼崎駅西南三分)
各地句会案内を御覧下さい

尼崎
おはま川柳会

例会 毎月第一、三火曜日午前10時

尼崎市尾浜二丁目五十八
尾浜公民館

尼崎
小園川柳会

例会 毎月第二、四水曜日午前10時

尼崎市若王子三丁目二一
小園公民館

暑中お見舞申し上げます

川柳塔まつえ吟社

会員一同

〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅方

TEL (0852) 24-5450

お暑うおます

笠	奥	松	竹	藤	川	小	辻	松	阿	黒	正
嶋	山	川	内	村	島	池		川	萬	川	本
恵	美	芳	花	女	諷	し	白	杜	萬	紫	水
美	智	子	代	児	云	げ	溪	的	的	香	客
子	子	子	子	子	児	お	子	的	的	香	客

暑中御見舞

京都塔の会

松川杜的
都倉求芽
高沢栄
松川芳子
小林英子
山田葉子
本莊福子

姫路川柳化粧櫓の会

平成五年盛夏

暑中お見舞い申し上げます

服部一典

川島春蘭

丁坪サワ子

内海美代

松浦大鷹

菅原朱玉

北山越山

本多茂章

大原葉香

美原嘉

保西岳詩

福島姫女

植村客遊子

丸尾はる子

駒井はる女

中塚遊峰

川柳たけはら

〒725 広島県竹原市竹原町4535-5

小 島 蘭 幸 方

暑中お見舞い申し上げます

平成五年 盛夏

会 会

計 長

山 古 古 岩 藤 古 石 岡 三 森 時 岩 小
内 田 田 本 解 谷 原 本 宅 井 広 本 島
ほ 房 比 太 文 静 節 淑 清 不 菁 一 笑 蘭
か 一 呂
同 子 子 虚 晴 風 夫 子 水 朽 居 路 子 幸

暑中お見舞い申し上げます

川柳塔わかやま吟社

主幹 顧問

坂口公子	黒瀬登紀夫	北山好笑	北山凡太	柿花紀美女	尾田綾子	小倉アサ	大野武太	内芝登志代	上杉信秋	岩崎瑞穂	岩倉天彦	伊賀政一	牛尾緑良	野村太茂津
------	-------	------	------	-------	------	------	------	-------	------	------	------	------	------	-------

中島正博	中井栄美子	富上光代	天満三千子	寺田裕美	辻本守	千原淳太郎	垂井千寿子	玉井豊太	谷口信子	田中輝子	田口よしみ	杉山精子	塩谷佐代子	坂部紀久子
------	-------	------	-------	------	-----	-------	-------	------	------	------	-------	------	-------	-------

若宮武雄	横垣久忠	山田恭子	守内三枝子	森口克子	宮原寿子	松田勝	前田三男	堀端稚代	細川英子	福本和子	福田和成	西村忠雄	西口忠雄	中根勇太
------	------	------	-------	------	------	-----	------	------	------	------	------	------	------	------

事務局および投句先

〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良

7 月 各 地 句 会 案 内

	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
堺川柳会	1日(木)午後1時から 辿る・判断・嬉しい・顔	堺市総合福祉会館 南海高野線堺東駅市役所西入る 〒593 堺市堀上緑町2-16-3 河内天笑
尼 崎 いくしま	2日(金)午後1時から うろうろ・腹・川・自由吟	サンシビック尼崎 阪神尼崎南西徒歩3分 〒661 尼崎市武庫之荘5-25-17 春城年代
川 柳 塔 ま つ え	10日(土)午後1時半から 風 船・予 感・夏帽子	松江市雑賀町雑賀公民館 〒690 松江市雑賀町1686 恒松町紅
川 柳 塔 わかやま	11日(日)午後1時から 内 緒・情 け・西 瓜	近鉄カルチャーセンター2F JR和歌山駅前 〒641 和歌山市紀三井寺111-2 牛尾緑良
西宮北口 川 柳 会	12日(月)午後1時から ガラス・許す・さっぱり・自由吟	西宮市中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩5分 〒663 西宮市高木東町9-4 西口いわゑ
八尾市民 川 柳 会	14日(水)午後6時から 開 く・魚・上 達・筆	八尾市立労働会館(山本) 近鉄山本駅すぐ 〒581 八尾市上之島北1-15 宮崎シマ子
高槻川柳 サークル 卯 の 花	15日(木) 正 午 から 傘・空気・枕・自由吟	高槻現代劇場306号室 阪急高槻駅徒歩5分 〒569 高槻市宮田町3-8-8 川島颯云児
富 柳 会	15日(木)午後1時から 癖 ・ 砂 ・ 揺 れ る	富田林中央公民館 〒584 富田林市南大伴町4-1 池 森子
南 海 川 柳 会	16日(金)午後6時から 修業・正体・知人・溜息	玉造老人憩いの家 JR環状線玉造西徒歩3分 〒543 大阪市天王寺区空堀町15-18 寺井東雲
川 柳 ねやがわ	18日(日) 正 午 から 海・一枚・ロボット・自由吟	寝屋川市立総合センター 寝屋川市駅からバス総合センター前 〒572 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
もくせい 川 柳 会	19日(月)午後1時から 夏・手本・ようやく・自由吟	豊中市立中央公民館 阪急曽根駅東南歩5分 〒561 豊中市島江町1丁目3番5-801 田中正坊
南 大 阪 川 柳 会	19日(月)午後6時から 温顔・心得・背く・とめる	寺田町高松会館 JR環状線寺田町駅南100米 〒544 大阪市生野区生野西1-5-2 金井文秋
岸 和 田 川 柳 会	22日(木)午後6時から サンプル・裾・責める・粗品	市立福祉総合センター 南海線岸和田駅南東歩5分 〒596 岸和田市上松町610-85 芳地狸村
京 都 塔 の 会	23日(金)午後1時から 沖 ・ 茂 る ・ 面 倒	京都府南労働セツルメント 近鉄東寺駅西徒歩3分 〒601 京都市南区西九条開ヶ町41-1 松川杜的
東大阪市 柳 同 好 会	24日(土)午後6時から 夕立・扇子・マイク・河童	東大阪市立社会教育センター 近鉄布施北へ長堂小学校隣 〒578 東大阪市稲葉3丁目3-21 片岡湖風
はびきの 市 民 会 川 柳 会	25日(日)午後1時から 欠伸・おみくじ・ナイター・(景気)	羽曳野市立陵南の森公民館 〒583 羽曳野市高鷲8-31-11 塩満 敏

★日時・会場などが変更になる場合は、西出楓楽(06-762-4408)へご連絡下さい。

編集後記

★特集と言うほどではないが、「出会い」をテーマに八人の同人にすいそつを書いていた。私にも、さまざまな出会いがあったが、いちばん忘れられないのは、今は亡き白岩文衛君との出会いであり、彼の生涯一冊の句集である『出会い』の編集・発行にかかわったことである。

★文衛君の思い出は、本誌にも何度か書いたので繰り返さないが、今でも折りにふれてこの句集を書架から取り出して眺めることがある。彼自身、若い時に出版の仕事を手がけたこともあるだけに、編集から装丁までほとんど彼の希望どおりに仕上げ、私は印刷所への中継ぎと校正を手伝うにおわった。だから自画自賛に

はならないが、ほんとうによくできた句集だと思う。

★もともと私は、もったいぶったことがきらいで、本は中身さえちゃんとしておれば、厚化粧は不要であると考えている。この句集の場合、彼は用紙から製本に至るまでせいたくな注文を出し、貧乏性の私がそれとなくかけるブレーキも効かず、出費を惜しまなかったことが思い出される。

★しかし、今日になってみると、これでよかったとつくづく思う。藍色の紬の表紙に朱色で印刷された西尾栗主幹の題簽、ケースと同色の見返しに描かれた直原玉青画伯の装画。句や文がその人をあらわすように、内容・外観をふくめた本全体が著者のイメージを示すとなると、装本もおろそかにはできない。あれから早や十年が過ぎた。(正)

ひとこと

川柳の背骨とは

諷刺は川柳の背骨である。古川柳の三要素とは隔絶した現代の川柳においても、諷刺は川柳の骨格ともいふべきである。諷刺は批評の精神であり、批評精神は文学の動機なのであるから、現代の川柳が文学を自覚する時、まず諷刺ありき、と言ふべきであらう。

そして、カルチャー時代の仲よし川柳が、古川柳に洋服を着せたいものか、危機感のない骨抜き川柳に墮している現実を見る。念のために言えば、諷刺とは、上すべりな時事吟にみる、あてこすりや揚げ足取りは論外であり、生きもののかなしみ、苦しみ、生きることの残酷などが対象なのであって、作者自身もまた、批判の一対象であるという認識が前提なのである。

加納 司

☆「お父さん、今日ね、大五月病なのか、息子のこきい毛虫がいたよ」「どこに？」風呂場からの流し水の句と共に、楽しそうな会話の散歩の時の光景である。

☆「夜九時すぎの散歩の時の光景である。残業疲れか、重そうに鞆をち止って、ゆっくり眺める松の枝ぶりは面白いと立ち止って、ゆっくり眺めることが出来るのも、夜だからこそのことである。塾帰りの子供たちが、大声で喋りながらの自転車は無灯火。遠くでは千鳥足の紳士が、すれ違ふ時には、急に真っ直ぐ止っては考え込んでいる。(正)

☆「けの汁」の汁を吸い産声聞いている(為)。「けの汁」が分からない。電話すると「青森の郷土料理」との返事。本人の書き間違ひもあるし、本人の思いをこめた造語、土地の言葉など、校正の時に、分からないことは電話しますので、よろしくお願い致します。(み)

作品募集

川柳塔 (10句) 西尾 栞 選
水煙抄 (10句) 黒川 紫 選
銀河系 (3句) 河内 天 選
茴香の花 (3句) 小智 子 選
吟題 (3句) 「味 噌」 吉村 一 選
「願 う」 白根 風 選
「ひらたい」 大坂 形 選
初歩教室「ガラス」 (3句) 吉岡美房担当

9月号発表 (7月15日締切)

★川柳塔欄は同人、水煙抄欄は誌友、茴香の花欄は女性、その他はどなたでも投句できます。

10月号 課題吟 「ダンス」「ゆっくり」「除 く」
初歩教室「呼 ぶ」

本社7月句会

日時 7月7日(水) 午後5時半
会場 メンズファッションセンター3階
中央区内本町1-1 電06・941・1918
地下鉄谷町4丁目下車(3番出口)交差点南西角
兼題 「ゆっくり」 吉川 美 選
「振 る」 吉岡 房 選
「風景」 春城 武庫坊 選
「高い」 磯野 いさむ 選
「帆」 西尾 栞 選
投句料 310円(62円切手5枚)同封のこと
投句箋 (4cm×19cm) 1葉に1句を書き、
句費 500円
1題 当日発表 各題2句以内

本社8月句会 9日(月)

兼題 「すんなり」「過 失」「切 る」
「深 い」「舌 」

夜市川柳募集

第2回「家」 高杉 鬼遊選
ハガキに3句 7月末締切
投句先 〒593堺市堀上緑町2-16-3
河内天笑方 堺川柳会

NHK川柳作品募集

課題「他人」 橘高 薫風 選
ハガキに3句 7月10日締切
投句先 〒540 大阪市中央区馬場町3-43
NHK大阪放送局
「ラジオセンター」川柳係
発表 7月25日(日) ラジオ第1放送
午前11時5分から

西日本文字放送作品募集

課題「見 舞」 橘高 薫風 選
ハガキに3句 7月15日締切
投句先 〒540 大阪市中央区谷町2丁目2-20
大手前ウサミビル3階
西日本文字放送 川柳係

〒545

定価 六百元(送料56円)

半年分 三千八百円(送料共)

一年分 七千五百円(同)

平成五年七月一日発行

編集兼 西尾 心 社 蔵

印刷所 藤原 童 社

大阪市阿倍野区三木町二〇一六

ウエムラ第2ビル202号室

発行所 川柳塔社

電話 (06) 691-1456

振替口座大阪8-133368番



白島海岸

潮騒のリズムに
身をゆだねて
心地よくつろぎを

国立公園 隠岐の島

施設のごあんない

収容人員 45名

客室 13室

舞台付広間 42畳

駐車場 乗用車10台

冷暖房完備

きん ぶ そう
旅館 金峰荘

〒685 島根県隠岐郡西郷町

TEL (08512) 2-1427 FAX (08512) 2-2330

元湯
八尾天然温泉
ジパング日本海

ホテル・温泉・健康ランド

美人になるお湯 元気になるお湯

宴会に 研修会に 宿泊にどうぞ

●お問合せ・ご予約は… 〒581 大阪府八尾市八尾木北5丁目101番地

TEL (0729) 94-3591(代) FAX (0729) 92-0621